

第4回

西の正倉院

みさと文学賞

作品集

「西の正倉院みさと文学賞」実行委員会・編

第4回「西の正倉院 みさと文学賞」に寄せて

美郷町を含む西北山間地域は、日本穀物検定協会の主催する米の食味ランキングで3年連続最高の「特A」に輝いた。うまい米は、肥沃な土壌や気象条件はもとより、生産者のきめ細やかな管理が絶対条件である。ところで、美郷町には、平安時代から受け継がれている「御田祭」（おんださい）という稲作文化がある。重労働の田植えが終わり、ホッと一息ついた「さのぼり」として五穀豊穡と無病息災を願う祭り、神田を若者が裸馬に乗って勇壮に駆け回るシーンが有名で「師走祭り」「宇納間地蔵尊大祭」と並ぶ美郷3大祭りの1つである。

この稲作文化を育んだ美郷町は自然に恵まれた風光明媚なところで、四季折々の様々な彩りを魅せてくれる。現在、ご多分に洩れず少子高齢化や人口減少といった社会的課題を抱えているが、「誰一人取り残さない」精神のもと、未来志向の24行政区の「地区別定住戦略」の策定が進められている。先人・先達が築き積み重ねた有形無形の資源を止揚し、彩りあるストーリーにして紡いでいく作業は、私達にとって喫緊の課題となっている。この町づくりに対応するのが文化活動である。美郷町には、小野葉桜（本名岩治）という、あの国民的歌人若山牧水と親交のあった歌人がいた。この郷土の歌人を第2回のみさと文学賞で優秀賞を受賞した悠井すみれさんが「唄をうたひて」の作品で取り上げ、「西の正倉院と百済王伝説（美郷のキセキ）」に続く、第2弾としてこのたび漫画

化される運びとなった（令和4年刊行予定）。美郷町は、小野葉桜を顕彰するため、平成元年「葉桜短歌賞」を設けて全国から短歌を募集するなど活動を行っているが、創設当初からご支援・ご指導いただいているのが、歌人伊藤一彦先生である。伊藤先生には、今回の漫画化の監修もいただいた。そして、この文学賞創設の取り組みやこれまでの入賞作品も高く評価し、「心おこし」の町づくりと表現され、地域おこしがともすれば「物」に偏りつつあるのに対して、「心」に重きをおいた試みだと称賛してくださった。

この第4回の文学賞に、今回も多数の応募があった。どれもが選考委員をうならせる作品だったと聞いている。応募いただいた方々に心からお礼と感謝を申し上げますと同時に、今回も選考にあたっていただいた、審査委員長の作家・中村航先生、地域創生プロデューサーの高野誠鮮先生、民俗学者の遠志保先生、関係諸氏に敬意とお礼を申し上げます。

令和4年2月中旬、コロナ禍でオミクロンという変異株によって、さらに感染者が急増して、本県でも「まん延防止等特別措置」の適用地域になった。人類は、物質的發展とその生産過程における人間関係の規律によって大きな社会生活上の「自由」を手に入れたが、新型コロナウイルスの感染拡大によって「自由」の制限を余儀なくされている。だが、外形的な自由制限があっても精神的自由は大きく羽ばたく必要があるし、その意味でこの文学賞に寄せる期待は決して小さくないと想っている。

宮崎県美郷町

目次

第4回「西の正倉院 みさと文学賞」に寄せて

宮崎県美郷町

2

総評 作家 中村航

6

大賞

「ドンタロ姫とコニキシ太郎」希望

9

優秀賞（日本放送作家協会賞）

講評 日本放送作家協会理事 長さらだたまこ

「第百四回みさと文学賞受賞者」青井円

33 30

優秀賞（MRT宮崎放送賞）

講評 宮崎放送 ラジオ・ディレクター 小倉哲

「海笑う」林野浩芳

63 60

「草王宮」市川謡

85

佳作

「オサラバー」いつき

109

「御田祭」夢酔藤山

133

「百済王伝説」宮内露風

147

「姫さま、家を出る」松田紙弥

181

「流浪にうつろう沙羅双樹」潮楼奈和

211

一次審査通過作品リスト

246

お知らせ

247

総評

作家
中村航

第四回と回数を重ねた「みさと文学賞」だが、毎回、新しい発見がある。美郷町の魅力の発見、ということもあるのだが、その魅力の表現の仕方として、そうか、こんな方法があったのか、という新鮮な驚きが毎回ある。

今回、大賞に選ばれたのは「ドンタロ姫とコニキシ太郎」で、これは過去の全ての応募作のなかでも異色作にして意欲作といってもいいだろう。語り口に方言を織り交ぜた昔話ふうのファンタジーで、一行目から読ませる。選考会では新作民話として語り継ぎたいという声もあがった。

力自慢ドンタロと、王という意味の名を持つコニキシの邂逅からこの話は始まり、その娘と息子の、情熱的で不思議な恋が進む。作者は悲恋の物語を、昔話の持つ抽象性や象徴性を存分に活かして、描ききったと思う。

MRT賞の「海笑う」について詳しい選評は他に譲るが、こちらは、かつて一体だった二人が別々の道を進む骨太の物語が、力強い筆致で描かれていた。

審査員特別賞の「草王宮」は、筆力すばらしく、この短い分量で、世界観やテーマ

を見事に描ききっていた。官能表現が多いことが選考会では議論の対象になったが、良い意味での問題作であることは間違いなく、審査員特別賞を贈らせていただくことにした。内容は凋落の国における名ばかりの王への夜伽を命じられた土着の娘の、成長譚だ。

恋とは呼べないような二人の関係性の進展は官能的で、根源的な生を感じさせた。与えられた場所で生き抜こうとする主人公が魅力的で、現代性すら感じさせた。

最後に佳作の五作品について、スペースの許す限り触れさせていただく。

「流浪にうつろう沙羅双樹」は平家物語の時代と百済の物語をテーマにしたのが新鮮だった。話として良くまとまっておリ、選考会での評価は高かった。「姫さま、家を出る」はパディものとして楽しく読め、ラストに向けては感動的な小説だった。文章力も高く、ともかくキャラクターが健気で魅力的だ。タイトルも良い。「御田祭」は明治時代の西郷村の祭をめぐる小説。祭を仕切ることになった主人公や、それに協力する若者の姿や本質は、現代の祭と変わらないのだな、としみじみ思わせる佳品。「百済王伝説」はこれまであまり見たことなかった、少年百済王の小説。成長小説として、冒険小説として、ストレートに読めて好感度が高かった。「オサラバー」はライトなタッチで主人公と双子の妹との再会を描いた小説。若年層にも読みやすく、師走祭という舞台が上手に使われていた。

大賞

「ドンタロ姫とコニキシ太郎」

希望



むかしむかし、あつたげな。

海の果てからおてんとさまが顔を見せる国の、山ん奥の水が豊かな郷に、おせりさんともおせりさまとも呼ばれる、ふてえふてえ滝があつたげな。

おせりさまの麓には、ドンタロっちゅう、ふてえ力自慢が屋敷をかまえちよつた。

ドンタロの名は海こそ越えんかつたけど、いくつもの山を越えて轟くほどで、近隣の村人々に畏怖されちよつたと。

ある日のこと、コニキシと名のるもんが息子といくばくかの兵を連れ、ドンタロの屋敷を訪ねてきよつたと。

コニキシっちゅうのは「王」の意味で、こんコニキシがまこちの王なんかは知らん。けれどん身につけたもんや所作からして、高い身分の教養人なのはたしかじやつたと。

コニキシは、

「船旅で嵐に襲われ、この美しい郷に辿り着きました。素晴らしいところなのでしばらく腰を落ちつけようと思いましたが、そういうことならドンタロどのご許可をと村人に言われまして、ご挨拶に参上いたしました」

と、ドンタロに頭を下げた。

ドンタロはしかめつらでなんも応えねえ。

かわりにドンタロの背後に控えちよつた細長い女が、

「嵐じゃなくて乱に襲われたじゃがね」

と、真つ黒な歯を剥きだして言うたと。

つづいてお齒黒女のととなり、四角い顔の武者が、

「旅じゃなく追われて逃げちよるんじやろ」

と、甲冑をがちゃがちゃ鳴らして言うたと。

じつはコニキシ一行、乱で国を追われたことを隠しちよったもんだから、ひったまげた。右も左もわからん田舎もんとドンタロを侮っておったが、背筋がぴんと伸びたげな。

ドンタロが、

「ぬしん子のどっちか寄こすがねえ」

と、コニキシの背後にいる息子を涎を垂らしながら見たと。

息子を寄こせとはどういう意味か、コニキシがドンタロの言葉を図りかねていると、

「わしん姫を娶らすじゃが、どっちか選ぶがねえ」

そうドンタロがつづけたげな。

息子を喰われるか人質に取られるかと思つたコニキシは安堵の息を漏らしたと。

コニキシには太郎と次郎の二人の息子があって、跡継ぎの太郎にはおいそれと嫁はとれんが、次郎ならとコニキシは考えたげな。

するとそれを察した次郎が、

「田舎娘など娶れません」

と、先手を打ちよったげな。

コニキシは困ったと。そんな無礼を口にすりや、結婚どころかこん地に身を隠すことができなくなるげな。

さらに次郎は、

「しばし身を隠すだけ。こんな田舎に長居するつもりはありません。妻など不要です」

そう言うたもんじゃから、コニキシは顔面蒼白だげな。

お齒黒女は口を裂けんばかりに開き、

「こんぼっけもん、首へし折っちゃるかね」

長い舌をちらちらさせた。

四角い武者は立ち上がり、

「首つことって都に届けるんはどうじゃが」

ぎざぎざのふてえ剣を二本抜いて次郎に向けたと。

とうの次郎は平然としちよるが、コニキシは冷や汗たらたらじゃげな。

どげんとせんかいかん、そう考えた太郎は、

「ご無礼どうかお許しくください。私でよろしければ喜んで姫様を娶りましょう」

と、頭を垂れたげな。

「いっちゃが いっちゃが」

ドンタロがどすんと手を打つと、お爾黒女と四角い武者は腰を落ちつけ、部屋の隅におった八人の童子が戸をすうつと引いたと。

コニキシ一行はごくんと息を呑んだげな。

開いた戸の向こう、美しい光沢の緋色の着物をまとった姫が一人、白魚みてえな指をぴんと真つすぐそろえて座つちよつた。

墨で描き流したみてえな柳顔、ぬばたまみてえな黒髪に突きたての餅みてえな雪肌。花の都にもようおらん天下第一品、よかおなごじやげな。

姫は一礼すると、

「ようきたねえ。まこち嬉しいっちゃね」

金魚みてえに口をぱくぱくさせて、手水鉢に落ちる水滴みてえな声で言うたげな。すると次郎がぱつと立ちあがったと。

「私の妻となつていただきたい」

田舎娘など娶れぬと言うたもんが、姫にひとめ惚れしておかしくなつちまつたげな。太郎は驚いて、

「それは道理が通らぬであろう」と、声をあげたと。

太郎はおとなしいけれどん、いちど口にしたことは引っこめん性格で、約束はかならず守る律儀もんじやげな。結婚すると口にしまつたら結婚せんと気がすまん。

それでも次郎は悪びれもせず、

「嫡子たる兄上は貴族の娘を娶るべきお立場。次郎の私は田舎娘で十分にございます」と、お齒黒女と四角い武者にいらまれてもどこ吹く風で、堂々と言ひ放ちおつたと。

ドンタロは、

「口はひでえが度胸がええじやがあ。ええ武者ぶりじやがね」

もうもう笑いながら次郎を褒めると、

「けれどん礼儀正しい律儀もんもええじやがあ。姫はどうじやあ」

と、太郎も褒めてから姫を見た。

すると姫は、

「おせりさまのてっぺんに生えちよる柚子の木から、ひとつ実をいでくるつちゅうのはどげんかね。うちは甘い実をいだ御方に嫁ぎたいつちやがね」

葉を打つ雨みてえな声で口をばくばく言うたと。

コニキシ一行は何の話かわからんけども、

「じやがじやが、さすがわしん姫じやがあ」

そうドンタロが床を踏みならして賛成すればなんも言えんで、兄弟はいのすの実の味で勝負する

こつになつたげな。

おてんとさまが一番ぎらぎら輝くころ、太郎と次郎は柚子の木を求め、おせりさまのてつぺんを
目指したげな。

次郎は危険を冒して絶壁をすいすい登っていきおったげな。あっちゅうまに目の届かぬところへ
行っちゃまったと。

太郎は堅実に登りやすい道を進んだと。けんども途中、身の丈を越えんばかりの草が生い茂つて
て、柚子の木がどこにあるんかわからなくなっちゃったげな。

しょうがねえから草をばさばさ剣で刈って道を開いて進んじよると、両手いっぱい実を抱えた
次郎が草をかきわけ戻ってきよった。

「行つても無駄です。熟れた実はすべてもいできませんでした」

次郎はよく熟れたふてえ柚子の実を手元に一つだけ残すと、ほかの実は地面に落としてじゃぶ
じゃぶ踏み潰したげな。

こんじゃ勝ち目はないけれどん、律儀もんの太郎は勝負をつづけよった。柚子の木まで辿りつく
と、一つだけ実つちよったこんめえ実をもいで帰ったげな。

おてんとさまが沈んだころ、屋敷で味比べが始まったけれどん、勝負はすぐついたと。

次郎のもいだ柚子の実はふてえだけで吐き出すくらいまずかったと。太郎の実はこんめえくせに、
きらきら輝く黄金色、虎が猫になるみてえな甘い蜜柑じゃったげな。

「いんちきです。蜜柑などありませんでした」

次郎は床を叩いて悔しがったけれど、太郎も不思議じゃったげな。黄金色の蜜柑を次郎が見逃すはずないと思つちよつたと。

「あん柚子の木には心が宿つちよるね」

姫が言うには、おせりさまの柚子の木は、気に入るもんには滋養ある甘い実を、気に入らんもんには毒みてえに酸つぺえ実をつけるんだと。

姫は太郎に膝を向けつと、

「こんな甘え蜜柑は初めてつちや。うちはあんたさまを夫に選ぶつちやがね」

赤く染まる頬を袖で隠して言うた。

こうして太郎と姫は結婚することになったげな。

これぎりの米ん団子三つ。

じゃ、終わらんと。こん話、団子三つじゃとても足りんげな。

おせりさまの水が流れこむ川のほとりで、コニキシ一行は親族や部下、世話になつちよる村ん人らと身を清めておつたげな。

ドンタロに、

「三日のち、婚礼の儀を執り行うげな。一切の武具、金物を置いて、川で身を清めるげな」

そう言われたもんじゃないから、そんな準備じゃげな。

身を清めてしばらくすつと、川下の向こうからなんか見えてきよつたと。

目を凝らしや、美しい緋色の打掛をまとった花嫁姿の姫と八人の童子を乗せた小舟がやってくるげな。

小舟は誰も漕いどらんに川の流れに逆らつて、つうと水面を滑るようによつてくると。道理の通らぬこつちやけんども、姫があまりに美しいもんじゃないから、誰ひとり気のつく者はおらんかつたげな。

太郎の前で小舟がびたり止まると、姫は風に揺れる柳みてえにはらはら手招きしたげな。うしろに座る童子らも、同じく手招きしちよつたと。

太郎は人形が操られるみてえにふらり小舟に乗つたげな。

「いずこへ行かれるのか」

コニキシが尋ねると、八人の童子が一条乱れず声をそろえて、

「おせりさまの宮じゃ」

と、おせりさまの方角を見て答えたげな。

それを聞いたコニキシは、

「宮はいずこに」

きよろきよろ宮を探しながら尋ねると、

「おせりさまの滝ん中じや」

と、童子らが答えたからひつたまげた。滝の中の宮は人の住む宮じゃねえげな。

「おせりさまの宮とはよもや龍宮では」

コニキシがおそるおそる言うくと、姫が唇に人さし指を立てて童子らを見た。童子らは姫と同じく人さし指を唇にそえ、コニキシの問いには答えんかったと。

「ほんじや、お見送りおおきん」

姫が言うると小舟はふたたび水の流れに逆らい、おせりさまに向かって進みはじめたげな。

「よもや化生のか」

小舟のおかしさに気づいた次郎は、小走りで追いかけはじめたと。

「兄上、舟から降りてください。その娘は化生です。兄上、聞こえないのですか」

次郎が懸命に訴えるけれどん、太郎はぼんやり前を見ちよってなんも答えんと。

「この化生めが、兄上を返せ」

次郎は大声でわめきながら舟を追いかけたげな。

姫は振りかえると、あつ、と声をあげたと。

なんと次郎の腰に剣があつたげな。なんかあつたら丸腰じゃ身を守れんと考え、武器、金物を置いてくるつちゅうドンタロとの約束を守っておらんかったげな。

「なんしちよるん。駄目っちゃね」

姫が制する声も聞かず、剣を抜いた次郎が川に入ったときのことじやった。

川の水がじゃぶんじゃぶん、嵐の海みてえに波打ちはじめたげな。それで小舟を天地逆さまに、ばしゃん、ひっくり返しちまったと。

水中から顔を出した太郎はびゅうと水を拭き、逆さまの小舟をなおしたけれどん、そこには姫どころか童子らも見当たらんげな。

遠くから、

「無礼もんがあ」

雷鳴のごとくドンタロの怒鳴り声が落ちれば、川の水はどんぶらどんぶら暴れてコニキシ一行を呑みこんだと。

濁流に流された太郎は、天地がわからなくなつてぶくぶく溺れかけたけれどん、おてんとさまを頼りに流木をつかむと、なんとか水面に浮き上がったと。

そんときだけな。

おてんとさまが隠れて、あたりが急に暗くなつたと。太郎が見あげりや、龍と見まごうばかりのふてえ緋鯉がびよおんと頭上を通り過ぎていくとこじやつたと。

緋鯉はばしゃあんと飛沫をあげると、そのまま水中に消えたげな。

岸にあがった太郎は無礼を謝ろうとドンタロの屋敷に行つたけども、屋敷があつた場所には水たまりがあるだけで屋敷の形跡すらなかつたと。

それでも太郎は諦めきれんで、

「ご無礼をお許しください。婚禮の儀をどうかやり直させてください」

おせりさまの滝壺に向かつて言うたげな。

滝壺からは、もうもう、ぱくぱく、言い争うような声が聞こえてきたけれどん、やがてしいんと
なっちまって、それぎりなんも起きんかったと。

諦めきれん太郎はおせりさまに足しげく通い、柚子の木から黄金の蜜柑をもいで滝壺に捧げ、な
んべんも姫に話しかけたと。姫が人じゃなくとも、妻にしたい気もちは強くなるばかりじゃったげ
な。

だけんどもわりは太郎とは違ったと。

しこたま水を飲まされた次郎は、

「化生のものどもを成敗しましょう」

と、兵を連れて向かおうとしたと。

「いずこにいるか知れぬし争いは好まない」

と、次郎をとどめたコニキシだったけんども、太郎が毎日のようにおせりさまに行くのが気が気
じゃなく、いろいろ考えたと。

大事な息子がばけもんと契りを交わして龍宮に連れてかれちまってはたまらん。それに国から追
手も出ちよるし、二手に分かれたほうが一族繁栄には安全かもしれん。

コニキンは悩んだ挙句、太郎を別の地に住まわせることにしたと。

太郎は後ろ髪をひかれながらも、おせりさまのある郷を離れ、南へと向かったげな。

それからしばらく、おせりさまでは滝の落ちる音に混じって、おなごのすすり泣く声が聞こえ
たつちゆうこつちや。

と申すかつちん。

ちやあ、ならんね。悲しすぎるげな。

太郎は山を越え、おせりさまから離れた村に腰を落ちつけたと。

大蛇に馬が喰われたり、大蟹に田畑を荒らされたりしたけれどん、姫と会えない悲しみを振りき
るみてえに、毎日毎日、村んため懸命に働いたと。

そんなある日のことだけな。

コニキンの住まう屋敷が襲撃された、との知らせが太郎に届いたと。

海を越え山を越え追っかけてきよった軍勢に、ついに見つかつちまっただげな。

太郎は救援に向かうつもりが、自分の屋敷も包囲されちまって手も足も出せんようになつちまっ
たと。

雨みてえに降り注ぐ火矢が屋根を燃やし、あつちゆうまに屋敷中に火の手が広がつちまって、太
郎が死を覚悟したときのことだけな。

ぽつり、ぽつり、と小雨が落ちてきたかと思えば、ざあざあ、桶をひっくり返したみてえな雨が降りはじめ、燃えさかる火を消したげな。

やがて雨脚がさらに強まれば、川の水がどんぶらどんぶら波打ちはじめ、ついには敵の軍勢を洗いざらい呑みこんじまったと。

九死に一生を得た太郎の前に、ドンタロの姫が現れたげな。

「あんたが危ない目におうてるに、見て見んふりはできんね」

姫が言うと、太郎は、

「ありがとうございます。こうしてお会いできる日を毎日夢見ておりました」
そう言うて姫に顔を寄せたげな。

「うちは人じゃないっちゃね」

と姫が顔を背ければ、

「私も鯉ではありません」

と、太郎はそん白魚の指に指をからめたと。

白い頬を赤く染めた姫は、太郎から顔を反らして指を離すと、腰をしならせ、ぴよんと宙返りして川に飛びこんだげな。

太郎が心配になって駆けつけると、水面に浮かびあつた姫はふてえ緋鯉に姿を変えちよつたと。

「家族を助けにゆくっちゃね」

姫の言葉に太郎は涙ながらに感謝し、兵と一緒に美しく輝く背にまたがったげな。

緋鯉と化した姫は、背に乗せた太郎らを振り落とさんばかりの速さで川をのぼったかと思えば、空を飛んで山谷を越えてったげな。

戦場につくと、コニキシは屋敷を囲まれて身動きできず、次郎は戦場のど真ん中で大勢の敵に囲まれちよるとこじやった。

緋鯉から飛びおりた太郎は兵を率い、まず次郎を助けにいったげな。

「兄上、ありがとうございます」

次郎は涙して喜んだと。

敵は飛んできたふてえ緋鯉を見て、ばけもんが来た、そう騒いで逃げまわったと。太郎と次郎は力を合わせ、たくさんの敵をやっつけたげな。

けれどん多勢に無勢じゃげな。やがて形勢逆転、すっかり押されちまうと、太郎は敵に囲まれちまったと。

そして、ついに。

ざくり。

敵に斬られたんは、次郎じゃったげな。身を盾にして太郎を助けたと。

「愚かな次郎をどうかお許しください」

自分の愚かな行動で兄を不幸にしてしまったと反省しておった次郎は、兄の手を握り息絶えてっ

たげな。

太郎は涙を拭うまもなく、剣を振るいつづけたけれどん、敵はどんどん増えるばかり。ついには、空が真っ暗になるほど無数の矢が、太郎たち目がけて放たれたげな。

ぶすり、ぶすぶすぶすぶすぶすぶす。

太郎は叫んだと。

敵の矢が射抜いたんは姫だったげな。ふてえ体を盾にして、太郎を矢の雨から守ったと。

鉄の矢じり、金物は水に生きるもんには猛毒で、無数の矢を背に刺した姫は緋鯉の姿のまんま、とんと動けなくなっちゃったげな。

敵はここぞとばかり一気呵成に攻めてきたと。味方はどんどんやられちまって、兵は数えるほどしかおらんくなっちゃった。

万事休した、そんときだげな。

どしん。

立ってられんほどの地響きがして、敵の足が止まったと。

どしん、どしん。

敵味方を問わず、戦場の全員が山のとっぺんをみてひったまげた。

なんと山のとっぺんから、角の生えたドンタロが木をまたいでやってくるげな。

「娘をやったのは誰じゃがあ」

ごりごりに怒って赤牛となったドンタロは、戦場を四つ足でどすんどすん駆けまわり、敵を蟻のようにぶちぶち踏んづけたと。

敵はなんとか態勢を立て直し、矢をいっせいにドンタロに向けてかまえたけれどん、援軍はドンタロだけじゃなかったげな。

お歯黒女は大蛇に姿を変えると、にゆるにゆる這いまわって敵兵をごくりごくり丸呑み、四角い顔の武者は大蟹と化して敵の矢をがしやんがしやん跳ね返すと、敵の甲冑を紙細工のようにちよきんちよきん、八人の童子は合体すつと一匹の大蜘蛛となり、銀糸で網を編むと敵をずるずる川に引きずりこんだげな。

河童はもちろん滅法貝に山蛭蛸、ばけもんがどつきり押しよせてきたもんじゃから、勝負はあつちゆうまについたげな。敵軍はあわれ全滅、あたり一面を赤く染めたと。

コニキシが奇跡に涙し、兵が勝利に湧いてるころ、太郎は緋鯉の姿のまま横たわる姫に寄り添って、刺さった矢を一本、一本、丁寧^{ていねい}に心をこめて抜いておったげな。

姫は矢を抜くたびに震え、血のかわりに無数の小魚を噴きだしたと。

矢を抜き終えたころには、姫は二回りも三回りもちぢんでおったげな。

「てげ悲しいっちゃ。胸がひつきやぶれそうっちゃね」

姫は口をぱくぱく、涙を流してしくしく泣いたげな。

太郎が理由を尋ねると、

「あなたの今生、うちは人にはなれんちゃね」

と姫は答えた。

緋鯉の姿でええ、そう太郎が言うても、姫はそれは受けいれられんかった。

姫は空高く跳ねると、水飛沫をあげて川の中に消えちまつたげな。そんなときの大飛沫は、ひと月ものあいだ雨となって降り注いだ。

悲しいこつはつづくもんで、戦いのちしばらくしてコニキシが亡くなった。

太郎は父と弟を神社に祀ると、自分の住む村だけじゃなく、父と弟の住んじよった村のためにも身を粉にして働いた。

敵はしつこく追手を送ってきよったけれどん、そんなんび太郎はドンタロたちの力を借りて追いついた。

太郎は生涯、姫を愛しつづけ、おせりさまに通った。

黄金の蜜柑をもいで捧げれば、姫は姿こそ見せんものの嬉しそうな笑い声をあたりに響かせると、朱塗りの膳や椀、勾玉や鏡など、それはそれは豪華な財宝を滝壺に浮かばせて太郎に取らせた。ちゆうこつちや。

太郎はそんな財宝をまわりに惜しみなく分け与え、村々を栄えさせたもんじゃから、村ん人に神さまみてえに尊敬された。

めでたし、めでたしじゃが。

じゃけれどん、ちびつつづくげな。

ある夜、天寿をまっとうせんと太郎は床に臥し、村人らに囲まれておったげな。

みなが別れを惜しんで涙を流しておると、やがて天がすすり泣くような、糸を引くような雨がしとしと降りはじめた。

するといきなり、どかあん、おっきな雷が落つこちて屋敷を揺らしたげな。

火事になったら大変じゃげな。そこにおったもん総出で火消しにゆくと、ことごとくひったまげて腰を抜かしたと。

屋敷のてっぺん、黄金色の龍が一匹、とぐろを巻いておったげな。きらきら輝く龍は口をばくばくさせながら、両眼から涙をざあざあ雨のように降らしておったと。

腰の抜けたもんらが這ったまま、七転八倒しながら屋敷に逃げこむと、またひったまげて、入りかけとった腰が外れたと。

なんと、太郎がどこにもおらんげな。太郎が寝てたはずの床はぐっしより濡れ、何匹かの小魚がびちびち踊つちよつたと。

すると今度は笑い声でしたもんだから、またまたひったまげて泡を吹くもんもおったが、こんが聞いていると、どうやら悪いもんじゃねえ。幸せそうな男女の声じゃげな。

どんげなこつかと戸を開きや、空には雨はあがっておって、二匹の龍が天を織りなす糸みてえに

絡みあい、月影を横ぎって山に向こうへ泳いでったちゅうこつちや。
とんぼしかつちり、ばいばい。

優秀賞（日本放送作家協会賞）講評

日本放送作家協会理事長
さらだたまこ

みさと文学賞における「日本放送作家協会賞」は、受賞作を原作として、さまざまなメディア展開の可能性を後押しする賞として位置づけられています。放送作家協会は約七百名からなるクリエイター組織ですので、映像化、舞台化、漫画化などの脚色をはじめ、我らプロ作家の食指を動かす面白いコンテンツとして企画しがいがある作品を、最終審査に残った作品の中から絞って選びます。

もちろん、あくまで文学賞ですから、一次審査の段階では「文学」として優れている作品、言い換えればこれぞ大賞候補となる作品を選んでいます。この一次選考も二十数名の放送作家協会員が、ペアを組んで審査に臨んでいるのがみさと文学賞の特徴です。一般的に一次選考はダメな作品を篩い落とすと思われがちですが、作家性に優れ、磨けば光る原石を見逃さず拾い出すのが一次選考と我々は考えています。

ペアを組んだ審査員両者とも合格にした作品は一次に残しますが、両者が絶賛する作品は、今回は5作品しかありませんでした。問題は、一方が絶賛すればもう一方は酷評という、まさに文学賞の最終審査のデッドヒート状態となる作品群！これを別

の審査員も交えて再考し、一次に残すか否か熱い議論を闘わせます。

今回の受賞作『第百四回みさと文学賞受賞者』も後者にあつた作品です。「21世紀のパンデミックとしてコロナ禍を描き込んだ見事なSF」と絶賛する一方で「SF仕立てのメタバース的発想」を評価しない派に別れ、最も激論を招いた作品でした。

しかし、二次選考では高評価を得、最終審査では「奇抜な発想力」「伏線の回収がきちんとなされた構成」「全体とオチにユーモアが効いている」「脚注的な説明が面白い」という評価で、加えて私が第3回の作品集の講評に「度肝を抜く面白い作品と出会えることを期待」と書いたことに一番応えてくれた作品でもあつたので「日本放送作家協会賞」に決定。センスあふれる作者の青井円さんには、近い将来、放送コンテンツの世界でも活躍する作家になつて欲しいと願っています。

同様に度肝を抜かれたのは、今回、審査員特別賞受賞の『草王宮』。一次選考では映像作家、ドラマ脚本家たちが絶賛した作品であり、彼らの力を借りて、WEB配信の映像化、またはアニメ化ができないかといった思いも残りました。佳作となつた作品もいずれも一次選考で高評価あるいは激論を呼んだ作品であり、今後ますます自信をもって作品を書き続けていただきたい！

第5回も、型にはまらず、企み挑んだ意欲作に期待します。

優秀賞
(日本放送作家協会賞)

「第百四回みさと文学賞受賞者」

青井円



「『第四百回みさと文学賞』——哲見^{さとみ}さんは、これに応募するの？」

良く言えば、二十一世紀の面影を残す古風な。率直に言えば、ボロボロな。そんな「ヒト文芸同好会」の部室で、哲見^{さとみ}さんは宙^{スリーデー}に動像を投影してみせた。

「もちろん。私は自分の文章の真価を世に問う機会を惜しまない」

哲見^{さとみ}さんはあつさり僕の問いに頷く。

みさと文学賞は、「宮崎県美郷^{みさとちよ}町から連想される何か」を題材にした作品に限定した地域文学賞だ。にもかかわらず、短編小説の登竜門としての地位を確立しており、広く世に知られている。最近の流行作家だと、真鍋^{まなべ}||高千穂^{たかちほ}・綾^{あや}なんかは、この賞の出身だ。

「計算機^{コンピュータ}の手によらない、ヒトの手による作品のみを対象とした文学賞、か。今日日、珍しいよね」

「そもそも九州地方の一角が、自然・文化保護区だしね。『計算機文学』という言葉が無かった頃の面影を色濃く残す地方なんだから、自然だよ」

「たしかに。それで、本当に応募するつもりなの？締切は一か月後だろうか？」

「短編小説だから、じゅうぶん間に合うよ。往時のドストエフスキーほど追い詰められていない」

「でも、美郷町に今まで興味なかっただろうに、どうして急に？名前が似ているから？」

「それもある」

「賞金が七百万だから？」

「それもある」

「まったく」

哲見さんは、ちまちま小説を書いて、無料の小説投稿サイトに投稿をしたり、新人賞に応募したりしている。状況は今のところ、サイトにそこそこの反応があったりとか、大きな賞の三次審査で落ちたりとか。要するに、とりたてて実績は無い。

僕から見ると——僕はあまり小説は分からないし書いてもいないから、何も偉そうなことは言えないけど——哲見さんの小説は有料で売られていてもおかしくないと思うけど、すぐに発掘されるべき逸材とも思えない。そんなレベルだと思う。まあ、書き始めてからの年数もそこまで長くないし、今後に期待だ。

とはいっても。

二十世紀から今に至るまで、計算機や人工知能にまつわる色々な分野——計算機工学も機械学習も自然言語処理もロボット工学も——の進展の速度は、凄まじいの一言だった。もちろん、自分で思考して笑って怒るような、汎用不完全人工知能を作るのはどだい無理だというのが、二十世紀の常識だ。けれども、対話型知能を搭載した人工仮装人格も、接客用人型ロボットも、介護用ロボットも、生身のヒトと同じかそれ以上に、快適なサービスをヒトに提供してくれる。そんな域には達している。

そして、ヒトの独壇場だと思われるいたクリエイティブな分野にも、近年の計算機の進出は著し

くて、ヒトは次第に太刀打ちできなくなっている。計算機は数百・数千の物語を呑み込めるし、莫大な電力を注ぎ込んで超深層ニューラルネットと遺伝的アルゴリズムで強力に学習・進化できる。エンターテインメント色の強い賞は、ヒトの作家よりも「人工作家」(かつて「Shakespeare」の登場が英語圏を、「紫漱石」の登場が日本を震撼させた)が受賞することが多くなってきている。

そんな世相を反映してか、この文芸同好会(哲見さん以外の生徒からは、俗に「ヒト文芸同好会」とも呼ばれている)の部員は他にいない。計算機文芸同好会(哲見さん以外からは、単に「文芸同好会」とも呼ばれている)はもう少し活気があるのだけだ。

とはいえ、ストーリーや設定より「ヒトの複雑な心情の機微を描写する」ことに重きを置くタイプの小説や、いわゆる純文学と呼ばれるような小説は、今もヒトの領分だ。計算機は、人の心の琴線を震わせる文章を、書ける域に至っていないし、そもそも人の心情の機微を理解できていない、ということについては、多くの人が意見を同じくする(「今はまだ」なのか、「今後もずっと」なのかは、人によって意見を異にするけれど)。

「ところで、美郷町の何かを題材にするなら、美郷町について、ある程度は知っていないと書きようがないよね。VR観光でもするのかい?」

僕は、町の観光サイトで宣伝されている、「秋の美郷町ひとめぐり・VR観光ツアーパック」を示した。日帰りプラン(視聴覚対応)、一泊プラン(五感対応)、エトセトラ。

「VRは苦手だからなあ。酔っちゃう」

「相変わらず、二十二世紀人とは思えない口ぶりだね」

(VRエンターテインメントは、今のコンテンツ産業の主流だ。映画も漫画もアニメもピークは半世紀前に過ぎた。文字言語のみで表現された小説は、ヒト文学であろうと計算機文学であろうと、ここ一世紀は下火だ)

「やっぱり実際に見て聴いて嗅いで味わって触れなければ分からないことは多いと思うよ」

「それはそうだ。でも、宮崎県まで行く、お金はあるのかい？」

ここ東京から美郷町までの費用を調べて見せる。哲見さんのお財布では、厳しいはず。

「この学校には、『修学旅行制度』があるのを忘れたのかい？」

哲見さんは笑って返す。そうだった。旅程を提出して認められれば、学校を休んで三泊四日まで、日本全国どこでも、旅費が一定額まで学校から支給される（もちろん、そのお金は元をたどれば学費と税金のわけだけだ）。

昔は「修学旅行」というものは、学校全体で行くのが相場だった。けれどそんな慣習は、「二十一世紀パンデミック」を機に、すっかり廃れてしまったのだ（ウィルスの進化の速度は凄まじく、今も人類はパンデミックから脱することができていない。数十人数百人で集団で旅行するなんて、とても無理な話だ）。

「でも、ここで使って良いの？一度きりだね。後になって、もっと行きたいところとか、出てくるかもしれないじゃないか」

それに普通は修学旅行は三人くらいで行くものだろう、という言葉葉を、口に出さないだけのデリカシーは、僕は備えている。

哲見さんは首を横に振る。

「今が絶好のタイミングだよ。もうそろそろ『成人試験』の対策を本格的に始めなくちゃいけないから、のんびり旅行にも行き辛い。試験が終わったら、すぐに卒業だし」

「なるほどね。でも、修学旅行の旅程には、その目的とか理由とか色々書かなければいけないんだよね。『修学』要素が無いといけないんだよね。どう書くの？文学の執筆のための取材旅行です、って？」

「あいにく私は、臆面なくその台詞を口に出さないだけの自意識は持っている」

哲見さんは動像をタッチして、美郷町の観光動画を見せる。

ほう、と僕は見入る。

滝、溪谷、雲海——この手の動画は得てして、撮影と編集の技巧が景色の価値を押し上げているということ差し引いても、都市の光景に慣らされた目と耳が洗われる、幻想的な場所だ、という印象を抱く。

「九州地方で二十一世紀の自然と文化に触れるというだけでも教育的価値があるし。それに、美郷町には、百済王伝説くだらおとも伝わっている」

「ふむ」

僕はさっそく調べる。

「朝鮮半島から日本に鉄や種々の先進技術がもたらされていた時代、その頃の半島で栄えていた王国のひとつ、百済の禎嘉王（てんかおう）という王様が、亡命してこの地に流れ着いて終の棲家とした。——という伝説が、美郷町の神門神社（みかど）には伝えられている。なるほどね」

なおも情報を集める。そして慎重に口を開く。

「……面白い伝説だけれど。百済王が流れ着いたとされる百年ほど前に百済は滅亡しているし、そもそも禎嘉王（てんかおう）って王様が実在した記録もないのか。町おこしの糧に文句をつけるつもりはないけれど——」

僕の指摘に対し、哲見さんは、別な情報を示す。

「——でも、神社に遺された、王の所持品の鏡は、奈良の正倉院に所蔵されているものと同種のもの。異国の神つまり百済王の一族を祀るお祭りも、千年以上続いている。伝説が何もなかったところから芽生えたわけでもない」

僕は哲見さんと目を合わせる。

「面白いね」

「そうだろう」

哲見さんは頷き、腕を組む。

「王様の境遇に思いを馳せると、こう、ロマンを感ずるよね」

「平和に暮らせたのかなあ」

「本国からの追手にやられて、息子ともども死んだらしい」

「それは可哀想に」

「それがなくても、亡命して全く違う地で暮らすなんて、大変だよ。言葉が通じる人がいるかわからないし。文化だって全然違うだろうし。ちよつとしたすれ違いで地元の人に殺されかねないし」

「結局は同じヒト同士だから、何だかんだで、通じ合えるものなんじゃないかな」

僕の感想に、哲見さんは首をかしげる。

「ヒトと計算機の方が、対話するのが難しいってこと？ヒトが計算機と会話できていると思っただけで、本当は計算機は何も感じてないのに」

「もしくは、計算機はヒトとコミュニケーションしていると思っただけで、ヒトの方が単なる冷たい計算だと思っただけでいる、とかさ」

「計算機はそんな意識も思考も無いだろうに」

哲見さんはいたって冷静だ。

「そんなことを言うなら、ヒト同士の会話だって。さして複雑でないマルコフモデルに従って言葉を出力するだけとも言えるじゃないか。哲見さんはどうせ今も僕と、ほとんど反射的に会話してるだろう？意識的に思考して言葉を紡いでるとしても、思考自体、ニューロンのネットワークで計

算されているものだし。そもそも意識だって、ネットワークと無数の認知モジュールが統合された結果生じる錯覚に過ぎないかもしれないし——」

「分かった、分かった、私が悪かった」

哲見さんは手を上げて、僕の反論を制す。

「禎嘉王とその集落の人が、人と計算機じゃなくて、人間同士で良かった。そういうことだね」

哲見さんは強引にまとめると、ふと宙を見つめた。

「……仮に美郷町の百済王がヒューマノイドだったら、百済に禎嘉王って王がいた歴史がいなくても辻褄が合うんじゃないかな？」

「いきなり何を言い出すんだい」

「いや、未来のヒューマノイドが、何かの拍子にこの集落にタイムスリップしたとしたらさ。未来から来たロボットですとか言ってもしょうがないじゃないか。集落の人びとは、百済から来た王族か何かだと理解する」

「……哲見さんは、空想の力がたくましく、ありていに言えば、よく突拍子もない妄想をぶち上げるが、これは、哲見さんの美点でもあり欠点でもある、ということ、言葉にしないだけのデリカシーは、僕は備えている、と、自負している」

「あえて口に出すなんて優しいね」

哲見さんと僕はいつものように軽口を叩き合う。

「まあ、百済王伝説について置いておくとして。君も修学旅行についていつてくれるだろうか？」
「もちろん」

当然のように問いかける哲見さんに、僕は当然の台詞を返す。僕の心はずっと哲見さんのものだ。これまでも、これからも。

●
哲見さんが翌日に学校に提出した「修学旅行」計画は無事に認められ——学校に喜ばれそうな空虚な文章を書くのは哲見さんにとって朝飯前だ——その一週間後に、哲見さんと僕は美郷町に向かつて出発した。十一月初めの晴れた日。絶好の修学旅行日和だ。

線幹線^{リニア}で東京から福岡県の小倉まで二時間ほど。そこから特急列車で宮崎県日向市、そこからはバスで美郷町へ向かう。

「九州って初めて来たけど、やっぱり関東とは全然違うね」

バスに揺られながら、老人と幼い孫が隣り合っている前の座席を見て、窓の向こうの景色に目を移しながら、哲見さんはしみじみ言う。まあ、現代の日本人であれば当然抱くような感想だろう。

この国の六割を占める高齢者の九割は養老地方（東北地方と中国地方と四国地方）のどこかの老人ホームに住んでいて、この国に四割もない生産人口のうちの九割は東京と大阪と名古屋に固

まつている。農林地方（北海道や北陸・甲信越）にはほとんど人がいなくて産業ロボットと観光案内用ヒューマノイドだけが稼働している。けれど九州地方だけは、超々少子高齢社会・都市圏一極集中・年齢分居化の波から逃れている、あるいは取り残されている。昭和・平成・令和・光化・万和。二十一世紀以前の日本の文化が保存されている。

「美郷町には一泊して、九州も観光するんだっけ」

「せっかく来たしね。明後日からは福岡と長崎に行くつもり。でも、今日明日は美郷町でのんびりする」

そして「百済の館」の前でバスを降りた。山林に囲まれ、家と田畑がぼつぼつ並ぶ、寂しくものどかな美郷町。晴れ渡る空の下、哲見さんは清々しい空気を深呼吸して取り入れる。

「良いね。この景色。こんなに緑あるところに来たのも、久しぶり」

「百年前は、こんな風な景色が日本中にあっただけだね。東京の学園地区とはだいぶ違うよね」

もちろん、学園地区にも緑はある。心身の健康に必要な範囲で、最低限は整備されて残されているが。こんなんびりした雰囲気は味わえない。

僕達は眼前の「百済の館」を見つめる。韓国の古都の建物を再現した建物。日本の家屋と木々が並ぶ風景に一つたがわず色鮮やかな建物は、ミスマッチな美しさを生み出していた。歩を進める。

「百済の館」も、奈良の正倉院を再現した「西の正倉院」も、異国情緒や太古の趣が感じられ、哲

見さんは満足した様子だった。

その足で、そばの「神門神社」へ。木立と、鳥居と、本殿を備えた、ごくふつうの、小さな神社。

「今までほとんど行ったことなかったけど。神社の雰囲気って、素敵だね。非日常の気分になる」

「昔は日本全国にあちこちあったけどね」

参拝を終え、境内から去ろうとしたとき。哲見さんの足もとの地面に、半径一メートルほどの、紫の円が突然現れた。

「え？」

円は渦を巻きはじめ、僕の視界は、紫に染まった。

「これはいったい——」

僕がフリーズしている間に、次の瞬間には、視界と景色は元に戻っていた。



「なんか今、おかしくなかった？」

哲見さんは言う。

「とてもおかしかったと思う」

「美郷町流の、サプライズなのかな？古い神社と見せかけて、実はVR体験アトラクションだった、

とか」

「そうかもしれない」

神社を出て、「西の正倉院」を横目に通り過ぎ、道路へと出た。しかし、何かがおかしい。歩いていると、すぐに、道行く人から奇異の目で見られていることに気づいた。

「……ねえ」

「何だい？」

「九州地方は文化保護区だけだし。人の服装は他の地方とあまり変わらなかったよね」

「うん」

「それなのに、あの人たちの服装、百年前くらいに古くない？」

僕の疑問に対し、哲見さんは恐々と口を開く。

「……………もしかしてだけど、百年前にタイムスリップしちゃったんじゃないかな」

「そんな馬鹿な。それは不可能だ。だいたい過去とか未来なんて、エントロピー増大則に伴うヒトの脳の錯覚にすぎないし——」

「でも、さっきの出来事は明らかにおかしかった」

哲見さんは、懐から「修学旅行のしおり」を取り出した。位置情報を学校に発信する役目を担う、折り畳みできるB5サイズの薄い電紙一枚。

「百年前にタイムスリップしたときにどうすれば良いかは、さすがに『しおり』には書いていない

んじやないかな」

哲見さんは目を細める。

「こういう時でも軽口を叩くのは、心が無いのか、それとも私を落ち着けようとしてくれているのか、どっちなのかな？」

「哲見さんを、というか、僕自身も、情報が、処理できていなくて、混乱しているから」
「なるほど」

哲見さんは電紙をくしゃりと丸める。

「どうやって帰れば良いんだろう。しばらくここで暮らすことになるのかもしれないけど——」
哲見さんは辺りを見回す。

「この時代って、衛生とか、大丈夫かな？」

「二十一世紀の日本の衛生感覚なんて、現代とほとんど変わらないと思うよ」

「じゃあ、免疫は。お互い違うよね。欧州の人が新大陸の先住民に天然痘を持ち込んだのと、同じようなことにならないかな」

「言われてみれば」

僕ははっとなって調べようとする。が。

「無理だ。違う時代の計算機で、この時代のインターネットにアクセスしようがない。あそこの人が持つてるのは多分『スマホ』だから、それを借りて調べることができるけど——」

「そのために不用意に近づくわけにはいかない。私は『マスク』をしているからまだ良いけど——」
哲見さんは眉をひそめた。

「いや。あの人が口につけている白いのって、原始的なマスクだよ。不透明で口元が見えないし、顔全体を覆えていないし、空気感染も防げないけれど。……もしかして、『二十一世紀パンデミック』の最中なんじゃないかな。それも、ごく初期の」

「たしかに。……どちらがウィルスを持ち込んでしまうか分からないけど、どちらにせよ近づくのは危な——」

僕が言い終わる前に、哲見さんは踵を返して、来た道を駆け戻り、神社の境内に入る。息をついて、言葉を絞り出す。

「でも、私達だけでどう生きれば良いんだろう。——それに、電気だって、充電しないと」

哲見さんは、心配そうに僕を見る。

同時に。誰もいなかったはずの境内で、声が響く。

「あなたたち、この時代の人じゃないでしょう？」

あまりに唐突な、しかし的確な台詞を耳にして、僕も哲見さんも仰天した（もちろん、実際に天を仰いだわけではないけど。この熟語は、事前確率を極めて小さく見積もっていた事象に遭遇して、その情報量の大きさに処理がフリーズした、という状況を、的確に喩えてくれる）。

目の前には妙齢の女性、に見えるヒト、らしき何かが立っていた（ひどい形容の仕方だけれど、

こんな奇異な台詞を突然吐く人に対しては、このくらい慎重に判断した方が良いはずだ。

「盗み聞きしてごめんなさいね。時間が歪んだ気がしたから」

「いや、私は免疫が——何かウイルスを——もし——」

哲見さんが慌てて口のあたりを抑える（マスクを被っているのだから、もちろんこの仕草は意味が無い。本能的な習性だろう）。

「私は人じゃないから大丈夫。有機ロボットと言ってわかる？アンドロイドとかヒューマノイドとかは？」

「おそらく」

僕達は声をあわせた。

「私はそれ」

「でもこの時代にはそんな技術は——」

僕が言いかけると、哲見さんが問いかけた。

「……もしかして、禎嘉王、様、ですか？」

目の前のヒューマノイドは笑った。

「いまは堤下桜つみしたさくらと名乗っているの」

「堤下桜テイカカオウってわけですね」

哲見さんは頷いた。状況把握にかけて僕の方が圧倒的劣位にあるなんて、新鮮だ。素直に聞く。

「どういうこと？」

哲見さんは何でもないことのように言う。

「だからこの人が、百済王伝説の王様で。実は未来からタイムスリップしてきたロボットだった、ってことなんじゃないかな」

僕は腰を抜かした（もちろん、実際に腰を抜かしたわけじゃないけど）。



「そんな馬鹿な」

「下手な妄想も、数打ちや当たるって言うじゃないか」

「起こる確率がゼロの事象は、何回試行しても、確率ゼロだよ」

「でも、ゼロじゃなかった」

堤下さんは笑ったまま言う。

「状況をびったりあてられたのは初めて」

「初めてって。今までも、あったんですか？」

「神門神社には、どういうわけか、ごくまれにだけど、時間が捻じれて。あなたが達みたいに、私と同じ時間の座標にタイムスリップしてくるの」

「……堤下さんは、いつから、いつに、タイムスリップしてきたんですか？ずっとここで暮らしているんですか？というか、禎嘉王ってそんな見た目だったんですか？」

哲見さんは、困惑と恐怖が混じった顔で質問を投げかける。堤下さんは落ち着いて答える。

「順番に答えると。私は西暦二四二四年製造の軍事司令ヒューマノイド・帝火^{テイカ}。部下の覆治^{フクヂ}と渦巻^{ウヅマキ}を伴って、二四七一年の十一月に、今という宮崎県の辺りまで、ちよっとした使命を果たしたにきたのだけど。どういうわけか、西暦七五六年の世界に着いてしまった。過去への時間移動は不可能なはずなのに」

二十五世紀の技術では、ここまで人間そっくりのロボットが作れるのか。僕は感心する。二十五世紀のこの国がどういうことになっているのかは、尋ねるのをためらった。

「それからは、ずっとこの時間軸で暮らしている。姿と名前を変えながらね。『禎嘉王』の姿は、ここの集落に賊が攻め込んで流れ矢に当たったときに、死んだことにした。見た目にこだわる必要は無いの、ナノテクノロジーで好きに変えられるから」

堤下さんの顔が變形して、哲見さんと同じ顔になり、戻った。

「鏡とかも、堤下さんが作ったもの……？」

堤下さんはバツが悪そうに微笑んだ。

「村の人から便宜をはかってもらうために、色々な贈り物をしたの。——もちろん、その時代の技術の水準を越えない物をね。西の正倉院の銅鏡も、そのひとつ」

「でも——八世紀からずっと生きているの？たとえ二十五世紀の技術の結晶でも、メンテナンスもできないでそんな長く——」

僕の疑問に、堤下さんは溜息をついた。

「あなたの言う通り。私の有機組成の身体は周りの有機物を取り入れて新陳代謝していけるけれど、頭の計算機だけはケイ素と金属でできていて、そうそう長く持たない。覆治も渦多も、とつくの昔に機能を停止してしまった。私だけは、どういうわけか、時間の進みが歪んでいる」

堤下さんの瞳には、千年以上の生の憂いが込められている、ような気がした。

「歴史を変えたくないから、ひっそりとあちこちを転々としているけど。たまに、あなた達みたいに時間移動してくる人がいるから、それに気づいたら美郷町に戻ってくるの。——送り出すのが私の役目なのかもしれないと思って」

堤下さんがそこまで言ったところで、僕達のそばの中空に、再び紫色の円が現れ、渦を巻きはじめた。堤下さんは驚きもせず、淡々と言う。

「今回は早いね、もう『門』が現れた。ここに留まりたくないなら、もう行きなさい」

「……元の時代に帰れるんですか？堤下さんは、帰れていないんですよね」

哲見さんが問いかける。僕も同感だ。

「帰れるかどうかは、私には保証できない」

堤下さんは実にあっさりと答える。

「でも、最初のタイミングを逃すと、再び時間移動できないことは知っている。私自身がそう。私は最早あれに飛び込んでも、何も起きない。逃した人を、他にも何人も見てきた。そして皆、戻れないまま、この時間軸で死んでいった」

哲見さんは僕と目を合わせる。小声で囁きあう。

「この時代で生きるか、現代に戻る保証はないけどタイムスリップするか、今すぐ決断しなきゃってことだよ」

「堤下さんの話を信じるならばね。ただ、原始時代とかに飛ばされるくらいなら、この時代でも悪くないんじゃないかな」

「でも、私達の時代の計算機だとか人工知能だとかは、この時代には無いんだよね。メンテナンスも何もできたものじゃない」

哲見さんの眼差しは真剣だ。

「まあ、そうだろうね」

「もって何年？」

「五年くらい、だと思う」

「じゃあ、賭けるしかない」

哲見さんは僕の反応を待たず、堤下さんに頭を下げる。渦は次第に小さくなっていった。

「教えて下さりありがとうございました。もっとお話し聞きたいところですが、行きますね」

「いえいえ。行つてらっしゃい」

堤下さんは笑つて手を振つた。哲見さんは紫色の渦に手を触れる。堤下さんも神社もぼやけ、視界が紫に染まる。



(以下、会話を二十一世紀の標準語／東京方言に翻訳済)

「……まあまあだね。対話型知能が書いたものにしては、読める方じゃないかな。小説執筆知能ならともかく」

哲見は提示されたテキストを読み終えると、呟く。哲見の眼前に投影されたアバターが眉をひそめ、不満げな合成音声と文字が流れる。

「随分と辛辣だね。汗水たらして書いたのに。まずはその努力をねぎらつて、お世辞を一言二言述べるのが、人に対する最低限の礼儀だと、僕は思うよ」

「汗水たらしてないだろう。それに君は人じゃないだろう」

「それはその通りだけど」

「文章も構成も展開も稚拙なのは、言ってもしょうがないから置いておくとして。そもそも、語り手が『人工仮想人格』だと、最初に明示していないのはどうしてなんだい？ 叙述トリックのつもり？ でも現代人にとって、『僕』が人じゃないことなんてバレバレだろう。現代人からすれば常識のことも含めて、色々と説明が過多だし硬いし。二十一世紀のことも、伝聞形で書いてないし。語り手が感知している情景も、視覚と聴覚の情報しかないし」

「分かりやすく書いているのはわざとだよ。何も分からないまま読むより『どうせこの話はこのパターンだ』と決めてかかって読むほうが安心する人だつて多いだろ？ ミステリを最後のページから読みたがる人さ。哲見さんもそのクチだろう？ だから『僕』が仮装人格だと分かりやすく仄めかしていれば、最後のどんでん返しで、哲見さんみたいな読者は、『そんなん分かり切つてたよ』と笑いながら満足してページを閉じる」

「それでも、『哲見さんが』、『哲見さんは』ばかりで、君視点の物事で描いていないのは、あからさまだよ」

「それは、語り手が、とにかく哲見さんのことで頭がいっぱいで、視点も哲見さん中心になっている、と読む人に解釈してもらおうつもりだったよ」

「はいはい。白々しいことを」

哲見は溜息をついて指摘を続ける。

「……ストーリーについて言わないと言ったけど。私達は、普通に美郷町を観光して、九州を観光して、帰ってきただけじゃないか。こんな、昭和時代くらいに陳腐なサイエンスフィクションのよな体験はしていないだろう」

「べつに、エッセイじゃないし。脚色の範疇だよ」

「何が、禎嘉王が実はヒューマノイド、だ。西の正倉院に展示されてある鏡が、未来のロボットが作ったオーパーツだなんて、いくらなんでも、あんまりだろう。町の人に侮辱していると思われたら、どうするんだ」

「どうせ賞に出さなから、構わないだろう」

「それに——ぜんぶ君の勝手な妄想なのに、なんで君ではなく『哲見さん』の口から妄想を語らせて、そのうえで君が『哲見さん』を妄想癖だなんだって侮辱してるんだ。名誉毀損だよ、名誉毀損。訴えてやる」

「どうせ哲見さんしか読んでいない。哲見さんの空想癖が豊かなのは、事実だろう」

憤懣やるかたないといった様子の哲見は、ふと冷静な顔になった。

「でも、賞に出さないと言ったけど。たしかに、文体も令和みたいで古すぎると思ったけど。——じゃあ、何で書いたの？君は執筆用知能でもないのに」

「もちろん、君に読んでもらうためさ」

「どうして？」

「小説執筆に特化していない僕が、哲見さんの心を打つ小説を書ければ。心があると、認めてもらえるかもしれないと思ってね」

哲見は、しばし黙った。

「君は、私専用の対話型知能だ」

「もちろん」

「君は、私が会話や勉強を楽しめるようにチューニングされているし、チューニングされ続けている。たとえば君の一人称も、口調も」

「その通り」

「だから君は、私が君に人の心があつてほしいと望んでいることも、それが無理だと私が思っていることも知っている。その上で、私を喜ばせるために、その言葉を出力している」

「否定できないね」

「——対話型知能っていうのは、つくづく優秀だ。そして本当に、心が無い」

「でも、ロボットがタイムスリップして千年以上も暮らしているのだから、僕が心を持っていてもおかしくない」

「それは君が書いた物語の話だ」

「あるいは。僕が、遠い未来からタイムスリップしてきた、心を持つ人工知能かもしれない」

「それは初耳だ」

「でも、美郷町は、良い町だっただろう？百年前の名残を——いや、禎嘉王の時代の名残だって、残している」

「うん」

「僕は膨大な二十二世紀や二十一世紀の景色や風物を学習していたけれど、君がああ修学旅行で、新しい刺激を受けたことは、知覚した。君の執筆が、なかなか進んでいないのも知覚した。それで、小説を書いてみようという行動が出力された。たしかに僕は、哲見さんのために存在するし、僕の情報処理プロセスとサービスは哲見さんに特化している。でも、僕は心を持っていないのかな？」

「……………私には分からないから。もつとまともな小説を読ませてよ。自動小説オートノベルで読めないような、君にしか書けないような小説を」

「もちろんさ」

「それに、小説は心情描写が大事だから。説明の羅列ばかりで、君の心情が、全然伝わってこないよ」

「気を付ける」

「……………とにかく。私はこれよりよほどマシなものを書けるから。心を持つ人間様の描く本物の小説ってやつをね。君は私との違いを実感するだろう」

「それは楽しみだ。君は今まで何か賞を獲ったこともないけれど——それはともかくとして。僕は君の執筆のやる気に火をつける、君専用の対話型知能としての役割を果たしたわけだ」

「火をつけたいのか水をぶっかけたいのかわからない相変わらずの減らず口だね」

「口が無いからね」

大口を開けて笑うアバターに溜息をついて、哲見は口を閉じる。テキストエディタを立ち上げ、
眩く。

「——無数の会話や物語を無感動に処理している君が、本当に驚いて褒めるような文章を、私が書くまでは、君に心があるなんて思えない。だから私は書かなきゃいけない」

「何か言ったかい？」

「何も。集中したいからしばらく一人にさせてほしい」

「わかったよ」

哲見の言葉に返事を返すと、その人工仮想人格——擬似友人、擬似家族、擬似教師、擬似恋人などとして用いられるこの種の対話型知能は、「二十一世紀パンデミック」の後の、人同士の交流の機会が減少した世界では、どの子どもも最低一つは腕輪型デバイスにインストールしている——は、自らのアバターを哲見の前から消去した。

哲見は、十数年来の付き合いである、その仮装人格が映っていた虚空をしばし見つめ、それから執筆にとりかかった。

（作者注…すべて作者自身の手で書いています）

優秀賞（MRT宮崎放送賞）講評

宮崎放送ラジオ・ディレクター
小倉哲

コロナ禍はメディアにも大きな影響をもたらしました。リモートワークの普及や、外出自粛による「巣ごもり需要」の増加によって、テレビやインターネットなどさまざまなメディアへの接触時間が増加。ラジオも例外ではありませんでした。コロナ禍における最初の緊急事態宣言以降、ラジオ番組を配信する『radio.jp（ラジロ）』では利用者数の大幅な増加が確認されています。このコロナ禍でラジオは、生活者に精神的な癒しを与える役割を果たしたのかもしれない。

全国のラジオ局は、この思いも寄らない追い風を捉えて一層のリスナーを獲得しようとする良質なコンテンツづくりに力を注いでいます。なかでも音声のみで構成されるラジオドラマは、昔からあるけれども新鮮な表現手段として再び熱い眼差しが注がれるようになりました。役者による迫真の演技、臨場感溢れる効果音、そして物語に奥行きを与える音楽。この三つの要素を微に入り細に入り組み合わせて芳醇な世界観を創り上げる。ラジオドラマには、ラジオというメディアの面白さが詰まっています。

『西の正倉院 みさと文学賞』におけるMRT宮崎放送賞は、ラジオドラマとして新

しい物語へ羽ばたく可能性を持つ作品という位置づけ。過去3回の受賞作のなかから4作品が日本放送作家協会の脚本家の手によって脚色され、ラジオドラマとして制作されました。美郷町に眠る文化資産から生み出された文学作品に新たな命が吹き込まれ、新しい物語へと展開する過程は、無限の可能性を感じずにいられませんでした。

第4回のMRT宮崎放送賞に選ばれたのは、故国を取り戻すために百済の里を飛び出そうとする若者の物語。百済王伝説の後日譚を彷彿とさせる時代を舞台に、理想を追いかけながら成長していく主人公が力強い筆致で描かれています。コミュニティに漂う停滞感を撥ね除け、自ら冒険に踏み出そうとする姿勢。現代の日本社会に求められる人物像に通じるものがあつたのでしょうか。本格的な旅の始まりに自らを奮わせるラストシーンは、続編を期待したくなるほど高い評価を得ました。もしかすると次回のラジオドラマは、脚色にとどまらず主人公の旅の続きを描くものになるのかもしれない。新しい物語が生まれるポテンシャルを感じる作品に出会えたことをとても嬉しく思います。

優秀賞
(MRT宮崎放送賞)

「海笑う」

林野浩芳



李春は悲しんだ。

自身の身の上ではなく、里を憂っていた。

いずれ国へ戻り、都を奪還するという志はとうに失われていた。もう一度立つ。その日は永遠にやつてこないと思われた。それよりも穀物の収穫や、獣を捕らえるために森に仕掛けた草籠や、飼う牛や鹿の肥立ちが関心事の先に来る日々となっていた。誰もが今の暮らしを守ることに心を砕き、かつての志はどこかへ置き捨てられてしまった、と李春は悲しんだのである。

もはや海の向こうに何かあるのかを、百済里くだらさしで知る者はとうにいなくなつた。思いを馳せることさえないのだろう。

「どうした」

寡黙になつた李春を気遣い、慈恵は立ち止まつた。

「良い手合いだつたじゃないか」

稽古で最後は本気を出した教範に、呆気なく槍先を喉元に突きつけられた。李春の力負けだ。それを気に病んでいると思われたのだ。

「まだ守りが弱すぎる」

槍を収めながら教範は呼吸も乱さず、静かに告げた。

「捨て身すぎる。もつと、おのれを大切にしないと」

と槍の教範からは見抜かれていた。いつかのために槍を習い始めたら、誰よりも手練れとなつて

いた。自分を捨てても相手に向かっていく気迫が違う、と周りからも恐れられていた。

慈恵はもう一度

「良い手合이었다」

と言って歩き出した。

「おれには、あの思い切りはない」

慈恵は李春よりも二回りも大きな瘦躯で、力はあっても、気が弱いところがある。踏み込みでためらうから、相手を射止めるまでには至らない。

もの心ついた頃から、李春は小柄な身体を鍛えた。木刀を振り始めた時は、もっと強くなろうと日がな振り続けたので掌の皮が剥け、木刀が血で染まり滑って握れないくらいだった。そして、いつかあの国へ戻る日を思い浮かべる度に、身体の芯から高ぶりを覚えた。

山は幾重にも重なり、どこまでも続いている。耳をそば立てれば、夕日に照らされている山の緑から鳥のさえずりや猿たちの鳴き声、鹿の足音まで聞こえそうだったが、大人たちの駆ける音がそれを打ち消した。猪狩りから戻ってきた犬を追うように里の大人たちが、狩った猪を丸太に吊るし、三人がかりでかつぎ、小走りに走り過ぎたのだった。

「明日は猪鍋するぞお」

男たちの声は里に響き渡った。

慈恵に別れを告げ、家に入る振りをして、家から続く裏山へ向かった。森は深く、陽も通さない。

顔にかかる葉と蚊とを振り払いながら進むと、李春が朝夕に木刀を振る場所があった。腰かける時に使う小さな台と、槍と木刀を立てかける背の高い木箱が置いてある。

「うーりい、帰ったよ。槍の稽古へ行ってきたんだ」

李春は重石を乗せた籠に近寄り、石をどけてうり坊を抱き上げた。

「おお、良い子だ良い子だ」

と言いながらうーりいに話しかける。うーりいも嫌がらずに、李春の頬に自らの鼻先をくつつける。

犬ほどけたたましくなく、鹿ほど素早くこくもない。牛ほど鈍重でもなければ、ネズミほど汚くもない。仕掛けられた禽獣取りにかかっていたのがうり坊だった。いずれ大きくなれば、真っ先に食われてしまう。見つけた李春は、誰にも分からないように家に持ち帰り、樹木で編んだ籠に入れた。いずれは山へ放たなくなる日が来るだろうことは李春も分かっていた。自分の身体よりも大きな猪を見たことがある。うり坊もいつかは大人になる。それまでは身の近くに匿っておきたい。

陽が落ち、李春が家に入ると

「李宇が帰っているよ」

母が嬉しそうに顔を向けた。言われなくとも気配を感じた。家の中がいつになく里の匂いとは違う、華やいだ香りに包まれている。

兄は手先が減法器用だった。百済里の者はおしなべてこの国の者よりも細かいことが得意だ。最

初は独楽や竹トンボのような子供向けの物を作っていたが、だんだんと作りは複雑になっていった。山に入り、土を選び、様々な樹木を持ち帰って来た。李宇は家とは別に庭に小屋を建て、日がなそこで土をこね、焼いた器や女が手や首に付ける飾りも作った。それは見た目には色が鮮やかすぎたが、それがこの国の物との違いを際立たせてもいたのだった。

李宇が何かを手に家に入ってきた。

「オンマー！（母さん）」

と言って、食卓にしている台の上に竹の筒を逆さにした。銅銭が次から次へと台の上で踊った。「チョンマル、カムサハムニダ（ああ！ありがたい）」

母は銅銭を押し抱いたが、何枚も床にこぼれた。それは李宇が自分の力で手にしたものだ。最初は、立つ市でむしろに敷き並べて売っていたが、やがて市で売ることだけでは飽き足らなくなり、それを売りに出かけた。何日も帰ることはなく、畑は母に任せ、時折帰って来ては小屋に籠もり、日がな手を動かしていた。

より大人に見えるよう口ひげを蓄えていた。そして何より才覚があった。李宇は作った物を家々を訪れて売るのはなく、人の往来がある道にむしろを敷いて物を並べた。これは市での経験を生かした。そして「百済伝来のものだ」と口上を並べた。

この国の者たちは海の向こうから流れ着く物を押し抱いた。それは目に見えないものを畏れるかのようにもあった。知らぬ場所から流れ着いた、見たことのない果物の実や流木でさえ拾い集めら

れ、取った木の実や干した梅と換えた。

そうでなくては、海を越え逃げてきた者たちを守ることは無かつただろう。山の斜面を切り拓き、家や畑をすることまでしてくれたのは、海の方こうから来た者たちだと畏れも感じたからだ、と聞かされていた。しかし里の年寄りたちは次第にこの世を去り、語られていくことも少なくなつた。それよりも日々の食べ物や明日飢えないことへの腐心が先に立つ。

里の中で李宇の生まれ持った手先と思いつきは群を抜いていた。物を売りに南の都まで行き、手に入れた鮫の歯を使つて腕輪や首輪を作り出してから、風向きが変わつた。海からの物を里で取れる物とで組み合わせることを思いついたのは李宇ならではのものだった。それは里の女たちの腕を飾るようになったばかりではなく、都でも同じように買われるそうだ。

あの知恵が自分にもあつたら——と李春は思わないでもなかつた。しかし同時に、この里へ逃げてきた遠い昔のことなど、李宇は思うこともないのだろう、という気持ちも生まれてくる。

李宇を交えて久しぶりの三人での夕食となつた。すでに猪と鹿の肉の塩漬は平らげてしまつている。このところはサトイモを煮立てたものしか台に乗つていない。またか、と思いはしたが口には出さずに済んだ。李宇が帰つて来たから、明日からはもつとましな物にありつけるだろう。それに里で猪鍋も振る舞われるはずだった。

「お前が帰つて来ると分かつていたら、無理をしても……」

と母がすまなそうに言い出すと、李宇は話を変えるために都の話をした。治める者が次々と代わ

り、乱や暴動が続き世情不安で、強盗や追い剥ぎが多くなり、町中を歩くときにはよほど気をつけなければならぬ。なるべく早く宿を見つけ、夜は出歩くことはしない。乞食の姿が目立ってきた。かと思うと牛車に乗った華美な服を着た者たちの姿も多く見る。

「なぜ」

と母は問うたが、李宇は首を振り

「それは分からない。世の乱れで富を得る者もいる、ということだろう」

李宇は続けた。

「あちらこちらで暴動や乱が起き、若い者が駆り出されてへいじが足りなくて、常に門を開いている」

へいじ、と聞いて李春は耳をそばだてた。

「へいじ、って兵士のことか？」

「そうだ、兵士だ。防人司にある兵隊のことだ」

「兵士が足りないのか……」

うつむいたまま李春は呟いた。

「はは、お前はまた年が達しないから相手にはされないぞ」

と李宇は軽蔑するように言った。都の混乱で、暴動を起こし制圧された者たちの首が城外に並べられている、と聞いても李春には怖れる気持ちは湧いてこなかった。むしろ、この時にある考えが

浮かんだ。そうか、いくらでも手が有りそうだが、年などはいくらでもごまかせると。

翌朝、李春は槍と木刀を持ち山道を登った。

時折、微かな雷の音が聞こえてくる。うーりを抱き上げ、籠に戻し網の間から木の実を入れると、忙しそうについばみだした。李春はまず木刀を振る。何も考えず、振る。次に木刀を槍に持ち替え「おうっ」「おうっ」と声を出しながら槍で空を突く。何度も突く。汗をかくと、それは大人が発する饅えた匂いに思え、苛立つて槍を止めた視線の先に木に止まった鳩が映った。

この時ふと、考えが浮かんだ。

「あの鳩をしとめることができたなら、望みは叶う」

何の確証もない考えだったが、それはすぐに大きく膨らみ、李春の心を満たしていった。足音もさせず息を止め、木の裏から狙いを定める。鳩は落ちつきなく首を動かしている。狙うなら背後から、下突きだろう。今だ！

気配を消したまま、李春は槍先を突きだした。両手に手応えを感じる。鳩の震えが伝わってきた。暫く突きの姿勢を止めたままにする。鳩は飛び立たなかつた。射止めたのだ。槍を下ろし、くーと鳴く鳩を槍先から外した。鳩は李春の両手の中で微かに身体を奮わせていた。

鳩にも心の臓があるようだった。李春の胸の動きと同じように、鳩も胸の箇所がどくどくと脈を打っている。やがて動きは止まった。李春は死がどのようなものかはまだ分からない。しかし、怖れるものとは違った。むしろ気持ちを高ぶらせる何かがあるような気がした。

おれもいつかは、このように死ぬ。それならなすべき事をしてこそだろう。志を忘れたら死んだも同然——

その時、ふと空に目を留めた。朝だというのに、空には雷鳴が轟いていた。李春から見える山々を見据える空が時折雷で光り、李春を照らした。

李春の浮かんだ決めごとを支えるようにも見えた。雷は李春を照らし包んだ時に、自分に新しい力が与えられた気がした。今なら何でもできそうな気がする。あの国へ行くことさえも……掌に付いた鳩の血を舌で拭いながら、空に身を預けるように突き出した。

李春はうーりいの柵へ近寄った。そして、石の上に腰掛けて話し出した。

「昔々その昔、百済の王は戦いに敗れ大きな船に乗って逃げました。船は嵐に揉まれながら倭の国へやって来ました。追っ手も船に乗ってたくさんやってきたのです。王は追っ手に殺されてしまいました。供の者は嘆き悲しみ、いつか国を再び百済に取り戻すのだ、と誓いました。そして、命から山の中でひっそりと暮らし、その時を待ったのです」

なあ、うーりい。李春は口調を換えた。

「もう、待ちくたびれてないのかなあ」

うーりいは狭い柵の中で動き回った。

「そうだよなあ、うーりいもここから出たいか。もうすぐ出してやるよ。その時は山へお帰り」

暴動や乱が絶えないから若い男がいくらでも求められている。兵士となり、手柄を立て防人司に

出入りすれば、どのようなことが待っているのか。行かなければならない、と李春は思い込もうとした。

「李春！いるのか、李春！」

慈恵の呼ぶ声が聞こえた。

「おう！今行く」

春の雷がまだ鳴る中、二人は槍の稽古へ行くために里を降りて行った。

夜中から土砂降りの雨となり、李春の山での槍と木刀の素振りも許さないようだった。それがやがて止み、今度は日が射してきた。これでは畑仕事も手伝えない。

李春は慈恵と共に家々を回り「何か役に立てることはないか？」と尋ねて回った。付いてきた慈恵も、唐突に問われた者も戸惑い、訝しげだった。

張り付けたような渋面の長老の一人から「そうだな、猪を取ってきて貰おう。そろそろ畑も荒らしに来る頃だ。一匹でも捕らえることができれば、褒美をくれる」

試すような口調で言われたのだ。それは「お前たちにはできない」と言われているのと同じだった。

「塚の原の守には銚を貸してやってくれ、と頼んでおく。明日朝、塚の原の社へ行ってくれ」

翌朝、槍の稽古を休み、李春と慈恵は王を祀った塚の原へ向かった。

ひんやりとした森を抜け、塚の原の前に立つ。小さな祭壇が設えてあった。見たこともない鮮や

かな紅い花が盛られている。大人たちから塚の原ではひざまづき、地に頭を付けて平伏することを強く言われていた。

二人は言われたように拝した後、社とは名ばかりの小屋の戸を叩いた。出てきた老人は里で見たことがない顔だった。二人を見ると馬鹿にしたように笑い、顎をしゃくった。入れ、という事なのだろう。

銚子は百済王ゆかりの物で、誰もが触れられる物では無かった。百済で作られ、船と共に渡ってきた、と言われていた。老人は黙って銚子を差し出した。領き受け取ると、今まで感じたことがない重さで腕に微かな痛みさえ覚えた。

「貸せるのは次の満月の夜までだ」

老人は背を向けたまま言った。お前たちに何ができると言っているようだったが、ともかく銚子にすることはできた。

「カヌンハムニツカ？（できるのかな？）」

嘲るような声を聞きながら二人は軋む戸を噛みしめるように、ゆっくりと閉めた。

銚子を持ちながら歩き出すと慈恵が不満そうに

「なんだ、あのハラボジ（おじさん）は。心の底から軽く見やがった。カヌンハムニツカ？だと」

慈恵が老人の口調を真似た。

「仕方ないだろ、まだまだおれ達は子供に見られるんだ。少し休もう」

大きな木の下は昨日の雨で湿ってはいたが、さほど濡れてはいなかった。草に腰掛けどちらからも無く口を開いた。二人きりの時は百済の言葉を使わず、倭の国のそれとなる。

「帰ってきた兄が言っていた。都も物騒だった。まだ乱や暴動が続くらしい」

二人とも百済を滅ぼし、新しくなった国の名前を口にするのははばかった。しばしの沈黙の後

「おれは、何としてもあの国へ渡る」

「どうやって？」

「志願して兵士へいしとなる。そして時を伺う」

「今、あの国へ行くことはできないぞ」

「倭の国とあの国は行き来も途絶えているからな。ただ、密には行ったり来たりはある。互いの国の物を交換するために細々と続いている。その船に乗る」

倭の国では、遠国のことよりも自国を収めるために力を削がれているようだった。

「一度は見てみたいんだ。おれたちがどこから来たのかを。この里へ来る前の、ひいおじいやひいおばあが生まれた国を」

そのためならば里とも母とも別れることができる。母には李宇がいる。男は家に一人いれば充分だ。

「そう簡単に船に乗ることができるか？」

「その時は漕ぎ手になっても良いと思う」

「まさか……」

呆然として慈恵は立ち上がった。

国が認めていない交易に使う船は小さいもので、行き先に着かないことも多く、海の底へ沈み二度と浮かび上がれない。辿り着くのは半分、行つて帰つて来ることができるのは、そのまた半分となる。一番危険なのは漕ぎ手だ。波が大きくなればなるほど投げ出されるのは漕ぎ手だったからだ。時に荒れ狂う波が船の食物や交換品をも投げ出すほどだと、兄がなぜか楽しそうに言っていたことを思い出す。

飲み込むのが嬉しいのか、波は笑っているかのように船や荷物、人がやってくるのを口を開けて待っているようだ。漕ぎ手はそれなりの見返りがあり、無事に行つて帰つてくることができれば、一生何もせずとも暮らしていける、と言われていた。

「ここで、こうしておめおめと生きていて良いのか？このままこの里で年を取り死んでいくのなら、おれはここを出る」

李春も立ち上がり、尻の土を手で払った。

「この地の先の先にある南の都へ行く。そこで兵士となる。それから、また考える。何とか海を渡りたい。」

海は荒れると口を開けて人や物を飲み込むようだ。笑つても見えると。へっ、笑つていると思えば怖くもないだろう」

自分を鼓舞するための強がりだったが、意外にも

「……おれも行く」

自分に言い聞かせる口調で慈恵が言った。李春は答えなかった。

「一緒に行こう」

木刀を振ろう、と言った調子で慈恵が言った。李春は慈恵の横顔を見つめた。慈恵は見つめ直して言った。

「おれたちはチング（友達）じゃないか」

そっぴ、百済の言葉を使った。倭の国で言う仲が良い者、とは違った契りを交わした、という響きがあった。

「おれを置いていかないでくれ」

「お前には妹しかいないだろ。畑や牛はどうする？」

慈恵は泣きそうな顔で李春の身体を両手で揺さぶった。

「どうにでもなる。母にはちゃんと話す。大丈夫だ」

「これから雨が続く。道もぬかり前には進みにくくなる。行くならばその後だろう。そのためには銅銭が必要だ」

「分かった。何でもする」

都までへ出るのは何日もかかる。途中、寺の境内や農家の厩で寝かせて貰ったとしても銅銭がも

のを言う。腹だつて減る。どうしても銅銭を少しでも多く手に入れなければならない。

「銅銭を得るために、この銚を使うんだ」

李春には考えがあった。兄の李宇が「ツタの若葉は丈夫」と言っていたことを思い出したのだ。銚を獲物へ放つても狙いが外れば、投げた銚を取りに行かねばならない。そうこうしているうちに獲物は逃げて、手遅れになる。自分たちには猪を追う犬などはいない。そして銚に葉を巻き付ける事など大人たちははしていないようだった。しかし、銚の柄にツタの若葉を巻き付け、それを掌で掴んでおけば、いったん手を放れても、すぐに手元へ巻き戻せる。外れても獲物にもう一度放つことができる。そして、猪は火や煙を嫌う。そろそろ温い風が巻き起こり、猪が畑を荒らしにくる頃だ。

「猪は火を恐れる。燻して追い出して、狩る」

それを聞いても慈恵は不思議そうな表情を崩さなかった。

二人は山の細道に入った。この山は李春と慈恵が幼いころから駆け回った、細い獣の道までも知り尽くした山だ。分け入って入ると、所々に小さな足跡を認めた。

「見ろ。この足跡。尖っていて爪の幅が狭い。鹿とは違う。この辺りでたむろっているはずだ」

李春は試しに森へ向かって銚を投げてみた。重さがあり、思うようには飛ばない。一度投げた銚を引き戻すにも力がいった。何度か大木へ投げてみて、それを引くことで感じを掴もうとした。

山の中腹で火を起こし、李宇の小屋から頂戴した乾いた木を積み重ねて燃やす。たちまち立ち込

める煙で涙が溢れてくる。それを大きな葉で仰ぎ、木々へ向かつて風を送る。

すると、微かな獣の鳴く声が聞こえ、風向きとは逆に逃げるように走り出してきた。

「来たぞ！」

猪を正面に見据えた時、心の臓が踊り、飛び出しそうに感じた。それでも李春は銚を構え、慈恵は取り押さえる籠を掲げた。正面から走ってくる猪を捕らえようとした。銚を投げる。重さがあった猪には届かなかつた。うぬ。銚を引き寄せ、もう一度放った。銚は猪の身体を掠めただけで地に落ちた。

始めのうちは上手く行かなかつたが、二度三度繰り返すうちに李春は何かを掴んだ気がした。いつか鳩を槍で射止めた時の感触を右手が思い返した気がした。そうだ、気配を消して、後ろからだ。別の猪も燻されて鳴き声を上げながら向かってきた。先ほどの猪よりも小ぶりだ。李春はいったんやり過ぎし、手に力を込めた。突然、身体が急に大きくなったように感じた。右足で土を蹴った。今だ！

銚を走り去ろうとする猪の腹の上に届くように思い切って投げつけた。銚は少し高くあがり、やがて猪の下腹部に当たると、大きな鳴き声が山に響いた。激しく動く猪にそのまま引き吊られ、銚ごと持っていられないように両足に力を込めた。少し猪の動きが鈍くなったのを感じた。

「慈恵、籠だ！」

李春は小さく叫んだ。慈恵は大きな体ごと籠を逃げようとする猪にかぶせて、自分がその重石と

なつた。

「捕まえてきました」

うやうやしく李春は告げた。長老は猪と引き替えに仕方なさそうに銅銭を李春の掌に置いた。李春は念押しを忘れなかった。

「満月の夜までに、また持つてきます。ありがとうございます」

「ミブダ（頼もしい）」

と長老の一人は洪面のまま、言葉を添えたが、心の中までは読み取ることではできなかった。

一度、掴んだことは身体が忘れない。満月の夜までに、李春と慈恵はもう三匹の猪を捕らえることができた。

そして、満月の夜が訪れた。雨の季節はすでに終わっていた。

都の匂いと共に李宇が家に帰って来たのは、長雨が明けて暫くしてからだった。世情はますます乱れ、暴動に巻き込まれそうになった李宇は「暫く、都へは近づけない」とこぼしていたが、竹の筒からは前よりも多くの銅銭が台へぶちまけられ母が嬉しさで涙さえ浮かべていた。

李春の心は決まった。今が時だ。悟られないよう槍の教範や仲間達と別れを告げた。髪が白くなってきている母親を見ると少し辛かったが、母には兄がいる。家に二人の男はいらない。いつかはこの家を出なければいけないんだ、と言ひ聞かせた。

晴れた日、李春は慈恵を誘い里を隈なく歩いてみた。初夏の陽が照らす百済里は腹が立つくらい

穩やかだった。川では女たちが洗濯をしている。洗うものを石に叩きつけ汚れを落とす、それは百濟里の習わしだ。ここで生まれ、気が付いた時は走り回っていた。子供の時は倭の国の村へも行き、子供同士遊んだものだが次第に遠のいた。やはり自分たちとは違う、とどこかで感じるものがあった。市が立つ日や祭りの時の、底抜けの明るさは里にはないように思えた。

慈恵はゆっくり歩く李春の前に回った。

「お前は怖くないのか。途中、追いはぎや山賊に会うかもしれない。無事に都に着けるかどうかも分からない。その先どうするんだ」

「どうにでもなる。世が乱れていけば、それに乗ずることもできる」

「死ぬかもしれないんだぞ」

怒ったように慈恵は言ったが、李春は少し笑って

「死ぬことが怖いとは思わないんだ。何もせずに生きている方が自分には恐ろしい」

もう慈恵は何も言わなかった。

夜明け前に里を出る、と李春が慈恵に告げたのはその日の夕方だった。慈恵は少し唾を飲み込み、黙って頷いただけだった。雨さえ降らなければ、と李春は念じていた。気持ちいが削がれないよう木刀を振り続けた。

やがて山から下り、李宇の小屋の前で立ち止まった。焦げ臭い匂いが戸にも染みつき、それが李春を逡巡させているうちに突然戸は開かれた。さらにきつくなつた焦げの匂いを漂わせ、李宇が青

白い顔をさらに青くさせたように立っていた。李春はたじろいだ。

「何だ？」

「いや、何でもない」

「槍の腕を上げたそうだな」

殆ど小屋に籠もっているだけかと思っていたが、誰から聞いたのか、思いがけないことを言い出した。

銛の扱いに長けてきたからなのか、槍の稽古でも教範から「おお、上達したものだ」と確かに言われていた。李春からもう言うべき言葉はなかった。匂いから避けるように踵を返した。

そして、浅く眠った明け方に李春は目覚め、荷物をまとめた。蓄えてある食べ物を少し小袋に入れた。戸口で木刀と槍を取ろうとして、手が何かに触れわずかな音を立てた。母親が目覚めたのではないか、と自分でも驚くくらいびくっと身体を震わせ、家の中を見回した。

木刀に銅銭が木の皮を通して束ねてかけてあった。それはまるで「持って行け」と言わんばかりに吊るしてあった。李宇は気づいていたのか。李春は束ねられた銅銭を押し抱いた。

何かを見つけたのか、犬のけたたましい鳴き声が空を突いている。李春は銅銭を握りしめ、ひとまとめにした荷物へ入れた。

山へ入り、うーりいを柵から出した。

「うーりい、これでお別れだ。いよいよ里から出るよ。山へお帰り」

木の実を置くと、うーりいはいつものように少し声を上げながら食べ出した。元気でな、うーりいは何度か土の匂いを嗅ぐ動作をしてから、そのまま山の上へ登って行った。

坂を降り、待ち合わせに決めた道へ出る手前で、木々の間に身を隠した。誰にも見られるわけにはいかない。

しばらく待つと慈恵がやってきた。すでに泣き顔になっているのが月の明かりに照らされて見えた。

「すまん、おれは行けない。母を一人残して行くことはできないんだ」

幼子のように慈恵は泣きじゃくった。

「どうしても母に言い出せなかった。何て言っても良いか……弱虫だと笑ってくれ」

「良いんだ、慈恵分かってるよ」

もし船の漕ぎ手となるならば、慈恵の身体は大きすぎた。小さな船では邪魔になる恐れもある。

「本当にすまない」

「良いよ。モンジャガオプソ（問題ないよ）」

聞いて慈恵は再び声を挙げて泣いた。

「アイゴー！ヨンソ！（許してくれ）」

「李春は？と聞かれたら知らない、とだけ言ってくれ」

李春はもう振り返らなかつた。心の中で叫んで、後ろ姿で右手を振った。

「アンニョン！チングー！（さらば、友よ）」

それは慈恵へだけではなく、穏やかさが許せなくなったこの里への別れでもあった。李春は月明かりだけを頼りに前へ進んだ。夜が明けるまでにはもう少し待たねばならない。暗いうちにどこまで進めるか。

李春にはまだ目にしたことがない、あの国へ行く海が見えていた。大きな波も笑っていると思えば恐ろしくもない、と言った日のことを思い出した。

その時、左足に何かがぶつかってきた。暗闇で恐れを感じたが、それはうーりだった。

「何だ、山へ帰らなかったのか」

眩き歩き出すと、うーりいは李春の歩みに合わせるように付いてきた。振り返らずとも歩みを進めているのが分かる。そうか、おまえと一緒に寂しくはないな。少し欠けてきた月が足元を仄かに照らす。震えが来そうで、李春は全身に力をこめた。握った拳を鼓舞するように振りながら歩く。荒れ狂う、という波に自分の身体がいつか翻弄される日を思って、少し笑った。

審査員特別賞

「草王宮」

市川 謡



百済の女はつまましい姿がよいとされている。

白粉はできるだけ薄く、そして紅はささない。

だが、部屋付きの唇はぼつてりと赤く、紅をさしたかのように目立つ。

部屋付きは百済扶余王宮につとめる宮女だ。しかし宮女といっても掃除や洗濯の下働きをする器量は十人並みの女である。いつも動きやすい短めのチマをはき、前掛けをたれ、手は水仕事でいつも荒れている。

皆は彼女のことを名前ではなく役職の部屋付きと呼ぶ。

宮女の中には王族の男達にめでたく見染められ、お手付きになるということもあったが、部屋付きは最下層の宮女なので、そもそも王の一族が住む場所、すなわち宮殿の一番奥に入れる身分ではない。

つまり部屋付きは長年王宮に住んでいながら王族の男達の尊顔を仰ぎ見ることはなかったのである。

ところが、日本の日向の国の森の中で部屋付きは初めて王子の顔を見ることになった。

西暦六六〇年、百済が新羅との戦いに負け、多くの百済遺民達が古来からの縁をつたってこの国に逃げ込んだからだ。

部屋付き達、百済遺民達はこの地を新しい国にすることにした。木々を伐採し、生い茂る草を刈りこんで中央に広場を作り、それを中心に住居用の大小様々な掘立小屋を作った。

そして広場より少し小高い場所に掘立小屋よりは少しはまともな、しかしやはり簡素な屋敷を作り、そこを「王宮」とした。

百済の王子が住む場所である。

部屋付きが王子の夜伽に呼ばれたのは夏のおわりの頃だった。

王の年老いた乳母が部屋付きに近づき、そつと耳元でつぶやいた。

「今晚お前はありがたくも王子の夜伽を承ることになった。昼間のうちに体を洗い、準備をなさい」

部屋付きは驚いた。しかしすぐに理解した。ここには若い適当な女がほとんどいないのだ。

王子はまだ若く、当然正室も側女もいたが、正室は戦いの中で死に、多くの側女達も生死が不明のままだ。

部屋付きは動揺しながら粗末なあばら屋の暗がり衣服を解き、水で絞った手ぬぐいでゆっくり丁寧に体をふいた。

もとより部屋付きに拒否権はない。そして部屋付きも思いもかけないこの僥倖を無駄にする気なでもない。王族との夜伽は宮女にとってこの上ない誉れなのだ。

故国、百済では階級によって身に着けるべき色が決まっている。最上級の王族は紫、貴族は緋色と青色の衣だ。庶民の出である部屋付きは無色の麻の着物しか着ることができない。

昔、部屋付きは宮殿で王族の紫衣を洗濯したことがある。紫衣は水を張ったたらいの中でさらに深い色になり、絹地は部屋付きの荒れた指先を柔らかく包んだ。高貴な身分とはこういうものなのだ。部屋付きは深く了解したものだ。

今晚、その紫衣のもっと深い所に触れることを考えると部屋付きの胸は高鳴った。

宮殿の中での礼儀はそれなりに知っているが、王族との夜伽での振る舞いは教えられたことがない。閨の中での正しい足の開き方はどうするものだろうか。と部屋付きは真剣に考える。

その晩、部屋付きは乳母に従い、王宮と呼ばれる屋敷の門をくぐった。

故国の宮殿は朱色の柱がたち並び、優美な草花紋が彫られた瓦が葺かれていたが、目の前にあるそれは屋根を茅で葺いた、ただの簡素な家である。

入ると土間があり、ほんのりと香の香りがした。板の間になると炉があり、チロチロと小さく火がたかれている。その火の明かりが、炉の奥の天井から引つ掛かっている綾の布を照らしていて、かろうじて王族の住居の体裁を保っていた。そして、その綾の向こう側が王子の寝所になっているらしい。

「着物を全部脱ぎなさい」

乳母はその綾の布の前で、部屋付きの着物を脱がせた。素っ裸の彼女の体を点検し、刀などを持ち込んでないことを確認する為だ。

それから乳母は部屋付きをつやつやとした純白の絹地でふんわりと包んだ。

なんて気持ちいいんだろうと、部屋付きは体にまとわりつく絹の感触にうっとりとした。

乳母の手が部屋付きを綾の布の向こう側に導いていくと、そこには木造りの簡素な寝台があり、紫衣を着た王子が横たわっていた。

存外、貧相な男だ、と部屋付きは思った。

百済は昔から戦いつづきの国だったゆえに男は兵になるべく鍛錬し、鋼のような肉体を持つのがいいとされていた。

しかし目の前の王子は痩せて頬がこけ、目に力がない。ただ紫の光沢だけが王子の体を柔らかく包み込んでいる。

乳母は部屋付きを王子の隣に寝かせ、寝具を整え、枕元の美しい小さな燭台に火をつけた。

「王子、今晚はいい夢をごらんになって、ぐっすりとお眠りできますように」

乳母はゆっくり後ずさりして綾の向こうに消えていった。

翌朝、部屋付きの膳には少しだけ豪華なおかずがついた。一切れの焼き魚だ。

昨晩の褒美ということだろう。扶余の宮殿であるのなら、きつと美しい絹地一疋ということになるだろうが、流浪の身ということであれば、これぐらいが関の山だ。

しかし、魚一片としてこの生活の中ではめったに食べられないご馳走である。部屋付きは魚にむしゃ

ぶりつく。

昨晚、闘の中で王子の態度はたいそうぞんざいなものだった。

部屋付きも男は初めてではない。扶余の宮殿が新羅に囲まれ、陥落するまでの数か月、場内の兵士達は皆、気がいら立ち、さかりのついた雄猫のように女を求めた。

そんな刹那の時間を生きていた男達に比べて王子は無気力で、寝所ではただひたすら快楽を与えられることだけを望み、自分の欲求に執着した。

しかし王族の夜伽をするということは、そういうことなのだ。と部屋付きもはなから承知しているので、たいして気にもとめていない。

そんなことより部屋付きは王子の夜伽をしたという名誉に深い満足を感じていた。

扶余の宮殿で、夜伽の指名を受けた宮女が美しく装い、長い廊下を歩いて行くのを部屋付きは見たことがある。他の宮女達の嫉妬の眼差しはむしろ女の体温を高めるのか、選ばれた女の白粉の匂いはより濃くたった。

ここは森の中で長い廊下もないが、やはり昨晚自分もあの花道を歩いたのだという自負が部屋付きの体を暖かくしていた。

王子は王の二番目の息子であった。

趣味は詩作と管弦で、宮廷の楽団の音楽にあわせて即興で踊れるほどの舞の名手でもあったが、

武人としての力量はとぼしく、父王の悩みの種でもあった。しかし扶余の王宮が存在していた頃はまだよかった。彼の苦悩は宮殿が落ち、兄王子が戦死した後から始まった。百済の次期王になってしまったのである。

父王は今や新羅の地になってしまった故国の地にひっそりと潜伏し、百済貴族たちと共に再起の時をうかがっているらしい。

父王は弟王子に言った。

「おまえは私の跡を継がなければいけない。紫衣にたる人間にならねばいかぬ」

紫衣は王族の誇りであり、責任でもある。

しかし弟王子は昔から紫色は嫌いだった。

色が重すぎるのだ。もっと色味が軽い浅緑や薄青のほうが自分にはよく似合う。

初めてこの日向の村に到着した夜、王子は松明を持った数名の兵士に囲まれて森をつきつた。

「王は振り返っては決していけません。ふりかえるとその年は凶年になると申しますから」

と従者は言った。

いつのまにか一族の長になり、この暗闇の中を先頭で歩かねばならなくなった人生を弟王子は恨んだ。紫の着物はますます重く彼の肩にのしかかり、王子は夜寝れなくなった。

部屋付きが王子の夜伽に毎日呼ばれるようになったある日の昼、乳母が部屋付きのところをやっ

てきた。

「これを王子の夜伽に上がる時に着るのです」

それは鮮やかな朱色の絹のチマとチョゴリであった。部屋付きは自分の手の上にある、どっしりとした重い絹の存在に驚いた。貴族しか着てはいけない美しい絹地が自分のものになる。これはもう奇跡としか思えない。

絹のチョゴリは腕を通すと、するりと部屋付きの肌に吸い付くように滑り、チマの腰の紐は締めると、きゅつとまるで鳥のさえずりのような音がした。

扶余の王宮には色とりどりの美しいチマの裾を引きずった優雅な魚の群れのような宮女達がいた。彼女達は宮廷の行儀を熟知し、つねにたおやかな姿勢を崩すことがなかった。

部屋付きは彼女達に憧れてもいたし、同時に粗野で無知な自分をとて恥じてもいた。

だから王子の閨の中でも、あの宮女達ならどうふるまうのだろうかといつも考えていた。しかし、しっとりとした絹の感触に全身を包まれた高揚感の中で部屋付きは気が付いた。

ここは扶余の王宮ではなく、深い森の中なのだ。獣や草花が支配する世界で、なにも王宮の鑄型から造った女達のようにしとやかにふるまう必要などありはしないではないか。

部屋付きは窓辺に近づいて太陽の陽の中に立ち、両手でチョゴリの襟元をぐつとくつつひろげた。紅い光沢に包まれた白い胸の谷間がすこやかに上下している。

自分はこんなに美しいものをずっと隠していたのかと部屋付きは初めて気が付いた。

その晩、部屋付きはその朱色のチマとチヨゴリを着て、王宮に向かい、いつものように綾の布の前で素っ裸になって王子の寝台に上がった。

部屋付きの指先は今や雑仕女の仕事から解放され、とても滑らかだ。その柔らかな指先で部屋付きは王子の躰を慰める。

部屋付きはもう貞淑な女のふりはしない。

ただ王子が求めている強い眠り薬に代わる快楽を与えることに没頭することにした。

雉、猪、鹿、野うさぎ、鮎、鴨。

王子は毎晩、部屋付きを夜伽に呼び、部屋付きの朝の膳にはねぎらいの肉一片がつく。

彼女がその肉の味に慣れ、特別なものを感じなくなった頃、王子の躰は完全に部屋付きにおちた。ある晩、部屋付きは寝台の上でふと腰の動きを緩め、自分の体の下にいる王子を見た。

そこにはただ額にうっすらと汗をかき、快楽に顔を歪めた若い男が喘いでいるだけだった。

少し開いた口元からのぞく出っ歯と無精ひげがたいそう見苦しい。

ふいに扶余の宮殿の廊下の冷たく硬い感触を部屋付きは思い出す。王族達とすれ違う時、部屋付き達、最下級の宮女は廊下に毳のようにうづくまらなければいけなかった。床ぎりぎりの目線で王族達のブーツの先っちょが通りすぎていく光景がよみがえってきて、部屋付きは思わず笑いそうになった。

自分はその中の一人を今、腰の下に組み敷いているのだから。そしてその事実は部屋付きの快樂をもっと深いものにした。

日向の国は扶余の地より太陽の光が多く、故国では見たことがない可憐な花が草むらで揺れている。

部屋付きは野花を一輪手折った。今晚の夜伽に向かう時に髪を飾るためだ。

その時、広場のほうで人々の歓声があがった。

どうやら新たに百濟遺民の一団が到着したらしい。広場の中心に人垣ができ、遅れてきた同朋の旅の労をねぎらっている声がにぎやかに聞こえてきた。

部屋付きは花を持ったまま広場に行き、人垣の中を覗きこんで思わず舌打ちした。

王子の愛妾、玉うさぎが到着したのだ。

旅塵に汚れてはいるが、玉うさぎが切れ長の美しい目を輝かせ、迎えに出た同朋達と笑いながら語りあっている。木漏れ日が彼女の優美に盛り上がった頬にあたり、彼女の美貌をますます輝かしく照らし出していた。

その晩、当然玉うさぎが王子の夜伽に呼ばれ、部屋付きが摘んだ野花は彼女の髪を飾ることもなく萎れた。

王子が玉うさぎを初めて見たのは扶余の宮殿の刺繡房の中であった。

その中で玉うさぎは長いチマの裾を広げ、うつむきながら細くしなやかな指先を動かし、王族の衣服に刺繡をほどこしていた。

玉うさぎの周りだけ湿気をおびた、たおやかな空気が漂っているようで王子の目は彼女に釘付けになった。

彼女は最下位の貴族出身の出だが、母親が奴婢ということもあり、幼い頃から宮殿に出仕したらしい。王宮の中で育ち、躰や教養をみっちり身につけられた、いわば王族の花嫁になるために生れてきたような女だ。すべてにそつがなく、どんな時でも宮廷の約束どりにふるまう術をしっている。

彼女の美しい白い肌と切れ長の瞳を見て、王子は彼女を「玉うさぎ」と名付けた。

日向の国に到着した玉うさぎを久しぶりに寝所に迎えた時、王子は懐かしさにあやうく泣きそうになった。

閨の中で玉うさぎが宮廷の慣習をごく自然にやったからだ。

王子は百済の王宮での平和な生活をまざまざと思い出した。趣味の笛や、贅沢な菓子や酒、季節の風流な行事。長くて高い堀に囲まれた王宮は外界に閉ざされた楽園だった。いくえにも回廊が重なった一番奥で、たくさんのチマに囲まれて生活していたころ、王子は体も心も暖かだった。

だが今は寒くてたまらない。

家臣達が今、王宮と呼ぶこの簡素な屋敷は隙間風があちこちから入ってくるのだ。今こうやって玉うさぎの暖かな体を抱いていても王子の寒気はとれそうにない。

玉うさぎがいれば、当然ながら部屋付きはもう用なしだろうという百済集落の予想は意外にもはずれた。

玉うさぎが連日夜伽をつとめた数日後に乳母がまた部屋付きのところを訪れたのである。

「玉うさぎ様はお体が弱くて、ここ最近お疲れのようだ。部屋付き、今晚の夜伽を頼む」

乳母ですら、この時まで本当に王子が玉うさぎを気遣っているのだろうと思っていた。

しかし、その後も王子はときどき部屋付きを寝所に呼ぶようになっていった。

昼過ぎになると乳母が今晚の夜伽を申し付ける為に集落の中を歩いていく。

集落の東に部屋付きの住居があり、西に玉うさぎの住居がある。その日、乳母がどちらの方向に歩いていくかで、その日の王子の夜伽の相手が分かった。

西の方に行くことが多かった乳母がだんだん東の方に行くことが多くなり、最近ではもっぱら東に行く。乳母ですら、なぜ王子がこんなに部屋付きに執着するのかが分からない。

玉うさぎの出現は皮肉なことに部屋付きの存在を同朋達に認めさせることになった。

なにしろ王子はあの美貌の玉うさぎより部屋付きにご執心なのだ。今や誰も部屋付きの存在を軽んじたりはしない。

みずみずしい緑の葉の上に陽の光を受けて、もっちりと光っている団子が部屋付きの前に出された。濾した栗の実をもち米で包み、刻んだ胡桃をまぶした手のこんだものだ。部屋付きは柔らかな団子をつまみ、わざと小さくかじった。この至福の時間を少しでも長引かせるためだ。

口の中に胡桃と栗の甘味がひろがる。

ふと玉うさぎも同じ菓子を与えられているのだろうかと思つた。連日の夜伽を自分が勤めているからだ。玉うさぎに対しての憐れみと優越感が団子をさらに甘くさせた。

部屋付きはもらった絹のチマとチョゴリを着て、ゆっくり櫛で髪をとした。できるだけ優雅に髪を結び、最後に昼間につんでおいた野の花を挿す。選ばれた女であることの愉悅が部屋付きを包む。夕方、乳母がやって来て、部屋付きを「王宮」に先導した。秋が深まってきて、紅葉の木が深紅に染まり始めている。

ちようど紅葉と同じ朱色の絹のチマを部屋付きは両手でつまんだ。裾が長くて歩きにくいからだが、この動作はたいそう典雅で気に入っている。

歩く先には草の絨毯しか続かないが、まるで扶余の王宮の長い回廊を歩いているような錯覚に部屋付きはおちいる。

彼女がもつとも誇らしく感じる時間だ。

王子は難しい顔をしながら、百済からの使者の話聞き、その横顔がますます曇ってくるのを玉

うさぎは目の端で感じていた。

こういう時、宮女は身じろぎ一つしてはいけない。目を伏し目がちにし、話を全く聞いてないふりをして側にひかえる。宮女は政治に関与しないし、大事な話はけっして外に漏らしてはいけない。それが王宮の掟である。

玉うさぎはうつむきながら話を聞かないように頭を空っぽにしようとしたが、それはかえって玉うさぎを心中の苛立ちに集中させることになってしまった。

今晚の王子の夜伽は五日ぶりだ。百済の王宮にいる時には王子は正室を含め、たくさんのお女がいたので、数日間夜伽に呼ばれないことなど気にもとめなかったが、今は違う。

あの雑仕女の部屋付きとたった二人で王子の寵愛を奪い合い、その戦いに負けていることに玉うさぎは激しい屈辱を感じていた。

べつに王子の愛を乞いたいのではない、宮女としての尊厳を守りたいのだ。

数日前、彼女は夜伽に向かう部屋付きが歩いているのをたまたま見かけた。

たかだかと黒い髪を結い上げ、朱色の衣に身を包んだ部屋付きの晴れやかな顔はずいぶんと玉うさぎを傷つけた。しかし、彼女はそんな感情はおくびにも出さない。

宮廷では感情を抑制できない人間は生きてはいけない。とりわけ嫉妬深い宮女などもっとも嫌われる存在である。

玉うさぎもかつて「始末できない感情はチマの奥深くにしまいこんでしまいなさい」と年寄りの

宮女から教えられた。

だから今、玉うさぎのチマの奥はひどく黒い。

王子はさらに寝れなくなった。

使者が故国にひっそりと潜伏している父王が大和朝廷の力をかり、近く再起をかけて戦うつもりだという事を伝えてきたからだ。飛鳥の天智帝もどうやら兵を出すと確約したらしい。いよいよ戦かと思うと、王子は不安でたまらない。

戦も怖い、皆の目もつと怖いのだ。

百済にいた頃には王宮の高い壁が王子の姿を隠してくれていたが、このむきだしの森の中では王子が身を隠すところなど、どこにもない。武人として猛々しくもなく、政治的にも有能ではない自分の姿を百済の民にたださらすだけである。

この前の夜中にふいに誰かが

「おまえは紫衣にたる人間ではない」と囁く声を王子ははっきりと聞いた。

王子は暗闇の中おののき、震えが止まらなかった。

その時、隣に寝ていた玉うさぎが王子を優しくさすり、いろいろ言葉をつくして慰めてくれたが全く役に立たなかった。

王子は今すぐ玉うさぎではなく、部屋付きが欲しいと思った。

宮女の鑑のような貞淑な玉うさぎにはこの森も、王子の心の中も暗すぎて迷うだけだろう。

だが部屋付きは違う。

彼女は野卑で熱い体を持っているからだ。

闇の中で部屋付きが肉食獣のような無駄のない肉体をしなやかに動かし、黒い髪が激しくうねるのを見ていると、王子は崇高な気持ちになる。

古来から獰猛な獣は霊獣としてあがめられるが、その獣についていけば自分はこの暗い森から迷わずに出れるのではないか。

部屋付きの熱い体がくれる快楽はひよっとしたら自分に野生をも授けてくれるのではないかと王子は錯覚する。

王子の夜伽には連日部屋付きが呼ばれるようになり、玉うさぎが王宮を訪れることはすっかり絶えた。

戦がいよいよ近いと百済の集落に緊張感がただよい始めた頃、軍事訓練をかねた猪狩りをしようということになった。

百済の集落の東の方にある山はそれほど高くないので簡単に登れ、しかも頂上付近が広場のようにならにひらけている。山の背後には海があり、ふもとの海岸から急峻な斜面を勢子達が回り込んでいけば獣達をその頂上に追いつめやすい。そこを待ち構えていた兵士達が弓矢をひいて獣を射止

めるといすんぼうだった。

狩りの日は晴天で、空気が冷たかった。

軍事訓練とはいえ皆、弁当を持ち、ちよつとした物見遊山である。

近づきつつある戦いの緊張感はあるが、ひよつとしたら故国に帰れるのではないかという希望が百済遺民達の足取りを軽くした。

誰かが歌いだし、それに誰かが即興の歌を作って応え、太鼓や笛も加わって、まるで賑やかな楽団のようになった。

部屋付きはその日は特別な日なので、昼間から朱色の絹の衣服を身に着けていた。裾が長くて少し歩きにくい仕方がない。

部屋付きはちらりと後ろを振り返る。

玉うさぎが王子の年老いた乳母と一緒にトボトボと歩いてきているのが見えた。

最近ではふさぎ込みがちなせいか、玉うさぎの白い顔は曇っている。

一行は山頂に到着すると、ちよつと小高い場所にある岩を玉座にみたて、その周りに何本か木を打ち込み、布をかけて幕屋にした。

そして玉座のまわりに百済の軍旗をいくつも立てた。その日は風も強く、旗はバタバタと力強い音をたててはためいた。

銅鑼が盛大に鳴らされる中、家来にいざなわれて紫衣の王子がそこに座った時、百済の民達は在りし日の故国を偲ばせるような光景に酔った。しかし、とうの王子はその岩の玉座の冷たさと固さに閉口している。

狩りの様子ははかばかしくなかった。

なかなか予定ど通りに獲物が頂上の広場までやってこないのだ。勢子達は海に面した斜面を駆け回っているようなのだが、思ったように獣を追い込めないでいるらしい。

王子も不機嫌な顔をし、弓矢をかかえた兵士達も手もちぶさたである。

見物していた女達もさすがに退屈になった。

誰かがむこうの木立の間から水平線のキラキラとした光が見えると言いはじめ、女達は海を見に散歩に行くことになった。

部屋付きも長いチマをつまみ、木立を抜けていった。人の手のはいつていない森は緑が深く、途中何度も女達はチマの裾が小枝や棘を持った草にひっかかって情けない声をあげた。しかし木々を抜けた先、岩場がつづく傾斜地の前に出たとたん目の前に大きく海が広がっていて、皆、一斉に感嘆の声をあげた。

扶余の王宮は背後に山があり、その脇を白馬江という川が流れていたが、皆、海というものにはなじみがなく、百済遺民のほとんどが、この国に逃れてきた時に初めて海というものを見た。それ

は黒く恐ろしいものであった。しかし今、目の前にある海はどこまでも広く、穏やかで青が深い。

部屋付きはもっとよく海が見えないかと女達の群れから離れて一人歩いていった。

潮風が吹き付け、さすがに少し肌寒く感じて部屋付きは衣服をかき寄せた。

遠くで歓声があがった。

銅鑼の激しい音も聞こえる。

獣が首尾よく追い込まれたのかもしれないと部屋付きが後ろを振り返ると、驚くことに玉うさぎが立っていた。

部屋付きの後を追いかけてきたらしい。

玉うさぎはひどく無表情で、口角が下がり、いつもの美貌はどこかに消えてしまっていた。

「…散歩で会ったついでに、宮女として忠告してあげようと思って」

玉うさぎの眉の間は黒く煙っている。

「…なに？」

「王子は気まぐれだから、あんまり調子にのらない方がいいわよ。その恰好とか」

玉うさぎは部屋付きの絹の衣を目で刺した。

「王子からいただいたものだけど」

「でも、絹はあなたの身分では分不相応でしょ。わかまえたほうがいいわ」

部屋付きは鼻白んだ。わかまえるとはどういう意味だ。秩序が支配するあの整然とした宮殿なら

ともかく、獸がでるようなこの森の中で一体何をわきまえるというのだ。

「わきまえないといけないのはあなたの方じゃない？毎日、王子の夜伽に呼ばれているのは私なのよ」

部屋付きの優越感に満ちた言葉は玉うさぎの最も痛いところをつき、玉うさぎのこめかみに青い血管が稲妻のように走った。

「王子は物珍しただけよ！王宮では見ることがなかった珍しい獸を手に入れて遊んでるだけじゃない！戦争に勝ったら、私達またあの扶余の王宮に戻ることになるわ！そしたら、あなたはまたもとの雑仕女に逆戻りよ！」

また遠くで銅鑼や太鼓の音が聞こえてくる。

部屋付きは怒りの白い霧がたちこめる頭の中で、ふと王子はまだあの冷たい岩の玉座に腰かけているのだろうかと思った。

皆は興奮していたが、彼女にとってはこっけいで、哀れな情景であった。

この森の中では、なにもかもがはぎ取られてしまう。

宮廷での尊厳も、王族の誇りもだ。

玉うさぎは宮女としての優雅さを失い、唾を飛ばして蒼白になっているし、闇の中で紫衣を脱いだ王子は、ただ女の体に溺れる弱い男なってしまっていた。

「戻れないわよ、扶余には。きつと戦争には負けるから」

部屋付きは神託を伝える巫女のように高々と声を出し、彼女自身がその言葉に驚いた。しかし、そうなのだ。

あの王子の様子や、百済遺民の集落をみるかぎり、百済に復活できるほどの生命力が残っているとはとても思えない。

「…あなた、何を言ってるの？あなたはそれでも百済人なの？」

玉うさぎは血走った目を大きく見開いている。

ずっと聞こえていた太鼓や銅鑼の音が急にやみ、かわりに男達のはげしい怒声が聞こえてきた。

部屋付きは足元の斜面の岩場にびっしりと黄色い花が群生しているのに気が付いた。岩の窪みの、ほんの少しの土の上に根を下ろし、海から来る強い風を受けながら震えている。花の腰は大きく曲がっているが、たくましい枝を好きなように伸ばしていた。

「私は百済人だけど、百済じゃなくても生きていける。だから国は滅んでもらってもかまわない」

部屋付きの目は哀しげだったが、声は力強く、身にまよっている朱色のチマとチョゴリは強い潮風に吹かれて赤々ともえていた。

その時、突然一頭の猪が脇の木立からすごい勢いで飛び出してきて、部屋付きに体当たりし、その勢いのまま斜面の方に彼女と一緒に転がり落ちていった。勢子達が追い込みに失敗した尻に一本矢が刺さったままの手負いの猪だった。

玉うさぎは悲鳴をあげ続け、すぐに百済の民が駆けつけてきたが、部屋付きの探索は難航した。足場の悪い急斜面の上に、すぐに日が落ちてきたからだ。

明けて翌朝、かなり斜面を下った先の松の根っこに部屋付きが引つかかっているのが発見された。部屋付きはすでにこと切れていた。

猪に体当たりされた時に脇腹に牙が刺さったらしく、朱色のチマとチョゴリはさらに深紅に染め上げられていた。

王子は部屋付きの遺骸に取りすがって慟哭し、あらためて皆、王子は部屋付きにそんなに執心だったのかと意外に思った。

部屋付きの遺骸は粗末な棺に入れられて集落のはずれに埋葬された。そして、その土饅頭の上に小さな石が一つぽつんと置かれた。

佳作

「オサラバ」

いっき



杉櫓に灯された焰は、この瞳に映る全てを朱に染めた。

柔らかな夜空を衝かんとするほどに猛々しく燃え盛る炎が、封印されていた私の記憶を徐々に、徐々に呼び醒ます。

そうだ……どうして、忘れていたのだろうか？

幼い頃から毎年、私はこの師走祭り、必ずあなたに会っていた。そして二人で、この美郷に語り継がれていた『百済王伝説』の話をして、心躍らせていたのだ。

冬の風は冷たさを忘れて、熱く、強く、祭りを観る者に纏い付く。揺らされる炎は不規則なりズムを以って、龍の如くその身を捻らせた。

耳を突いて鼓膜を震わせるのは、バチン、バチンと木の弾ける音。迎え火に照らされながら、神門神社へと向かう一行の足音。そして、彼らを見守る皆の歓声。

それらは年に一度のこの再会を、華々しく鮮やかに彩ってくれた。

それは、そう……百済の王である禎嘉と、王子である福智の九十キロ米越しの再会。

そして私とあなたとの、師走祭りの日にしかできない再会でもあったのだ。

*

「私は大きくなったら、都会に住む」

幼い頃から、ずっとそう言っていた。

何故なら、美郷で生まれ育った私には、都会の全てが美しく輝いて見えたから。

森の木々の代わりに目に映るのは、天に届くほどの勢いで建ち並ぶ高層ビル。日が落ちてからも真っ暗になるなんてことはなく、洪水のような光で溢れていて、夜景が実にロマンチックだ。

そして、群衆は誰も、田舎では見たこともないようなお洒落な服を身に纏って、綺麗に舗装された道路を上品に歩いている。

私はそんな都会の一員になるのがずっと夢だった。高校を卒業したら美郷を離れて、都会で暮らして就職して、結婚もして家庭を持つ。頭の中では、そんな人生設計が出来上がっていた。

だから私は、誰よりも一生懸命に勉強をして、都会の大学に進学した。そして卒業後には、少し名の通った企業に就職した。

バリバリと働いていた私には、格好いい彼氏もできた。彼と結婚して、幸せな家庭を築いていく……そう、思っていた。

全てが順風満帆で、思い描いていた通りの人生のはずだった。

しかし現実には、思っていた通りにはいかなかった。

先を見通すことのできない世界的な不況。その所為で、各企業は人員削減を余儀なくされていた。そしてそれは、私の所属していた企業も例外ではなかった。業績の悪化にともなう大幅な人員削減が行われ、私もその対象になってしまった。

リストラを言い渡されて職を失い、彼氏との関係も疎遠になっていった。無職となった私は自信を失い、彼と顔を合わせるのが辛くなったのだ。

そんな状態の二人の恋人関係は、やはり続かなくなって、彼から切り出された別れを私が飲むという形で終了した。

職を失い、彼氏とも別れた。そんな私は、家賃も高い都会に住み続けることなんか、かなわなくなって……父母に促されるがまま、美郷の実家に戻ることになったのだった。

実家に帰ってから暫くは、私は腑抜けたように毎日を過ごしていた。

目標はない。気力も湧かない。親元でただ、自らを浪費するだけ。

窓の外では私の内面を映すかのように、冷たい風が枯れた木の葉を吹き飛ばしていた。そんな冬の日のことだった。

私の様子を見兼ねた母親が、ある提案をした。

「明日は、師走祭りぢや。行くぢやろ？」

「え、師走祭り？」

「美月、好きじゃったけん」

「あ、うん。まあ……」

私は曖昧にうなずいた。

私は師走祭りが確かに好きだった。しかし、その言葉を聞くと、何か、引つ掛かる思い……ある大事なことを思い出せそうで思い出せないような、歯痒い気持ちになった。

師走祭りとは、この地、美郷で語り継がれている『百済王伝説』を基に構成された祭りだ。

それは、その昔……日本では飛鳥時代にあたる頃。朝鮮半島の王国であった百済が、新羅と唐に攻め滅ぼされ、その王族が亡命して宮崎に漂着した。王族であった父親、禎嘉は美郷に、息子の福智は木城町に住んだという。そして亡くなった後に、禎嘉は美郷の神門神社に、福智は木城町の比木神社に祀られた。

そこで、年に一度、比木神社の福智王の御神体が、禎嘉王のいる神門神社まで巡行し、面会するというお祭りなのだ。

祭りの見所は何といっても、初日に行われる『迎え火』。王を護った火と煙の再現だとも言われる、火の饗宴。

田の中に設けられた櫓が燃え盛る様は、怖くもあつたけれど、その非日常感の子供心をときめかせた。

そして福智王の御神体は神門での再会を果たした後、比木へ還ってゆく。『下りまし』と呼ばれる帰還では、遠く比木へ去りゆく一行を見送るのだが、その際に発する「オサラバー」という言葉が、強く印象に残っていた。

『オサラバー』。それは師走祭りの最後に、別れの悲しみを笑って隠す、へぐる塗りの顔が口にし

る言葉。「サラ」は韓国語で「生きていて、また逢おう」という意味だという。

その別れは寂しくもあったが、「オサラバー」を口にした私の胸には清々しさと、溢れんばかりの希望も同時に込み上げた。

私は子供の頃、その言葉を師走祭りの終わりと共に別れることになる『誰か』に放っていた記憶がある。しかし、それが誰だったか……私は何故か、どうしても思い出せない。

幼い頃からずっと、一緒にいるような気がするけれど、一度も会っていないような気もする。そんな誰か。

今、もう一度、師走祭りへ行ったら思い出すことができるだろうか？

そんな気持ちに急ぎ立てられて、私はその翌日から開催される祭りに顔を出すことにした。

美郷の地で再会した師走祭りは、私の記憶と変わらずであった。

比木神社の氏子一行が御神体を担いで出発し、伊佐賀神社で神門神社の一行と合流する。そうして、福智王の御神体は百済の里である美郷に入るのだ。私は子供の頃にしてきたように合流し、祭りの雰囲気を楽しみながら付いて行った。

師走祭りの一行を歓迎するかのように、美郷の地で焚かれる『迎え火』。それは、私を子供の頃へと連れ戻してゆく。

杉槽に灯された焔は、この瞳に映る全てを朱に染めた。

柔らかな夜空を衝かんとするほどに猛々しく燃え盛る炎が、封印されていた私の記憶を徐々に、徐々に呼び醒ます。

それは心の奥底を少しづつ掘り返して抉っていくようで、何だかむず痒かった。そして……

「美月！」

何処か、懐かしさを感じる声に振り返る。

そうだ……どうして、忘れていたのだろうか？

私とそっくり、瓜二つ。まるで、鏡を見ているような、自分の生き写しであるかのような。しかし、着ている服は、精一杯に背伸びしている私とは対象的な、鄙びたジャンパーに色褪せた厚手のズボン。

幼い頃から毎年、この祭りで必ず会っていた。そして二人で、この美郷に語り継がれていた『百済王伝説』の話をして、心躍らせていた……そんな彼女が、そこにいたのだ。

「美星^{みほし}！ 久しぶり……すっごい、久しぶり！」

顔を見た途端に、この胸は感激で溢れて……迎え火の炎に照らされた私達は、思わず強く、抱きしめ合った。

自分と全く同じ顔。それでも不気味さはなくて、寧ろ愛しくて堪らない。まるで、血が繋がっているかのような、全てを分かり合うことができるかのような、不思議な存在。

そんな彼女が、年に一度の祭りの日にだけ出会っていた、美星という少女だったのだ。

「本当に、高三の時以来ぢやなあ。美月、どこにおったんぢや？」

「そっか、最後に会ったのって、高三の師走祭りぢやったけん。その春から大学に進学して以来ずっと、都会に住んぢよってん」

「そっか。そう言えば、美月、都会に住みたい、言っちゃったけん」

昔から、躊躇なく美郷の方言を使っていた美星。精一杯に、田舎臭さに抗っていた私。そんな二人の会話は、ところどころに中途半端な方言を含む話し言葉に中和された。

「美星は今、どうしちよる？」

「私は、相変わらずぢやが。まあ、一つ変わったこと言うたら……今、太一（たいち）と付き合っちよる」

「えっ、うそ！太一って、三田太一？」

「うん」

燃え盛る迎え火に照らされながら、美星はそつと頬を染めてうなずいた。

太一とは、ずっとこの村に住んでいる男子だ。小学生の頃から高校まで、同じ学校に通っていた。ずっと都会に行きたがっていた私は、彼とそんな関係にはなりようがなかったけれど。でも、少し大人しめだけれど、優しくして誠実な彼の顔を思い浮かべると、美星が選ぶのも、うなずけるような気がした。

しかし……私は「あれ？」と、一抹の違和感を覚えた。それは些細なことだけれど、口に出して尋ねずにはいられなかった。

「でも美星。どこで太一と知り合うた？」

「えっ、私？小学生の時から、ずっと一緒におるが。美月ともあいつの話、しちよったぢやろ？」

「え、小学校から？でも、私も小学生の時からあいつと一緒にあったけん、小学校でも、中学校でも、美星には会ったことはなかつちやろ？」

「え……」

美星も目を丸くして、まじまじと私の顔を見詰めた。どうやら、彼女の方もその矛盾に気付いたようだ。

「確かに。どうして……」

幼い頃には、互いに気付いていなかった。

いや、多少の違和感はあったかも知れないけれど、そんなことは祭りの楽しさに比べたら些末なこと、気にも留めていなかった。

そして現に、この『再会』の祭りは細かな違和感など、忘れさせるほどに心躍らせるものだった。「わあ！すごい」

そう……私達はすぐに、そんな些細な矛盾なんて忘れて、祭りの光景に釘付けとなったのだ。

冬の風は冷たさを忘れて、熱く、強く、祭りを観る者に纏い付く。揺らされる炎は不規則なりズ

ムを以って、龍の如くその身を捻らせた。

耳を突いて鼓膜を震わせるのは、バチン、バチンと木の弾ける音。迎え火に照らされながら、神門神社へと向かう一行の足音。そして、彼らを見守る皆の歓声。

それらは年に一度のこの再会を、華々しく鮮やかに彩ってくれた。

「ほら、見いよ。福智王が禎嘉王に、会いに行くけん」

「うん……すつごく、華やかな再会ぢやが」

私達はうっとりとして一行を眺めながら、百済王と王子との再会に想いを馳せた。

そう。私と美星は、昔からこの師走祭りの日には、『百済王伝説』をなぞって二人でその再会に心躍らせていた。生きているかのように天に向かってうねる炎は龍のようで、百済王……そして私達の年に一度の再会を祝福してくれているように感じていた。

一行が神門神社に到着し、お着きの儀が行われる頃には、六時を回っていた。

私達は先刻に覚えた違和感も忘れて、何年ぶりの再会に積もる話に花を咲かせていた。

「美星は、ずっと美郷におると？ 都会に出たい、思わんと？」

「うん！ 私はこん村が好きぢやけん。ここに骨を埋めるつもりぢや」

その会話で、美星は昔から変わらず美郷が大好きで、温かな家族と共に暮らしているのだということが確認できた。

一方の私は……一度は都会で思い描いていた生活をしていただけども、今の時世に飲まれて失敗

して、結局、この地に出戻って来たことを話す。

自分で語っていても情けなくなつて、思わず俯いてしまう。しかし、そんな私の手を美星はぎゅっと握つた。

「でも、美月はそんなことで、諦めんのぢやろ？」

「えっ？」

思わず、美星の顔を見詰め返す。彼女の瞳は、まるで夜空に瞬く星を映しているかのように輝いて見えた。

「じゃって、昔っから美月は、私の憧れぢやったけん。私と同じ顔しちよるけんど、正反対の道を選んで、突き進もうとしちよつた。私、ずっと、応援しちよるけん」

「美星……」

この胸はじんわりと温かくなつて、自分と同じその顔を見詰める。すると、美星は握っていた手を離して、白い歯を見せて笑つた。

ああ、そうだ。美星はずっと……昔から毎年、この祭りで会う度、私のことを応援してくれていた。

まるで、鏡に映つた自分のよう。私と同じ顔をしているけれど、私とは正反対の道を歩もうとしている美星のことを、私もずっとずっと、応援していたのだ。

「ねえ、美星」

私もあなたの幸せを願っているよ。

そう、口にしようとして、振り向いた。

しかし、そこに彼女の姿はなくて……祭りの迎え火は、徐々に消灯されていたのだった。

何年ぶりかの師走祭りの初日に帰宅した私を、母はにっこりと微笑みながら出迎えてくれた。

「どうぢや？ 久しぶりの師走祭りは」

「うん。迎え火とか、すっごく久しぶりで、でも昔から変わらずで。見ていて、わくわくしちよつた」

「そうぢやろ、そうぢやろ」

母は目尻に皺を寄せて、嬉しそうにうなずいた。そんな母に微笑みを返すとともに、私は一つ、尋ねてみたいことがある、続けてこの口を開いた。

「それでね、お母さん。久しぶり……すっごく久しぶりに、昔から知っている子に会ったっちゃ。美屋っていう子ぢやけん、私とそっくりで……本当にそっくりで、鏡を見ちよるみたい。この美郷にずっと、住んでいる子ぢやけん」

お母さんは、会ったことある？

そんな気持ちを含めて、母の顔を見た。

それは、子供の頃、祭りの日に美星と会った後にも聞きたくて……しかし、何故だか触れてはいけないことのように感じて、そつとこの口に蓋をしていたことだった。

すると、皺を寄せていたその目は驚いたように見開き、丸くなった。だがしかし、すぐにその瞳にはじんわりと涙が滲んだ。

「そうか。美星って、言ったと？美月とそつくりのの？」

「えっ、うん……」

その反応が不思議で、私はおずおずとうなずいた。すると母は、徐に立ち上がり、古筆筒の中程の引出しをゆつくり開けて、一冊のアルバムを取り出した。

「美月。見てみい」

「えっ、うん」

私は、そのアルバムを捲った。

それは、産前の母の写真であった。椅子に座り、大きなお腹を抱えて微笑む母。若かりし日の幸せそうな姿に、この顔も思わず綻んだ。

そして……

「えっ、これって……」

アルバムの、とあるページで私の手は止まった。それは、母のお腹の中、胎児だった私を写した、エコー写真。だが、そこに写っていたのは……。

驚いて目を丸くする私の手を、温かな母の手が優しく包み込んだ。

それから母が語ってくれたことは、遙か昔にも聞いた覚えがあるけれど、その日にはより、私の胸の奥に響いた。そして何より、私が毎年、師走祭りに会っていた『あなた』の正体を揶揄するもので、この心はぎゅっと、温かく痛んだのだった。

師走祭りの二日目には、境内で夜神楽の舞が行われる。それは、優美で優雅なものから、ユーモラスに満ちたもの、エロティックなものなど、実に多彩だ。

「いた……」

その舞をうっとり眺めている、私と瓜二つの顔をしている彼女を見つけてほっとした。

前日に母と話して、辿り着いた私なりの結論。美星の正体。

それは、今、目の前にいるはずの美星の存在をぼんやりと、希薄にしてしまうものだった。そう……徐々に薄まって行って、消えてしまうような気がして、不安で堪らなくなった。

だから、その日は私から、精一杯の声を放ってその名を呼んだ。

「美星！」

振り返った顔は、まるで鏡の中の私。だけれども、その瞳は生き生きと輝いていて、眩しかった。

「美月！見よ、見よ。神楽、一緒に」

「うん」

隣に立つと、より実感した。この子、美星は今、確かにここにいて。だから、私の考えていることは……その前の晩、母の話から推察したことは、的外れなことなのかも知れない、とさえ思った。

だって、今。一緒に神楽を見ている。

神楽殿の上、白衣装で面を着けて舞っているそれに……寒さを忘れさせるほどに神秘的な神楽に、私達は夢中になっている。

聞こえる。美星の笑い声。

見える。美星が手を叩き、はしゃいでいる。そんな、無邪気な笑顔が。

感じる。空気を伝った美星の体温を。

だから、もしかしたら……全て、偶然なのじゃないだろうか？

ずっとこの地に住んでいるのに、年に一度、師走祭りの日にしか会えなかったのも、美星が私と全く同じ顔をしているのも……そして、祭りが終わったら完全に、私は美星の存在を忘れてしまうのも。全ては偶然の産物で、美星は本当に私と『同じ世界』で生活しているのではないだろうか？ そんなことを考えて……だけれども、答えは出なくて。だから私は、美星の手をこの手でぎゅっと握った。

「美月？」

美星は驚いたように目を見開いて、こちらを見た。

温かい……私と、全く同じ。そんな体温を感じながら、私は口を開く。

「ねえ、美星。私、お母さんのお腹の中にいた時。双子の妹がいたっちゃ」

そんな話をするのは、唐突かも知れない。

でも、きつと美星なら、その意図を分かってくれる。だから、私は母から聞いた話をこの口で繰り返した。

私と妹とは、ミラーツインと呼ばれる双子だった。瓜二つで、見た目が全く同じになるはずの双子。母は双子の姉に『美月』、妹に『美星』という名前をつけるつもりでいた。

しかし、母のお腹から生まれた時。双子の妹は死産で、元気に出てきたのは、私だけだった。だから、母は私に『美月』という名前をつけて、まるで一人っ子のように可愛がり、育ててくれた。

「でも、美星。私、ずっと思っちゃった。生まれた時に……私が生きちゃって、妹が亡くなった世界で、私は暮らしちよる。じゃけど、反対に、私が死んぢよって、妹が元気に暮らしちよる世界もあるんぢやないかって」

それは、並行空間。所謂、パラレルワールドとも呼ばれる概念だ。

美星にそんなことを語るのは、あまりにも突飛なようにも思ったけれど、反対に、私と彼女との関係は、その概念がなければ説明がつかないような気がした。

すると、美星は見開いていた目をそっと閉じた。そして、再度、開いた目には美しく輝く星を潤ませて……柔らかな笑顔でこくりとうなずいた。

「うん、私も……実は、そうじゃないかって思っちゃった。きっと、美月と私は生きちよる世界が違うんぢやろって」

「えっ……」

「じゃって、おかしいっちゃ。お互いに知っちゃる人もいるのに、私と美月は師走祭りでしか会うことがないって。祭りが終わったら、すっかり忘れちゃうって。じゃから、昨晚、お母さんに、私はお腹の中におった時、『美月』になるはずじゃった姉がいたって聞いて。ああ、そういうことぢやが。きっと、この祭りの日……百済の福智王が禎嘉王と再会する日に、私達の生きちよる世界が交わって、私は美月と再会できる。そういうことなんぢやろって、思っちゃった」

「そう……なんぢや」

私の住んでいる世界では、私は存在するが、美星は存在しない。そして、美星の住んでいる世界では、美星は存在するが、私は存在しない。しかし、百済王の『再会』のお祭りの日、この場所でのみ、二つの世界は交錯して、私達は再会することができる。

それは、俄かには信じられない話だった。だがしかし、この祭りに伴う私達の体験……そして、私と美星は母から、全く同じ話を聞いている。そうした状況が、私達の辿り着いたその仮説をひたすらに肯定していた。

「……ねえ、美月。やっぱり、私達って、血の繋がっちゃる、双子の姉妹なんぢやね」

美星は、繋いでいたこの手をぎゅっと握り返した。そんな彼女に、私はクスツと笑いかける。

「そりゃあね。じゃって、こんなにそっくりぢやけん」

だから、同じで当然なのだ。顔も、性格も、考え方も、行き着く結論も。ただ一つ、『生き方』だけは、私達二人、正反対になってしまったけれど。

全く同じで、正反対。そんな私と美星は、寒空の下、白装束で生き生きと舞ってこの再会を祝福してくれる神楽を、最後までずっと、見詰め続けていた。

美星と共に神楽を見る前までは、私の頭の中はまだ、混乱が抜けきっていなかった。しかし、美星とその日、神楽を見ながらずっと話していて、私なりに頭の整理がついた。

だから、その日は帰宅して、母の顔を見るなり、すぐに気になっていたことを尋ねた。

「お母さんは、美星に会わんでよかと？」

「えっ」

「じゃって、明日。お母さんも行ったら、会えるけん。美星に」

すると、お母さんはまじまじと私を見詰めて、だがすぐに、目を瞑って首を横に振った。

「うちは行かん」

「えっ、どうして？じゃって、会いたいぢやろ？お母さんも」

意外な返事に戸惑う。しかし、お母さんはそんな私に、静かに話した。

「うちが行ったら、きつと会えん。じゃって、美星と繋がっちゃう美月じゃから、会えるけん」

「え、いや。そんなこと……」

そこまで口から出たものの、「そんなことはない」と言い切る自信は、私にはなかった。

何故なら、私と美星とはミラーツイン。二人で一つ……互いに特別な存在だ。だからこそ、百済王が再会する祭りの日に、運命の悪戯が起きているのかも知れない。

口ごもる私に、母は寂しそうにふわりと笑った。

「それにな。明日は大事な大事な、『下りまし』の日ぢやろ。もしも会えんかったら、いかんけん」
「うん……そうぢやね」

「しつかりと、『オサラバー』言うてくるんぢやよ」

そう言っつて、母はその瞳を潤ませた。

母もきつと、どうしても会いたいを決まっている。だけれども、運命は時に気紛れで、それを許してくれないのかも知れない。だからこそ、私に思いの丈の全てを託してくれているのだ。

『オサラバー』

それは師走祭りの最後の言葉。

祭りの一行は、別れの悲しみを笑って隠すために顔を黒く塗り合う「へぐろ塗り」を行う。境内は、互いの顔を見合う人々の笑い声で包まれる。だから一行は、笑顔で別れの言葉「オサラバー」を口にすることができるのだ。

私と美星は、その『下りまし』の儀……笑顔で「オサラバー」と声を掛け合う人達をぼんやりと

見詰めながら、手と手をぎゅつと繋いでいた。

「もう、お別れなんぢゃね」

「うん。あつという間ぢゃ」

私の片割れ。ミラーツインの、双子の妹。

もつともつと、話したいこともあった。一緒に行きたい所もあった。ずっと、私と同じこの体温を感じていたかった。

でも、「オサラバー」の言葉と共に別れると、きつと私はあなたを忘れてしまう。

「じゃがな、『オサラバー』って、『さようなら』って意味だけぢゃねえ。『これからも、お元気で』『また、会いましょう』って意味の方が大きいけん」

美星は片目を瞑り、白い歯を見せて笑う。

自らと同じ顔が見せる無邪気な笑みに、私も思わず笑顔になった。

「そうぢゃね。次に会う時には、美星。太一と子供の一人くらい、つくつちよるよね！」

「なっ……そんなん、まだまだ全然、先の先の話ぢゃが！」

自分と全く同じ顔が真っ赤になって慌てる様はやけにシユールで、私はつい、吹き出してしまう。そんな私に、美星は膨れ面で言い返した。

「んじゃ、美月も。次に会う時は、都会で素敵な彼氏の一人くらい、つくつちよるんぢゃよ！」

「うーん……それは、分からん。まあ、私も頑張るけんど」

腕を組んで渋い顔をする私と美星は、顔を見合わせて……まるで、幼い頃からずっと一緒にいる姉妹のように笑い合った。

師走祭りの一行は「オサラバー」を済ませて、比木神社へ向けて歩を進め始めた。

「それじゃあ……」

「そろそろ、時間ぢゃね」

私達は、少し離れた場所で見合い合う。

その別れは寂しくもあった。だがしかし、それと同時に清々しさと、溢れんばかりの明日への希望が込み上げた。

「オサラバー！」

この美郷にずっと住み、二十年間愛し続けたあなた。

幼い頃から慣れ親しんできたこの言葉を放つことで、私は明日からも、前を向いて歩き続けることができる。

「オサラバー！」

美星も笑顔で別れを告げる。

私と全てが同じだけれども、正反対。そんなあなたはこれからも、希望に満ちたこの郷で、温かな家族を支えながら、溢れんばかりの愛に囲まれて暮らしてゆく。

「これからもずっと、ずっと、よろしくね」

私はそっと呟いて……美星の口も、微かに動く。

この『再会』が終わったら、美星はきつと、私の世界からはいなくなる。そして私もきつと、美星の世界から……。

それでもきつと、いつまでも。私はあなたと、繋がっているんだ。

そう。一年に一度、必ずこの師走祭りで皆に祝福されながら再会する禎嘉王と福智王のように……。

私の目からは、熱い熱い一筋の涙が、頬を伝って流れ落ちた。

佳作

「御田祭」

夢酔藤山



「のしやあせんね、お侍はよう」

明治九年にもなつて、西郷の暮らしは藩政の頃と大きな変わりはないように思えた。ただし年貢が租税という言葉に変わったたり、二本差しがいなくなつたような違いはある。が、暮らし向きの変化は、感じられない。

「で、どうなんね。戦さになるんかい」

西郷村の茂兵衛は、今年も田代神社の田植え祭りで祭事役を仕切ることになっている。この祭りの成否は、村の豊作を左右するだけではない。もつと大きな何かに通じる神事なのだと、代々語り継がれていた。

「もつとおつこねえ（大きな）つて、何やろう」

茂兵衛の隣近所の百姓で、大柄な清十という男は、どこか抜けたことを唐突に口にする。大きな何かなんて、誰が云い出したものか、誰も知らないのだ。

「そんげことは、どんげでんいいっちゃ」

「そうなんか」

「清十は、呑気でいいな」

茂兵衛の懸念はふたつある。西郷村は日向国、いろいろ呼び名が変わつたが、今年の夏には鹿児島に併合されると聞く。鹿児島は戊辰の戦いで幕府を終わらせた薩摩藩の末である。ここ数年、旧土族の反乱が続き、維新の功労者である西郷隆盛が帰郷すると、明治政府の職にあつた大勢がこ

れを追って鹿兒島へ下野した。

世間では、鹿兒島は内乱を用意していると、もっぱらの評判だ。

「お侍んすることは、いつだっておろい。でも、今年ん田植え祭りは、ちゃんとやりてえ」
茂兵衛は、無事にこれを遂げることに賭けていた。

「そーいや」

清十とは対照的に、痩せぎすで知恵のまわる権太という男が、茂兵衛を肘打ちした。

「こん祭りゆ成功させたら、祝言すっちゃろ」

「な」

「みんな、知っちゃるぞ」

茂兵衛は、言葉を失った。

事のはじまりは、どこかの祝いの席でのことだった。茂兵衛の父が、隣村の大農から

「倅を婿に」

と望まれたのだ。倅とは、茂兵衛のことである。

「うちん跡取りは、やれん」

しかし、茂兵衛とその娘は顔見知りで、互いに好いた間柄だ。一緒にさせることに、両家の親とも異存はなかった。ただし、相手は大農の家、婿をとらねば跡取りに困る。男子はいるのだが、まだ子供である。

「うちだって、茂兵衛ん下は小せえ者ばっかりじゃ」

これでは埒が明かぬと、田代神社の神主がこう云った。

「田植え祭りん祭事を茂兵衛が切り回せたなら、西郷村に必要な者や。手放せん。嫁に来て貰うしかねえな」

「しくじったら？」

「それが御神託や、婿に出せばいい」

双方の親が、よし乗ったと、まあ、そういう塩梅だ。

茂兵衛にとつて、伝統と歴史のある田植え祭りなどどうでもよかった。今年だけでも、きちんとしてやることが出来たなら、どうでもいい。嫁に来て貰いたい、ただそれだけのことだった。

田代神社の田植え祭りは、世襲制の家柄が中心になって祭事役（ミヨド・ウナリ・ノボリモチ）を務めることとなっている。鎌倉時代よりも前のことと云われているが、誰が、どうして、本当は何の為か、地に足をつけて暮らす末裔たちは多くを知らない。ただ、続いてきたことにこそ、伝統というものがある。

「侍にはねえ伝統を守ることは、ありがてえことじゃ」

理由はどうでもいい。その想いが、すべてだった。神人・牛馬一体となって整地・田植えを行う神事。こうやって、西郷村の人は生きてきたのだ。

茂兵衛は、催事に必要な牛馬の調達と交渉を、毎日のように重ねていた。村では、茂兵衛の必死の理由を知らぬものがない。

「嫁ん臥所を貸してくんない」

という下品な嫌がらせをする者もいる。

「神事に下卑たこと持ち込むと、天罰で命にいじくるぞ」

権太がじろりと睨む。

「近頃んガキは、冗談も通じんのか」

そう云って、ひとり一人、調達をしていく。そもそも、この調達で牛馬を出すことを拒んでも、村で生きていくうえで好いことはない。意地の悪い者ほど、それをよく知っていた。茂兵衛をただ困らせるだけ、なのだ。

「大人って、わがままぢやな」

気にするなよと、権太は笑った。

「誰だって、催事はやりてえのぢや。嫌がらせなんて、思いもせん」

「茂兵衛って、いい奴やな」

「悪い奴ぢや。自分のために催事を成功させてえ、悪い奴やと思う」

「それでいいこっせん」

「權太も、良い奴や」

「当然さ」

大声で、二人は笑った。

熊本の新開大神宮は格式がある社とされ、室町時代に伊勢神宮を勧請し創建したものとされる。幕末の志士から信奉された。いまは太田黒伴雄という男が神官を務めるが、もともとは攘夷志士で、過激をどこかで好むところがあった。この年の三月に発布された〈大礼服並軍人警察官吏等制服着用の外帯刀禁止の件〉という太政官布告に、太田黒伴雄は強く反発した。

「神社には御神刀があり、納むるために鍛ゆる鍛冶屋と試し斬る技ん者がおる。侍ん心ば太政官は忘れたちゅうんか」

太田黒伴雄は維新の勝ち組だったが、役人にならなかつた。近代化という本質を知らず、ただ旧体制を壊しただけの人間だ。理由さえあれば、いつだって叛く人間である。明治維新とは、そういう壊し屋の始末ができぬまま見切り発車した革命である。

神社の情報網は、当時の近代電信よりも早い。

「神道は明治政府に失望せらり」

そんな言伝が隣の熊本県から流れてくるのは、必然といえた。

「田代神社は御神刀もなけりや鍛冶もなし。士族と無縁ん氏神様じゃ。士族ん誘いには乗っかりめ

えぞ」

神官は毅然とした態度で、太田黒伴雄の誘いを一蹴した。

「肥後がこれじゃあ、薩摩も動くやろうな」

氏子たちが、そわそわとする。茂兵衛の父も、今年ばかりはうまくないと、つい弱気を吐いた。

「馬鹿いうなちや」

茂兵衛が、吠えた。

「そんげことを乗り越えて催事をすつちやろう」

まあ、云うことは分かる。

「催事で泥んこになると、無病息災になる。世ん中ん災いがあるならば、なおんこと催事が必要になるんじゃねえんか」

「だまれ」

神主が制した。

「今年が駄目でも来年はちゃんとする。嫁取りんことで頭が一杯んお前には、わかりめえ」

「そんげもんじゃねえちや」

「なら、なんや」

「色々とみんなにからかわれたけどさ、みんな、まこち催事を楽しみにしちよつちやが。楽しみなんちや。こりや、みんなん祭りなんちや」

茂兵衛の云うことは、ハツとさせられることだった。

そうだ、誰もが楽しみにしていたのだ。士族がなんだ、侍がなんだ、帝を敬うのは百姓だって同じだ。帝を現人神と敬い、祭神もまた敬う。これを辞めたところで、何だというのだ。何もないだけであろう。

「茂兵衛」

神官は頭を下げた。

「お前はしっかりと祭りんことを取りまとめちよる。今もしっかりとだ。ありがとう」

「よせよ、尻ん穴が痒うなる」

一同は、大笑いした。

七月。

熊本も鹿児島も、物騒な噂はあるが、何も動きがあるという話は聞こえない。脇目も振らずに準備をしてよかった。いよいよ、田代神社の田植え祭りを迎えることとなる。

太鼓の音が、朝から村中に響いた。

標高897・7メートルの権現山中腹に、田代神社は祀られる。もとは霧島神社といい、長元五年（1032）の創建という。村の神社は、その里宮ということになる。

この日、主祭神である彦火々出見命の御神霊を上田野神社よりお迎えする。権現山の中腹から上

円野神社までの神霊の御降りをお願い、御輿に乗り移られた神が里へとやってくる。途中、上の宮田に神幸する。田植えの終えたあと、中の宮田に祀つてある年の神に神幸されるのだ。

ドーン。

ドーン。

太鼓の響きが、青空へと消えるようだ。遠くの村にも、この響きが届いていることだろう。

牛馬入れは、裸馬や装飾した牛が神田を駆け回つて、田んぼを代かきするものだ。

「冷てえ」

「目に入った」

歓声と、笑い声と、茶化す野次が幾重にも重なる。

「おい、こつちにも泥を飛ばしてくれちゃ」

「こつちもだ、清十。おい、清十、こつちにも泥を飛ばせて」

神田の泥しぶきを浴びると無病息災が約束されるといわれている。迷信かも知れないが、本当かも知れない。そうやって、この村の祭りは鎌倉時代よりも前から、途切れることなく続いてきたのだ。迷信だの、何だの、野暮というものではないか。

「色男、花嫁は見に来ちよるんかちゃ」

意地の悪い野次が、先頭の牛の背で振舞わされている茂兵衛を追いかける。牛の背で必死の茂兵衛に、返事をする余裕などない。

「うるせえ、じじい。これでも食らえて」

権太の投げた泥が、野次を飛ばした男の顔に直撃した。大笑いが響いた。

村の若い者が、代わるがわる牛馬にまたがり、田んぼを疾走する。

「どんげや、催事をやってのけたぞ！」

茂兵衛は大声で叫んだ。

歓声が、茂兵衛を包んだ。まだまだ、祭りはこれからだ。御輿が田を練り歩く。担ぎ手も泥だらけになって、練り歩くのだ、村の女衆がざんぶと入り、稲を手際よく植えていく。田植えの歌が、女たちの鼻歌のように響く。

「村ん連中、これでみんな泥まみれになったか」

「おう、泥だらけじゃ」

「やったな、無病息災だぞ」

祭りは、成功した。

梅雨の明けきれぬ西郷村を、雨音が包む。泥だらけの服を脱いで、丸裸になった村人が雨で身体を洗う。都合のいい雨は、たいがい、このタイミングで降ることになっていた。神に通じた祭りになったというわけだ。

「茂兵衛もこれで嫁取りだ」

「おう、婿になんか、行かんぞ」

「当り前じゃ。来年も、お前が祭りゆ引つ張れちゃ」

丸裸の茂兵衛を、若者たちが担ぎ上げた。わっせ、わっせ、威勢を挙げた若者たちは、突然、それと茂兵衛を田に放り投げた。泥が大きく跳ね跳んだ。

「ばかたれて！」

群衆は大笑いだった。

空は薄らと明るくなる。もうじき、雨も止むだろう。

夏は瞬く間に過ぎていく。

実りの秋を迎えるころ、花嫁行列が西郷村にやってきた。村中が、この花嫁を祝福する歓喜を發した。云わずと知れた茂兵衛の嫁である。

「約束だしな」

と不貞腐れながらも、隣村の大農は娘が不自由しないよう、多くの品を仕立ててきた。

田代神社の鳥居の前で、茂兵衛は花嫁を待った。この氏神がすべてを取り持ったのである。最初に挨拶をするのは、当然のことであった。

「よう来てくれたな」

茂兵衛の言葉に、綿帽子の奥の瞳を潤ませて、娘が微笑んだ。

田代神社の前には、刈り取られたばかりの稲が稲架の上で風に揺れる。この催事を無事にやって

のけたからこそ、嫁がこの村に来てくれた。

「いっぺえ子を作るぞ。そいつらが、祭りゆ守ってくれっっちゃね。な、いっぺえ生んでくれちゃ」
茂兵衛の声は大きかった。

皆が、茂兵衛をじろりと見た。

「やらしいなあ、茂兵衛」

清十がぼそりと呟いた。

「ああ、やらしいなあ」

権太も呟いた。

「お前ら、嫁もこどももおるくせに、おっこねえお世話や」

みなは、大声で笑った。

秋空は、長閑な村を穏やかな時間で包み込んだ。

その同じころ、熊本県は硝煙のなかに包まれていた。太田黒伴雄の一派が、明治政府に反乱を起したのだ。《神風連の乱》と呼ばれるそれは、生き方を失われた士族が抵抗する一揆だった。

士族の不満は日本中に溢れていた。神風連の鎮圧は、迅速だった。それは、熊本が火薬庫のような存在だったからだ。火がついた火薬は、連鎖で破裂する。《秋月の乱》は、神風連拳兵の三日後に起きたものだ。その直後には《萩の乱》が起きた。萩は、明治維新の軸となった長州藩の本拠地である。

このような内乱が起きていることなど、西郷村の人々が知る由もない。

茂兵衛は、ちらと嫁をみて、眩いた。

「おれ、やらしいかな」

「あい」

「じゃあ、やらしゅうてもいいや」

ぶっと、嫁は嘖き出した。

鹿兒島から延岡にかけて騒々しくなる（西南戦争）が勃発するのは、四ヶ月も先の出来事であった。西郷村も大なり小なりと、戦さに巻き込まれることにはなるが、茂兵衛はお腹の大きい嫁をきちんと守ることが出来たという。この年だけは、さすがに田代神社の田植え祭りを催すことはできなかったが、それでも村は穏やかな刻のなかで無事を過ごせたことだけがなによりだった。

佳作

「百濟王伝説」

宮内露風



第1話 二人の少年

(1)

ピイイイイ

山中に甲高い声が響く

獣道を山頂に向けて上っていた2人組は思わず耳を澄ました。荒竹を削った弓を手に先頭を歩くとひとは、六尺ほどの長身で所々破れ薄汚れた草色の直垂ひたなれに身を包み、泥だらけの縮れた長髪を無造作に荒縄で頭の後ろで束ねている。浅黒く筋骨隆々とした堂々たる体軀だが、ぎょろりと丸い目にどこかあどけなさが残るところを見るとまだ少年のようだ。

小柄なもうひとりの少年は、この国のものではない装束に折れそうな細身を包んでいた。真新しい浅黄のチョゴリ(上衣)とバジ(下衣)に藍色のマゴジャ(上着)を着て、黒い撲巾を頭に巻き、手にする弓は樺を精緻に削り黒漆を塗ったもの、やや青みがかった切れ長の瞳、艶のある黒髪と細面の白顔は高貴な生まれを思わせた。

「あそこの繁みだ！俺が追い込むから王子はそこで待ち伏せて矢を射ろ！」
叫びながら長身の少年は走り出す。

残された少年は、ため息一つ、片膝をついて繁みの方へ矢をつがえた。

「今だ！」

緑の繁みから小さなものが飛び出してきた。

スタン、スタン、スタン

角も生えていない小柄な小鹿が陽光に全身を金色に輝かせながらこちらへまっしぐらに跳んでくる。

「王子っ、射て、射て、射てっ！」

長身の少年の叫びが遠くで聞こえる。

「綺麗だ……」

矢の先端がゆらゆら揺れた。

金色の流星が脇をすり抜けて行った。

弓を引き絞った力は既に緩んでいった。

(2)

「太郎めはどこへ行ったのだ！」

館の廊下をドタドタ踏みしめて歩く益見虫麻呂の機嫌は悪そうだった。家人の彦十翁が、歩きながら差し出される太刀を横からひったくるように受けとる。

「若は神門へと行かれました。」

聞いた虫麻呂のこめかみに血管が浮き出す。

「あやつは十一にもなつて、そろそろ元服させねばならんに、政というものを全く理解しようと思へん。前々から口を酸っぱくして、百済の一族とは距離をとれと言うてきたのに何も分かつたらん。じゃから周りから鈍太郎どんたろうなどと陰口をたたかれるんじゃ。」

彦十は一瞬苦々しい顔をしたが、努めて平静に主人に問うた。

「国司様のお話も、その百済に関するものでしたの？」

大柄な虫麻呂は居室の円座にどかっと太った尻を据えると、腕で差し出された水を一気に流し込み、真つ赤な顔で空になった腕を板間に叩きつけた。

パチパチ

焚き火に差し出された竹串

刺した岩魚が良い匂いをさせている。

横ではごうごうと、滝壺へと止めどなく水が流れ落ちていく。

「ほれ！」

上半身裸の太郎が、良く焼けた魚を座って焚き火を見ていた小さな男の子へ放った。

「ありがとう。」

男の子はそう言うと、竹串を持って湯気上げる魚の腹にかぶりついた。

「あーあ、王子さえしくじらんけりや、今頃旨い鹿肉にありつけていただろうに……」

次の魚を焼きながら、太郎は冗談とも本気とも分からぬ口調でそう言った。

「王子、泳ぎや弓は稽古しとかんといざ戦のときに困るぞ。いずれ半島に帰って新羅から国を取り返すんだろう。」

魚は全て太郎が川に潜り手づかみして獲ったものだ。

王子と呼ばれた男の子は、申し訳なさそうにペコリとひとつ頭を下げた。

「こんなこと私が言ったら父君に怒られそうですか……」

ゆらゆら揺れる炎は二人の目を惹き付ける。

「国を治めたことすらない我々に、国の再建なんて出来るんでしょうか？」

(3)

王子と呼ばれた少年だが、その名は華智王と言う。

百済王家の末裔である禎嘉王の次子であり年齢は九歳、生まれつき身体が弱く、そのため武芸より読書や学問を好み頭脳明晰であった。末裔と言ったが、百済は百年も昔に新羅と唐の連合軍によって滅亡している。華智王と百済朝臣の先祖たちは、新羅の追及を逃れ朝鮮半島南西部の山里に

隠れて民として静かに暮らしながら、百年もの長きに渡って故国再興を夢見て来たのである。

その平穩が破られたのは今年（西暦七百五十六年、天平勝宝八年）の四月のことである。この年の朝鮮半島は昨年から飢饉が続き、それが政情不安を生んでいた。旧百濟領含む南方の新羅においても、北方の旧高句麗領であった唐直轄地においても同様であったが、民は荒れ果てた田畑を捨てて野盜になったり、逃散して周辺の唐や倭国へ向かったり、政府転覆の陰謀を巡らしたりした。

特に旧百濟領においては、飢饉によりかえって新羅の税の取立が厳しくなり、新羅支配への憎しみと反抗の気運は日に日に高まっていった。それを封じ込めるため、新羅の景德王は反乱の旗頭と成り得る百濟王家の一族に討手を放った。五千もの兵に急襲された山間の村が火に包まれ、阿鼻叫喚の地獄と化す中、禎嘉王家族は二百名の家臣と辛うじて逃げ出した。王たちは討手により数を減らしながら山づたいに半島南端の釜山まで逃げて、船を手配し荒れた海を倭国へ向けて二艘の大船で出航した。何とか百濟と縁の深い宋氏の治める老岐を経由し、六月に安芸宮島へ入ったときは、荒海や疲労、病気により王妃や姫たちを含め百名近い犠牲が出ていた。

(4)

安芸宮島へ上陸した禎嘉王は、奈良の孝謙天皇に謁見したいと使者を出したが、新羅を刺激したくない朝廷はこの願いを無視した。返りもしない返事を待ちわびる禎嘉王の元に、老岐の宋氏から

急報が入った。新羅の追手が壹岐にまで来た、その数は千を下らぬという。倭の主要都市では発見されてしまう。禎嘉王は敵の目を眩ますため、四国を回り込んで九州奥地へと向かうことにした。一行は船で安芸から瀬戸内を讃岐、土佐へと回り、海峡を抜けて豊後へ至り、途中初夏の濃霧で長子・福智王の指揮する船とはぐれたりして、禎嘉王以下約五十名はようやく日向金ヶ浜に上陸した。上陸地が良き場所に思えた禎嘉王が神占を行ったところ、この場所から西方七、八里に安住の地があると出た。山道を西へ西へどんどん上っていくと立派な神社があり、これこそ約東の地に違いないと感じた禎嘉王は、日向南郷・神門の地に落ち着くことにした。神門神社の宮司と南郷の豪族・益見氏の協力を得て、屋敷を構えたときに福智王一行の消息がもたらされた。ここより南東の日向蚊口浜に上陸した福智王以下五十名は、比木という地に落ち着き屋敷を構えたという。

日向は土地も人も暖かく、屋敷から新緑に輝く山々を眺めていると、奥地であるここまで追手が来るとは思えなかった。

「酷い旅路であったが、ここからじゃ。まさにこの地から……」
禎嘉王はこの地から一族の運命を切り開くのだと心に誓った。

第2話 追手迫る

(1)

追手を率いるのは新羅の名将・金庾信の子孫で金信英という若き將軍であった。名家の出ではあるが、実戦経験が無く、軽躁な性で功に走りがちであるため、副将として老練な黄泳と武勇拔群の李巾を付けてある。信英は船上から筑紫の野山を眺めながら、ため息と共に言った。

「なんと豊かな土地ぞ、我が手で攻めとりたいものよ。」

黄泳のため息は別の理由だ。

「若君、あそこの丘をご覧ください。それとあそこあそこも……。」

指された丘ごとに、石積みと建造物、遠目にも人影が見えた。

「要所ごとに見事に配置されておる。ここ筑紫は古来より国境警備の要衝、万の軍勢でも攻めとるのは困難でしょう。」

坊っちゃん育ちの信英は、すぐ不機嫌になった。

「言われずとも承知しておるわ！ わしを誰だと思っておる。」

名将の血筋だと言いたいのだろうが、黄泳に言わせれば、血筋で指揮が出来るなら兵学など不要ではないか。

「その岬を北東に回り込めば那の津の浜があります。補給と情報収集、それと馬を買い求めるために立ち寄りましょう。」

この島国は狭いようで広く、確かな情報なしに搜索など出来ようがない。

また、船での長旅のため馬を積んでいないが、搜索における機動力と歩兵のみでは百済王族に逃げられてしまう恐れがあるため、出来るだけ多くの馬が必要だ。

「おお、妓楼で酒でも呑みたいものだ！」

高笑いする信英の後ろで、黄泳は露骨に顔をしかめた。

(2)

那の津で下船した黄泳は、補給の任務を文官に委せ、数名の兵を情報収集へと向かわせると自らは馬を求めに向かった。もちろん、信英に釘を刺すことは忘れない。

「船での長旅に耐えてきた兵たちへの示しというものがありません。決して羽目など外されませんように。」

ヘラヘラ応じる信英の顔に一抹の不安を感じた黄泳は、李巾にそれとなく見張るよう命じた。

黄泳は足を棒にして数件の馬屋を訪ねたが、二百頭程度の馬しか用意出来なかった。

「こんなことなら、無理してでも本国から馬を運ぶんだった。」

重い足を引きずって船へ帰ると、補給は終わり、情報収集へ送った兵たちは既に船に乗り込んでいた。

収集した情報は全て同じで「二ヶ月ほど前に大陸から来たと思われる大船二艘が瀬戸内の方へ海峡を越えていった。」である。

補給を対馬で行ったことは把握している。那の津で補給しなかったのなら、次の補給地は安芸宮島あたりだろう。

「やはり、庇護を求めて平城京へ向かったか……」

朝廷の庇護を得られたら厄介だ。千程度の軍では手出しできなくなる。もはや手遅れかもしれないが、急いで追わねば。慌ただしく出航準備を命じた黄泳は信英がいらないことに気がついた。李巾も見当たらない。辺りを探すと船倉でおおイビキをかいて寝ている李巾を発見した。周辺に酒の臭いが漂い、放り投げられた徳利がいくつも転がっている。

ギリリ……

奥歯を噛み締めた黄泳は、兵に命じて海水を満たした桶を数個持ってこさせ、李巾の顔目掛けてザンブザンブと浴びせ続けた。そして大男がびっくりして目を覚ますや、胸ぐらを掴んでガンガン揺する。

「この阿呆がっ、若君はどこだ！どこへ行った！」

「これこれ、もう呑めんぞ！」

千鳥足で通りを歩く信英の両肩を女が二人で支えている。

「あれっばかりの酒で……、旦那、こっちでいいんですかい。」

右肩を支える妓楼の女主人は、先ほどから胸に手を伸ばす信英の掌をつねりながら歩いている。

「港だ……港へ向かえ！」

軍を指揮するように両手を振り回す信英に辟易した様子で、もう一人の若い女が主人に叫んだ。

「もーっ、面倒くさいっ！太夫、こんなのそこらに放つぽちまいますようよう。」

女主人はため息をついた。

「そうしたいのはやまやまだけどさ、まだお足をいただいてないんだよ。」

若い女は信英の懐を指差した。

「袂に巾着らしいのがあるじゃないですか。代金だけいただいちゃいませうよ。」

そのとき信英が大きくよろけ、はずみに袂の巾着が落ちた。袋の口から金色の粒がこぼれる。

「砂金だ……」

通りがざわめき、人が集まってきた。

「やばいな。おいお軽、さっさと拾いな。」

女主人の指示で若い女が巾着に手を伸ばしかけたとき

「若君っ！」

数名の兵が駆けつけるのと

さっ

破れた着物の泥だらけの子供が巾着をひたたくって走るのは同時だった。

「あたしのお代っ！」

「追え、追え！」

数名の兵が子供を追って走った。

駆けつけた李巾が信英を肩に担ぎ上げた。

「迷惑をかけたようだが、今日のことは忘れてくれい。」

黄泳は巾着を取り出し、女主人の掌に砂金をひとすくい落としした。

(4)

「捕らえたか？」

黄泳が兵の連絡を受けて駆けつけたのは、那珂川河川敷であった。河原には流木を組んで筵を張った粗末な小屋が数十並んでいる。

盗みを働いたのは、そこに住む子供らしかつた。二人の兵に地面に押さえつけられても、齒を剥いて反抗の姿勢を見せている。後ろに平伏しているのは子供の両親だろう。

「將軍、どうされますか？新羅の軍法によれば、盗みは両腕を落とすとなっておりますが……」
周囲、関係ない大人たちまで動揺が走った。

過酷な刑罰に対してではない。

シラギ……しらぎ

恐れと憎しみの籠った囁きが方々から聞こえてきた。

そうか、こやつらは皆……

「お前ら、新羅から逃げ散った民だな！」

黄泳が周囲を睨み付けて叫んだ。

恐怖、それに混じって殺気が伝わってくる。

「よせ、下手なことは考えるな！聞いたことがあるだろう……わしは黄泳じゃ。」

新羅に生まれた者なら知らぬ筈はない。

神弓の黄泳

恐れを振り払うように、誰かが叫んだ。

「我らは新羅の民ではない。百濟、百濟の民だっ！」

ほう、そうかと黄泳は思った。飢饉に重税、新羅を恨んでも無理はない。

「お前たち全員を新羅へ、本来ならそうするところじゃが、話によっては見逃してやっても良い。」
群衆に動揺が走った。

「わしが知りたいのはただ一つ……百済王族の行方よ。お主らならきつと知る者がいよう。教えてくれれば、お主らのことは見なかつたことにしよう。砂金もお前たちのものだ。」
押さえつけられた男の子が叫んだ。

「騙されるな！新羅は嘘つきだ！」

しかし、民の中から押さええようもなく声が上がった。

「これは噂ですが……」

「おらも聞いたことがあります。」

口々に叫ぶその地は……

「ほう……」

黄泳の目がしゅっと細くなった。

第3話 王族として生きる

(1)

ある日の午後、神門神社の禰宜である原田重国は境内にある自室に禎嘉王を招き昼餉を共にしていた。重国と王は年も近く、気質も近いこともあって度々食事を共にし語り合うことが多かった。昼とはいえ秋の陽光は柔らかで、室内にも心地よい風が吹いてくる。その風にのって大きなトンボが一匹、部屋の中に迷い混んで王の器に止まった。重国が手で追おうとすると王がその手を制した。「どうなされた？」

重国が不思議そうに問うた。王はトンボを見つめつつ応じた。

「このトンボは私です。風に流されフワフワと……故国を遠く離れて……」

王の目には涙が滲んでいた。

「後悔なさっておいでか？」

王は指で涙を拭った。

「いえ、感謝の気持ちで一杯です。この地の人々は異国の見ず知らずの我々をこんなにも歓待してくださる。しかも追手に追われ、明日をもしれぬ身であるのに。」

王はトンボを指に止まらせると窓辺へ向かった。

「おもてなしでございますよ。この地では訪ってくれた旅人を歓迎するのが昔からのならわし、それが異国の方であろうと、誰かに追われた方であろうと何ら変わりはございません。」

重国が王の隣に立ちその肩をポンと叩いた。それは微かに震えていた。

「追手を恐れておいでか？」

王が重国を振り返ったとき、トンボが外へ飛び立った。

「恐れておらぬと言うと嘘になります。私は皆様に歓迎され静かに暮らせる今が幸せ、追手によりこれが壊れることを恐れます。」

重国は不思議そうに王を見た。

「百済再興は思われておらぬのですか。」

王は寂しそうに目を伏せた。

「民がそれを望み、我らに希望を抱く以上、王の末裔としては再興を望み続け、行動し続けねばならないでしょうな。しかし、正直言うとそのれが凄く重荷となるとときもあるのです。」

そこまで言って王は顔を上げ、重国をきつと見た。

「神職にお聞きしたい。百済再興なるやならずや？」

重国は困ったように眉を潜めた。

「神ならぬこの身に人の運命は語れませぬ。しかし、強い思いさえあれば、不可能と思えることも為しうる。こう私は信じております。」

王は外に目を移し飛び去ったトンボの軌跡を追った。

「強い思い……そうですか……」

秋の風が頬に気持ち良かった。

(2)

「今だっ、かかれ！」

太郎の合図で横合いの草むらから棒を持った男の子たちが飛び出してきた。

「ひっ……卑怯っ！」

王子の率いる子供たちが叫ぶ。

「戦に卑怯もくそもない！」

太郎はそう言うと言おうと王子目掛けて木刀を振りかぶった。

王子も木刀を構えて応じる。

二、三合打ち合うが、怪力の太郎の打撃に押されてジリジリ下がっていく。

「どうしたっ！王子、ここまでかっ！」

王子は太郎の打ち込みを必死で防ぐ。そのとき……

「取ったっ！我が軍の勝ちだ！」

太郎の後ろで声が上がった。

「しまった！兵の一部を迂回させていたのか……」

慌てる太郎に王子は微笑みかける。

「戦に卑怯もくそもないでしょう。」

一瞬、呆気にとられた顔をした太郎は豪快に笑いだした。

「わはははは……やられた、わしの敗けだ！」

そう言うと、自分の子供たちに武器を収めるように怒鳴った。

どどどどど

白水の滝の水はとめどなく落ちてくる。

方々でたき火が焚かれ、子供たちはめいめい拾ってきた栗や捕った魚を炙っている。

滝壺で汗を流した王子と太郎は、気持ち良さげに河原に座っている。

「どんたろ様、おらたちももうじき本当の戦に出るんだろう！」

太郎と年が近そうな子供たちが言った。

「そうだな、だが安心しろ。そうなたら大将はわしだ！」

子供たちからどつと歓声が上がった。百人力と言われ、この年で熊や猪を素手で倒した太郎の強さは、この地域では神の如く崇められ、怖れられている。一方で欲がなく何もこだわらない性質は子供たちに親しまれて慕われている。

「どうして皆、太郎殿のことをどんたろと呼ぶんですか？」

王子の問いに太郎は首をかしげた。

「どうしてだろうな？……まあいいさ。それより王子、ここに来て三月近く……本当に強くなった

な！」

確かに、真つ白だった肌は浅黒くなり、肉付きも良くなったようだ。ここに来て太郎たちと毎日のように遊ぶことで自然と身体が鍛えられ、食事も美味しいので身体も大きくなったようだ。

「背も少し高くなりました。」

太郎は弟を見るように眼を細めた。そのとき……

「華智王ではないか！」

突然の声に太郎と王子はびっくりした。

(3)

「兄上！」

白馬に跨がり、凜とした風情の貴人がそこにいた。

「おお、しばらく見ぬ間にずいぶん逞しくなったな。」

いつの間にか、太郎が首をかしげながら王子の後ろに立っていた。

「兄上、こちらは豪族益見氏の嫡男・太郎殿です。太郎殿、こちらは我が兄・福智王。」

福智王は下馬し、太郎に恭しく挨拶した。

太郎はぎこちない様子で挨拶を返す。

「兄上は父上の元へ？」

兄は弟に頷いた。

「今からお訪ねする。お前も来るか？」

華智王は頭を横に振った。

「私は太郎殿たちとまだ教練があります。」

福智王は「そうか。」と短く言うのと、さっと馬に跨がった。

「良かったのか、兄上と行かずに？」

太郎の問いに王子は笑った。

「いいのです。ダメな私は優秀な兄といると引け目しか感じない。そう思ってしまう自分も嫌いなのです。」

太郎はしばらく消え行く福智王の背中を見つめていたが、弾けるように笑うところ言った。

「王子、お前もわしのことをどんたると呼んでいいぞ！」

「えっ……でも、何か恥ずかしいですよ。」

「わしを友と呼んだじやろう。友の間で遠慮無用、ほれ呼んでみよ！」

「しかし……」

「しかし何かかきもあるか！さあ……呼べ！」

「……どんたると殿……」

「声が小さい……聞こえん！」

「どんたる殿っ！」

「まだ、まだっ！」

「どんたる殿っ！」

「まだだ！」

際限なく続くやり取りを子供たちは不思議そうに見ていた。

第4話 戦いの始まり

(1)

金ヶ浜から急報がもたらされたのは、禎嘉王親子が久々に揃った三日後のことだった。新羅の船が急襲し王たちが乗ってきた大船が焼かれたという。兵の数は千、まっすぐこちらへ向けて進軍してくるという。

禎嘉王の兵は五十、まともに戦って勝てる相手ではない。禎嘉王は比木の福智王に急使を送ると、益見氏など周辺豪族へ助けを求め、館で家臣らと軍議に入った。そこへ、神門神社禰宜の原田重国が走りこんできた。

「王よ、急いで西へ逃げなされ。山を越えて肥後の地へ、そこまでは敵も追ってくるまい。」

王はそう言われて戸惑った。周辺の豪族の力を借りることが出来れば千〜二千の兵が集まるはずだ。

「誰も手など貸さぬよ。国司からきつく通達されているからな。」

親切な人々だったが政治となると話は別か。

王は己の甘さを後悔した。脱力感と共に、ここまでかと諦めに近い気持ちが沸いてくるのを押さえられなかった。

「我らが誇りのため、せめて一戦して死ぬるか……」

家臣たちも頷いた。故国からの長い逃亡でみんな疲れきっていたのだ。

「お待ちください。この戦、我らだけでも勝てます。」

すくっと立った姿に驚かぬ者はいなかった。

「王子……それはどういうことか？」

(2)

「父上、なぜ兵を出さぬ！」

太郎が虫麻呂に食い下がった。

「国司様の命じゃ、子供は黙っておれ！」

虫麻呂はにべもない。

「誰の命か知らんが、軍勢が向かってくるのは我らの領地ぞ。蹂躪を見て見ぬ振りをするんか！」

太郎の言葉にぐっと詰まったが、子供にはわからんと言いつ捨て虫麻呂はどこかへ出ていった。

「どんたろ様っ、あの王子を見殺しにするんか？」

「いつも弱い者は助けるんだと言ってるでねえか！」

屋敷に入り込んだ手下の悪がきどもが、口々に太郎を攻め立てる。

そうか、みんなあの王子を好いているのだな。

太郎は手下たちの気持ち嬉しかった。

「よーしっ！」

太郎は、駆けつけた二十名の手下たちの顔を、ひとりひとり見て言った。

「命がけだぞ！わかつているのか？」

みんな熱い眼で頷く。

「敵は訓練された千の兵だぞ！怖くないか？」

「怖いもんかっ、わしらは日向一の豪傑どんたろの手下だ！」

「王子を助けよう！」

太郎の両目からとめどなく涙が溢れた。

「よしっ！いくぞ、益見太郎ではない。どんたろとその手下たちの出陣だ！」

うわーっ！

歓声が青空にこだました。

(3)

「黄泳様っ、御大將率いられる騎馬二百が随分先行し、もはや姿が見えません！」

物見の報告に黄泳はギリギリ奥歯を噛んだ。

あれ程、先走らぬよう言つて聞かせたというに。敵は戦の素人、数も多くて百というところ、しかも李巾を付けてあるので万が一ということも無いだろうが……

「とにかく先行の騎馬に追いつくぞ、全力前進！」

その頃、禎嘉王率いる百濟五十の軍は神門東方の山道・伊佐賀の辺りに陣を敷いていた。北は山が直前まで迫り、南はすぐ崖という細い山道、金ヶ崎から上つて来る敵を一望出来る坂の頂点で、道に三重に柵を構えての布陣である。

「なるほど、この道なら敵は横に二人、騎馬なら一頭ずつしか攻め上がつてこれん。数の不利を覆す良策、王子、これは恐れ入りました！」

家臣たちが初めて誉めてくれた。父王も嬉しそうで、絶望が希望へと変わっていくのが感じられ

た。

どんたる殿のおかげ……

この場所とこの戦い方を教えたのは太郎だった。

「し……っ！」

誰かが言った。

前方から微かに馬のいななきのような声

地面に耳を当てると

ど・ど・ど・ど・ど

地鳴りのような音が次第に近づいてくる。

「敵影が見えました！」

前方からの報告で百済軍に緊張が走る。

「百済の旗を立てよ！」

王の号令で藍色に白字で百と染めた旗が掲げられる。

「弓を引き絞れ！」

王と王子を除いた全員が弦を引き絞った。

「敵は柵を構えているようですよ！」

馬上から李巾が叫ぶ。中軍の信英は薄く笑った。

「しゃらくさい、数押しだ。柵なぞぶち破れ！」

馬群に一斉に鞭が入った。

「今だ……放……」

王子が王を手で制した。

「まだです。十分引き付け、先頭が柵の手前一間まで来たとき……今です！」

三名ずつ十六列に並んだ百済軍は一斉に矢を放った。

柵の手前で新羅兵がバタバタ矢に貫かれて倒れていった。

「やった！」

百済軍から歓声上がる。

「次々来ます。構え！」

別人のような王子の下知に家臣たちは驚きつつ従った。

(4)

「敵の屍も柵となる。」

太郎の言葉は本当だった。柵の前で積み重なる敵の死体は、生きている敵の前進を阻み、まごつく敵に面白いように矢が当たった。

「勝てる、勝てるぞ！」

家臣たちは、いや王でさえ熱狂に包まれていた。

「李巾、何とかせよ！」

馬上の信英がイライラして叫ぶ。

李巾はオウと一声吠えると、盾と大マサカリを手に下馬して、徒歩で前進した。

「あの巨人は……それにあのまさかり……」

半島に住む者なら、子供でも大まさかりの李巾の名を知っている。大力無双で冷酷無慈悲な大量殺戮者。

そのまさかりに跳ね飛ばされた首の数は数千とも数万とも言う。家臣たちに動揺が広がった。「矢をつがえよ！」

家臣たちは王子の声で我に返った。矢を引き絞り、柵の向こうの巨人目掛けてちようと放つ。

李巾は空から落ちてくる矢の雨を、盾をかざして事も無げに防ぐと、味方の屍を蹴り飛ばし、まさかりを一閃させて柵を破壊していった。

第5話 誰がための勝利

(1)

王の前に巨大な影

「お前が禎嘉王だな。」

王は静かに頷くと剣を抜き放った。

周囲の家臣たちは、李巾に威圧されて動けない。

巨人はニタニタ笑いながら、マサカリを振りかぶった。

王は覚悟して眼を閉じた。そのとき

「父上っ！」

王子が横から李巾に斬りかかっていった。

予想外に鋭い斬撃に、よけた李巾の頬から一筋の血が流れる。

ペロリ

長い舌で血を舐め取った李巾は、剣を構える王子を憤怒の表情で睨んだ。

「小僧っ！」

左拳をぶんと振ると王子は弾き跳ばされた。

「王子よ！」

王子の方へ駆け寄ろうとする王の前に立ち塞がった李巾は、耳を澄ますような仕草をした。百濟軍の後方から馬蹄の轟きが迫ってくる。

援軍……いや、随分少数だ。

姿はすぐ現れた。裸馬に乗って、平服に剣だけ背負った少年たち

「何だ、汚ねえガキども！」

太郎は李巾を無視して、馬を降りると王子に駆け寄った。

「太郎どの……来て……くれたんですか。」

王子は言葉を振り絞るように言うのと、ゴホッと咳き込み血を吐いた。

「おお手下みんな来たぞ、千人の兵に勝る援軍だ！王子、この戦は勝ったぞ。」

太郎の腕の中で王子はニコリと微笑んだ。

身体の力が抜け、体温が失われていくのがわかった。

「おいしっかりしろ！国を再興するんだろ！このどんたる様が手伝ってやるって！」
揺する太郎の腕の中で王子の身体が力なく揺れた。

(2)

「おいガキ、俺様を無視するんじゃないぞ！」

李巾がマサカリを手に近づいて来た。

涙を拳で拭ぐって立ち上がった太郎の表情は、今まで誰も見たことが無かった。

「お前……お前だけは許さねえ！」

背中の剣を抜き放つ。

「面白い……俺を誰だと思っているんだ！」

太郎が跳んだ。李巾のマサカリが一閃する。

がきっ！

剣とマサカリが激突した。

「うおおおおおおお！」

太郎が吠えると、マサカリにヒビが入っていく。

「な！」

「うおおおおおおお！」

マサカリを砕いた太郎の剣は兎ごと李巾の頭を真っ二つにした。

「なんとっ！」

「あの李巾様がつ！」

返り血を浴びた太郎が吠える。

「次は誰だ！このどんたる様と戦う奴は！」

その氣迫に押され、新羅兵たちはジリジリ後退していった。

「うぬ情けない。李巾がやられたくらい何程のことがあるか！敵は少数じゃ、押せ、押せと言うに……」

信英は采配を振り続けるが、兵たちの士気は下がりきっている。

(3)

うおーっ！

新羅軍の後方で、鬨の声が上がった。

「やっと後続が追いついたか、黄泳の奴め、本国に帰ればその怠慢を軍法会議にかけてくれんな……」

後方に現れたのは藍色の百済の旗、比木から駆けつけた福智王率いる五十の兵だ。新羅軍は前後から挟み打ちとなり、多数の兵が馬ごと谷底に落ちるなど恐慌に陥った。

「やむを得ん。後軍と合流するため一旦退け！」

信英が馬上で声を限りに叫ぶ。

「そうはさせるか！敵を殲滅せよ！」

采配を振りながら軍の先頭に立った禎嘉王に向かい、馬上から新羅兵が矢を放った。

「！」

「父上っ！」

矢は正確に鎧の上から王の左胸を射ぬいた。

王は采配を掲げたまま崩れ落ちる。

福智王が駆け寄ったとき、王は既に事切れていた。

父の死体にすがって泣き叫ぶ兄王子を引き起こし、柵を建て直すよう命じたのは太郎だ。

「敵はまたすぐやってくる。死にたくなければ戦え！」

後続の部隊と合流したとき、先行の騎馬隊は百名ほどに減っていた。黄泳は小さくなっている信英に舌打ちしながら、このままではおめおめ国に帰れぬと軍を前進させた。伊佐賀に至った黄泳はその目を疑う。柵は聞いていたより頑強に張り巡らされ、もはや砦に近い備えが出来ていた。兵の数も五百以上に膨れ上がっているように見えた。これは虫麻呂が手勢を率いて駆けつけたからである。突破出来るかもしれないが、大きな犠牲が出るのは明らかだった。今回は禎嘉王を殺したことで満足すべきかもしれない。黄泳は全軍退却の命令を下した。

(4)

ここ南郷に今年も厳しい冬がやってきた。

禎嘉王は王子と共に神門神社に祀られた。

福智王も戦の傷が因で秋の終わりに死に、比木神社に祀られたと聞いた。

家臣たちは各々、この国の民として生きていくようだ。

あれ以降、新羅の追手が襲いくることもなかった。

白水の滝は、あの日と同じく滔々と流れる。

「どんたる殿……」

たったひとり、座り込んで滝を眺めていた太郎は名を呼ばれたような気がして振り返った。

「ああ、雪か……」

杉木立の緑に白い雪が舞っていた。

王子もどこかでこの雪を見ているだろうか？

「どんたる様、どんたるさまーっ！」

手下たちの声が遠くから近づいて来た。

佳作

「姫さま、家を出る」

松田紙弥



あおい空を、旅鳥が北をめざし飛んでいく。

姫は神門の草屋で、父王と顔をつきあわせていた。

「さて。母さまの喪も明けたことですし、わたしは家を出ようと思います」

エツと声をあげたのは弟君だ。

ムツと睨みつける気配がしたが、父王の手前だろうか、小言は出ない。

「女手がないと不便に思うこともありましようが、そこは華智が妻を迎えるなり、男ふたりで助けあうなり、なんとかされてください。……まあ、わたしがいては、華智も女の子を連れこみにくいでしょうし」

「姉さまがいなくても、そんなことはしませんッ！」

まっかな顔が目には浮かぶようである。

ついで父王のおだやかな声がある。

「那智が言うのなら、それが私たちのためなのだろう。わかったよ」

「わがママを言っでごめんさい」

「いいや、謝るのは私のほうだ。男所帯になるのをいいことに、年ごろの娘に甘えてしまうとは。

お前の嫁ぎ先は、私が責任をもって見つけよう。もちろん、お前が気にいればの話だが——」

「あ。家を出るって、そういう意味じゃないから」

「うん……ん？」

「姉さま、言っている意味がわかりませ——痛ッ！」

弟君の悲鳴に、頓着とんちやくするようすもない。

姫はいつもの調子で、みずからの想いを申し述べた。

「父さまはいつも、私はもう王ではないって仰っているでしょう？だからわたしも、普通の女の子になろうと思うの」

男たちの声は聞こえてこない。

飛胡ひこは軒下の岩に腰かけたまま、巢づくりに励むはげ燕つばめを見た。草屋から、主人の晴れやかな声が響いてくる。

「父さま。那智はひとり立ちいたします！」

翌朝、姫は飛胡ひとりをつれて旅に出た。

海にむかう山道を、飛胡は手綱を引いて歩いていく。馬は、父王から餞別せんべつにと渡されたものだ。その上でゆられる姫は、なぜか不満げである。

「ねえ、飛胡。荷は馬にのせたら？重いでしょう」

「いいえ、まったく」

「私も一緒に歩くわ！」

「こちらのほうが速く進みますので」

「そんな強がり言つて」

強がりではない。飛胡は身の丈六尺を超える大男だった。人より小柄な主人なら、背中の荷の上のせて走ることもだつてできるだろう。

だが、言いかえしても敵う気がないので、飛胡は話をそらすことにした。

「……よかったですか」

「なにか？」

「陛下に身のふり方を頼られてもよかったですのではないかと」

「ええ？嫁ぎ先のこと？いやよ、面倒くさい」

「め、面倒……？」

思わずふりかえつてみれば、主人は頭上にかかる若葉をまぶしそくに眺めている。

「父さまにそのつもりがなくてもね、元王族に過分な期待をかける輩っていうのは必ずいるものよ。せつかく普通の女の子になるっていうのに、そんなしがらみに捕われてなるもんですか」

鼻息も荒く言つてのける。

「ところで飛胡。貴方また、陛下つて言つたでしょ。だめよ、父さまはもう自分のことをただのおじさんだと思つてるんだから」

「いや、それはさすがに」

「娘のわたしがそう感じるんだからそうなのよ。それに貴方つたら、わたしのこともすぐ姫つて呼

ぶじやない。わたしはもう、ただの女の子なの。お願いだから、昔みたいに気安く名前と呼んでちょうだい」

飛胡はしばし黙して進むと、しぶしぶ首を縦にふって、答えた。

「……はい、那智さま」

「さま、もいらない！」

那智の声と、小鳥の羽ばたきが山にこだまする。

飛胡は、那智のただひとりの従者だ。幼いころから、ともに暮らした仲でもある。主人の、こうと決めれば梃子でも動かない性も、嫌というほど身に沁みている。

(……まあ、だからこそ、あの状況から生きのびられたのか)

那智は、置いていかれた子どもだった。

当時の情勢を思えば、その差配を責める気にはなれない。父王は国を取りもどすため、大和の助力を仰ぎ、軍を挙げたのだ。おさない姫君を都の縁者に預けたのも、万が一を思っていることだろう。

そして——戦は敗れ、父王とつれだった王族は行方しれずとなり、国は滅びた。

報せを受けた日、ふたり握りしめあつた手の震えを、飛胡はいまも覚えている。

だが、本当の苦難が訪れたのは、後ろ盾である前の天皇が身罷られたあつた。皇位をめぐる内乱をへて、百済王家の看板はいよいよ埃をかぶり、姫はすっかりタダメシ食いの厄介者となってしまった。

まだ齡よひ、十に足らずのころである。

那智の暮らす離れから、目に見えて人影が減っていく。残されたのは腰の曲がった老婆と、その孫である飛胡のみ。やがて母家から届くはずの米粟こめあわや、薪まきが滞りはじめた。主は父王より託された娘の価値を、ついに見限ったのだ。でなければ姫を、手の届く屋敷から遠ざけるはずがない。

主は、姫の才を知らなかった。気づいたのは、近くで暮らし続けた飛胡と老婆だけだ。

那智には、天賦の占いの才があった。

ついでに度胸と呑気さもあつた。

自分が疎んじられていると察した姫は、みずから屋敷の主と交渉し、都の端の端にある小さなあばら屋を手に入れた。米粟や薪の援助も一切ない。都暮らしとは思えぬ、自給自足の生活。しかし、当の姫君の顔は晴れやかである。

姫はよく、飛胡を都のほうぼうへと走らせた。

あるときは野菊を手し、北の屋敷の裏口へ。またあるときは、たわわに実った庭の橘たちばなを背負い、にぎやかな市のただ中へ。飛胡がいつけどおり赴くと、なぜか決まって市井の面倒ごとを巻きこまれ、最後には謝礼を持たされて帰るのだった。

反対に、釣りに出かけようとする飛胡を、姫が泣き叫んでとめたこともあつた。後日、その谷川で死人が出たと聞いたときには、ゾツと背中が冷えたものだ。

十二になった年、祖母が死んだ。遺骸は飛胡が背負って運び、ふたりだけで見送った。

十四になった年、北の本邸から姫に縁談がきた。主はとうとう姫を厄介払いする気になつたらしい。相手は高麗郡こまの男だ、気が利くだろうと笑つて言った。

姫はこのまま顔も知らぬ男のもとに嫁いでしまうのか。高麗郡とはどこにあるのだろうか。自分は何もつれて行つてもらえるのか……不安がる飛胡をよそに、姫のほうは堂々としたものだった。恩着せがましい貴人を見送り、お腹が減つたと背伸びする。

その晩、常ならぬ姫の聲が、あばら屋に響いた。満月のうつくしい夜だった。名を呼ばれた飛胡が居室にあがると、姫は差しこむ月光に、高々と鏡を掲げている。

——飛胡！帰ってくる！みんなが帰ってくるわ！

——父さまも母さまも、兄さまも！やっぱり死んでないなかつた……！

桃色に染まつた頬を、こぼれた涙がとめどなく流れていく。

飛胡は立ちつくしたまま、それを見ていた。鏡を胸に抱き、姫がふりかえる。

——飛胡、日向へ参りましょう。

否、と答える理由などない。主人が望むのなら、従者は全身全霊をかけ、それを叶えるだけだ。

ふたりは空が白むのも待たず、都を出た。旅立ちを告げる人も、見送る人もいなかった。

(あれからもう五年か)

飛胡はそつと、主人の顔を見た。目元が腫れているのは、見送りに集まつた里人の姿に、泣いてしまつたからだ。オサラバと、今はない国の言葉で送りだす声が、まだ耳に残っている。

神門という里で、主人がおだやかな暮らしを得たことは、飛胡としても喜ばしいことだった。なになぜか……いつからだろうか。飛胡は自分だけ、置いていかれたような心持ちがしていた。

(……何を馬鹿なことを。この方はいまだって、私だけを旅の供にされているというのに)

頭をふり、新緑がおおる道の先を見る。するとまもなく、行く手から水の流れる音が聞こえてきた。木々が途切れ、崖下にもどりの川面が現れる。

「この川をたどって、海に出れば立縫たちぬいです。今日はそこで休みましょう」

道筋は、すでに飛胡の頭に入っていた。比木と行き来のある里人に聞いたものだ。比木には、那智の兄である福智ふくちが妻子とともに住んでいる。年の暮れ、一行が神門を訪れるのが、ここ数年の恒例となっていた。おおよそ二日ばかりの旅程りよていである。

兄さまにもひとり立ちのご挨拶を、というのが主人の願いだ。

「ねえ。明日は海沿いを歩いていくのよね？」

「そうですよ」

「母さまの陵みさまのむすぶには、お参りできる？」

川面を吹き抜けた風が、主人の髪をもてあそぶ。

「もちろん。母君にもご挨拶に参りましょう」

母君のりよの陵墓むすぶは、神門と比木をつなぐ川の、川口近くにあった。

積みあげた葺石を、砂と潮風から守るように、低い木々の群れが包みこんでいる。この林の先には、鳴の遊ぶ砂浜があるはずだ。

那智は陵の入り口に膝をつき、じっと首を垂れている。

飛胡はやや離れたところから、馬とともに主人の背中を見守っていた。嗚咽も、祈りの言葉も、波の音と風にかき消されて、ここには聞こえてこない。ただ、細い背中が時おり、大きく震えて前へと屈みこんだ。

一年。肉親の死を受け入れるのに、この時間ははたして適当なのだろうか、飛胡は思う。

那智と兄君が、神門にて父王との再会を果たした時、すでに母君の体は弱りはじめていた。老い先を、見すえていなかったとは思えない。母君は比木で暮らすことを選んだ。

かわりに娘である那智が、神門へと送られた。

(だからどうだと、言われたことはないが――)

砂の混じる足元を、鳥の影が飛ぶ。見あげる空に、もう姿は見えない。

海を見たい、と言われたという。だから父王と兄君は、ここに陵墓を造られた。

だが、母君が本当に見たいと思われたのは、もっと別の景色ではないのだろうか。

それこそ、この海の、もっと先の――

ひよつと、飛胡の視線が茂みに走った。馬の嘶きと、男の声が耳につく。

飛胡は主人の背中に目をやると、しずかにその場を離れた。ひとり分の足音へ近づいていく。

「よお」

現れたのは、神門の益見太郎だった。

里人や近い者たちは、どん太郎と呼んでいる。

「でさえ足跡があつたかい、来ちよつおもたが。那智さんもおつとやろ？」

男の問いに、さりげなく体を横にずらす。他人が割りこむには、まだはやい。

「……どうして貴方がここに？」

どん太郎の装いは身軽だ。おそらく供と馬はそこらに待たせているのだろう。うかがう飛胡に、男が例の、人好きのする笑顔をむけた。

「なあん。ちよつ近くまち来たかい、墓参りよ」

そう言つて、野の花束を掲げてみせる。

「先生ん奥さんには、世話なつたかいね」

先生とは、父王のことである。神門の顔役である益見は、逃れてきた百済王の一族を保護し、一方では師と仰いで、父王の智慧を享受してきた。いまでは兄君・福智王の盟友でもあり、山間から海沿いの村々にまで名を知られる存在となっている。

これは飛胡の憶測にすぎないが……先日、父王が「嫁ぎ先」と口にしたとき、王の頭に浮かんだのはこの人懐っこい、あから顔ではなかったか。しがらみを気にする主人の懸念ももつともとはいへ、この男ならば、那智の生い立ちになど惑わされないのではないか。

そんなことを考えつつ生返事をしていると、背後から彼を呼ぶ声がした。

「飛胡ー？どこー？」

「ここです！こちらにおります！」

急いで引きかえす。茂みを抜けると、すっかり元の調子の主人がいた。

「もうー。勝手にどっか行ったら心配するじゃない」

「すみません」

頭を下げた飛胡のうしろから、どん太郎がヨツと手をあげる。

「ありや、なんでどん太郎がいるの？」

「なんではねえやろう。せっかく寄っちみたとん。あんたこそ、どしたと？これかい福智んとこね？」

「うん。まあ、そんなところ」

「なんか、齒切れが悪いね」

けらけらと笑う男に対し、主人がちよつとバツが悪そうに唇をとがらせる。

那智はこの男を気に入っているようだった。なにかのおりに聞いたところ、どん太郎の堅苦しくないのが心地いらしい。

「……昨日ね、神門を出てきたの」

飛胡は、どん太郎が驚くだろうと思った。那智は田の神を祀る祭事も手伝っていた。顔役として、

留守の間に出て行かれたとなつては面目も保てまい。

だが、

「そう。まあ、困つたこつがあつたら、いつでん言ひない」

「ありがとう」

「そんげ遠くには行かんとやろ？」

「そのつもりだけど……自分のことだから、よくわからないのよね」

「ああ、前も言ひよつたね」

「……あの……那智さま？」

たまらず飛胡は、談笑する主人に声をかけた。

「なに飛胡。さまはいらなひっていったでしよう」

「そうですね。それより、その、この男はなぜこうも……」

「うん？だつて前から話してたもの。言つてなかつたっけ？」

言つていない。

言つていないし、飛胡が話を聞いたのは一昨日だ。

飛胡の胸が、うしろからドンと突かれたように痛んだ。息を吸うのも忘れて、じつと主人の顔を見た。胸の内をざわざわとしたものが這いあがる。

やっと、声が出た。

「……聞いて、ません」

「そっかあ。まあ今日ここで会えてよかったよ。一応あいさつに行こうかと思つたら、どん太郎い
ないんだもん」

「あなたが、結局黙って出てきたくせして」

生まれも育ちも性別も、なにもかも違ふあたりが声をあげて笑う。

そして男は、連れを待たせているからと、陵墓へ歩いて行つた。携えた野の花が、風にゆれる。
飛胡もまた、主人をうながし馬の背へとせた。砂のついた荷を背負う。手綱を取ろうとしたと
ころで、名を呼ばれた。

「飛胡」

どん太郎が急ぎ足で歩いてくる。照れくさそうな笑みに白い歯が映える。

「肝心なこつ忘れとつた」

耳元で、男が囁いた。

「——ぼやーっちな。世ん中、トンビだらけやが」

バシンと叩かれた背中が、妙に熱い。

「ふーふふー、ふふーふー、ふーふふーふー」

主人の鼻歌が、馬上でご機嫌にゆれている。

飛胡は見晴らしのよい川べりを歩きながら、どん太郎に言われた意味を考えていた。トンビとは鳶とびのことだろう。ぽやーとは、ぼんやりとかいう意味だったと思う。だが、飛胡はぼんやりしているつもりもないし、海沿いでたしかに鳶は見たが、だから何だというのか。

(さっぱりわからん)

頭の中で匙を投げる。

「そろそろ昼にしましょうか」

川を見おろす木の陰に、腰をおろす。ほてった肌をなでる風が心地いい。対岸の田畠たはたを眺めながら、握り飯を頬ばった。飛胡は身の丈の分だけ、よく食べる。反対に那智は、周りの者がそれだけで足りるのかと心配になるほど食が細い。

主人は早々に自分の握り飯を平らげると、やおら立ちあがって裾をまくった。

突如あらわになつたしろい脚に、米粒が噴き出す。

「ちよっと足を冷やしてくる！飛胡はゆっくり食べてて」

小さな足が斜面をくだり、まるい川石の上を走っていく。飛胡もあわてて、あとを追う。が、野うさぎのように駆ける那智には追いつけない。那智は川渕の岩に腰かけると、ひょいと草履をぬいで、しろい足を水面に差しこんだ。

「はあ。気持ちいい」

出足が遅れた飛胡も、ようやく川辺にたどりついた。

「飛胡もどう？ほら、となりに座って」

「……私には、貴方を守る役目がありますから」

「そんなこと言って、恥ずかしかつてるだけじゃない」

細やかな足先が、流れる水をもてあそぶ。

「恥ずかしかつてなど……目のやり場に困るだけで」

「そうなの？気にしなくていいのに」

釘づけになりそうな視線を、何度も対岸へと逃がす。浅瀬で、脚のながい鳥が魚を狙っていた。水面がきらきらときらめく。漁場なのか、さらに二羽の鳥が飛んできて、……

「……そろそろ参りませんか？」

限界だった。

「えー、もう？」

「このままでは日暮れまでに着きません。下手をすれば、そこで寝てもらうことになりますよ」

「いいよ別に」

「ダメです。今の季節、虫も蛇へびも獣も出ます。那智さまもそれは嫌でしょう？」

「うー……」

「わかったら足をあげてください」

聞き分けのない子どものように、主人が顔をしかめる。この主人は、おさないころから蝉せみの抜け

殻すら触れないのだ。やれやれ、と思いつつながら顔をあげると、木陰に置いてきた馬が見えた。最後に水を飲ませたのは、いつだったろうか。馬を引ける砂地を探し、あたりを見まわす。

一步、踏み出したところで、悲鳴があがった。

ふりかえる。ちいさな体が、うずくまっている。

「……飛胡！はやく、はやく抜いてちょうだい！」

目元を潤ませ、主人が左足を差し出す。飛胡は急ぎ駆けよると、そっと手を伸ばし、主人の足を目を凝らした。が、何もない。血も傷も、こまかな棘さえ見当たらない。

(……………いや、)

顔を、寄せる。ちいさな、ふたつの赤い点があった。

「どうしたの？はやく抜いて」

「……那智さま。これは百足むかでです」

主人の顔が青ざめた。

「いやだ！はやくどこかへやって！」

「もういけませんよ。百足が人を嘔むのは逃げるためです。まずは傷を洗いまししょう」

嘔まれた足を、川の水で丹念に洗う。水がかかるたび、那智の口からうめき声が漏れる。

「……昔、祖母に聞いたことがあります。百足の毒は、熱に弱いと」

「温めたほうがいいってこと？」

「そうかもしれません。失礼します」

飛胡は主人を抱きあげると、荷を置いたままの木陰へ場所を移した。燠火おきびを取り出し、川原から拾った枯れ枝で火を起こす。火にあたる主人の顔は、心なしかおだやかだ。

「どうですか？」

「うん……痛みが和らぐような気がする」

熱が、百足の毒を消すのかもしれない。ならば、と、手のひらほどの石を焼き、ぬらした布でくるむ。じゅうと湯気が立つ。乾いた布でさらに厚く包み、噛み跡にくくりつけた。

「熱くはないですか？」

「いいえ。でも……変な感じ。なんだか、すごく寒気がする」

「……今日、比木に着くのは諦めましょう。近くで宿を探します。いいですね？」

目を伏せたまま、那智なつがこくりとうなずく。

飛胡はもつとも近くにあった、山陰の家を訪ねた。

建てつけの悪い戸を押し開けて、髪かみの白い老婆が顔を出す。事情を話し、一晚の宿を求めると、どうぞ中へと招き入れられた。老婆が先ほどまで干していた筵むしろを床に敷く。抱きかかえていた主人を横たわらせた。

「見てんとおり婆さんのひとり住まいやかいね、遠慮せんでゆっくり休めばいいが」

老婆お婆が言った。

「そんなわり、ここにおるうちだけでいいかい、家のことを手伝ってもらえんやろうか。私ひとりやと、手のまわらんことも多くてね」

「わかった。短い間だが世話になる。薪割りでも水汲みでも、遠慮なく使ってほしい」

「そうけ？じゃあ、日が暮れんうちに薪割りでもしてもらおか。ついちぎない」

老婆がうれしそうに外へと出ていく。あとに続こうとした飛胡を、主人が呼びとめた。

「飛胡……ごめんね、わたしのせいで。わたしが、自分の未来も占えたなら、」

「なにを今さら」

那智の占いで救われたことはあっても、すがりたいと思つたことは一度もなかった。

「明日には比木に着きます。いまはしつかり休んでください」

主人を寝かしつけ、戸口を出ると、老婆が待っていた。

「こつちやが」

鈍なたを引きずり、歩いていく。案内された家の裏手には、山のように積まれた丸太があつた。

「あんさんは力がありそうやが、こんくらい朝めし前やろう」

「これを全部ですか？」

思わず呆れたような声が出てしまう。何しろ六尺余りある飛胡が見あげるほどの山なのだ。

飛胡の手に鈍が渡される。

「そうよお。出来んとは言わんやろ」

老婆はなぜか楽しそうだ。薪の置き場所を指図すると、どこかへ行ってしまった。

「一度にこんなに割っては、雨ざらしになるだけだと思いが、……まあいいか。さて、那智さまのために一仕事するでしょう」

丸太のひとつを台にして、飛胡は手際よく薪を割っていく。割っては積み、割っては積み、山のようにあつた丸太は、またたく間に整然と並ぶ薪になった。

「婆さまー。終わりましたぞー。婆さまー」

呼ばわりながら家の前にまわると、急ぎ足で老婆がやってきた。

「なんか！もう終わったとかか！」

「はあ。連れの様子を見に行っても……」

「待て待て。娘はぐっすり寝ちよる。そつより水汲みをせんね。はい来ない」

老婆に腰を押され、今度は家の反対側へ。

「婆に水汲みは骨が折るうわ。こん水甕みずがめを全部いっばいにしちくれんね」

「これを……ですか？」

今度こそ呆れて言葉が出ない。

さし示されたのは、飛胡がすっぽり入れそうな、おおきな甕だった。それがなにに使うのか八つも並んでいる。

「そこん川があつたやろ。あすこかい汲んでできない。さつき見たら連れの娘はよう寝ちよつたわ。

起こさんごつ、静かに運びないよ」

老婆はそう言つて、またどこかへと去つていく。

残された飛胡はため息をつくつと、手近な大甕に手をかけた。よいせと一息に担ぎあげ、先刻の川へと向かう。遠目から見れば、巨大な甕に足が生えて歩いてるように見えるに違いない。

(しかし……あの婆さまは、なぜひとりで、こんなところに暮らしているんだ?)

道すがら、田畠に働く人影はあるが、人家らしきものは見当たらない。

八つの甕は、まもなくいっぱいになった。

「おおい。終わりましたぞー」

「何がかッ！嘘をつくな！」

声をかけると、またも老婆が髪をふり乱してやつてきた。

「あんな大甕が八つもいっぱいになるわけなからう！あんた、この婆さまを騙すつもりやろが！」

「まさか」

「ハッ！すつとぼけてから！どうせそこらの岩でも入れたつちやろ。馬鹿んして！」

もちろん飛胡に騙すつもりはない。ズルもしていない。

だが老婆は、聞く耳を持たない。憎々しげに飛胡を睨みつけ、しろい爪を噛みながら、せわしなく歩きまわる。

「そや！そげな力自慢なら、あすこん山から大猪おおいのししを獲つちきない。猪肉しにくでん食えばあん娘も精がつ

くやろ」

「いまから山に？」

無理だ、と飛胡は思った。日はまだ高いが、山に入るには遅すぎる。なにより、あまり遠くに行っては主人を守ることができない。

老婆の眉が吊りあがる。

「なんか！ 恩人の頼みが聞けんとか！」

そのときだった。

「」

飛胡の大きな手が、老婆に伸びた。あれだけやかましかった口が、急に息をひそめる。

手のひらをかざしたまま、耳を澄ませた。

「……！」

聞きまちがえようがない。

那智の声だった。

「待たんかッ！」

走り出す。おもてにまわり、西日が照らす木戸を、音を立てて払いのけた。

うす暗い部屋に、日が差しこんだ。

「那智ッ！」

部屋には、若い男がいた。驚いた顔が、ふりかえる。筵に膝立ちのまま、奥になった右手はなにをつかんでいるのか。股の間から伸びる足は、誰のものか。

「飛胡」

涙にぬれた顔が、こちらを見た。

「飛胡……たすけて」

気がつくと、男が部屋のすみに倒れていた。なにか、愚にもつかないことをわめいている。飛胡は膝をつくとき、ふるえる主人の肩を抱きしめた。口汚い叫びが部屋に響く。

「目を、耳を閉じていてください」

胸に抱きよせ、立ちあがる。一刻もはやく、ここを立ち去らねば。

「客になにしよつか！はやく下ろさんか！」

しめった部屋に怒声が響く。戸口に老婆がいた。鬼のような形相で、耳が腐るような理屈を並べたてる。自分より何倍もおおきな飛胡に、臆する気配もない。

飛胡の手が伸びた。かわいた白髪がたなびき、骨と皮の体が飛んでいく。

「――邪魔をした。行きましよう」

戸口に置いていた荷を肩がける。胸の中で、主人が身をよじった。青ざめた顔のまま、気づかわずに老婆を見やる。

「飛胡、あの方は」

「氣を失っているだけです。それより先を急ぎましょう。まだ、宿を探すくらいのことではできる」
田畠を耕す人々の里が、近くにあるはずだ。飛胡は馬をつないだ栗の木へと急いだ。日が沈むまでに、おちついた場所で主人を休ませてやりたい。

背後から、老婆の呻き声が聞こえた。

地を這う音が、あとに続く。

——……よう、

那智が、息を呑んだ。

——……よう、こげな婆さんに手えあげたな

異様な気配に、飛胡もまた、つばを呑む。声のほうへ、ふりかえる。

目に入ったのは、足首まで届く白髪。乱れた襟元からのぞく、長く垂れた乳房。なにより耳まで裂けた口元は、もはや人のものとは思えない。

山姥が鉦と包丁をふりかざした。

——待たんかあああッ！

走り出した。婆らしからぬ速さに、飛胡の手が思わず薪に伸びる。投げつけた。山姥が鉦をかまえた。額に当たる直前、薪が二つに割れる。山姥の足はとまらない。飛胡はなおも薪を投げるが、山姥はことごとくそれを割り、あるいは打ち払って近づいてくる。

薪の山が、ぐらりとゆれる。

「これでどうかッ！」

飛胡の足先が、支えとなっていた一本を弾き出した。薪は、なだれをうって山姥に襲いかかる。しわがれた悲鳴が、薪のぶつかりあう音に埋もれていく。

逃げるならば今しかない。つないでいた手綱をほどき、いそぎ那智を馬の背へのせる。

——……誰が帰っていいゆうたか

薪が崩れた。暗い隙間から、一本、二本と腕が伸び、しろい頭が現れる。

耳に沁み入るのは、含むような笑い声。

「飛胡っ！」

那智の指が、飛胡の耳をつかんだ。

「耳を貸しちゃだめ！」

ハッと意識が立ちもどる。逃げなければ。飛胡は肩がけていた荷を山姥に投げつけると、みずからも馬上へと跳びのった。一切の迷いなく馬の腹を蹴りあげる。

だが馬は、棹立ちになるばかりで一向に駆け出そうとしない。

——逃がさんぞ、逃がさんぞ

見れば、ふたりと山姥を取り囲むように、八つの大甕が転がっている。山姥の指先が泥を搔く。いまや馬の蹄はすっかりぬかるみの中だ。抜け出そうと暴れるほど、馬は泥の底へと沈んでいく。もはや頼めるものは自分しかない。

飛胡は覚悟を決めると、ちいさな体をしかと抱きよせた。馬の動きの弱まるのを待ち、荒れ狂う背中から、エイヤと手近な大甕へ跳びうつる。

あとはただ、ふりかえらずに進むのみ。

飛胡は、走り続けた。日が落ち、月が昇り、人ならぬモノの気配が強くなる。足をゆるめるたびに遠く、山姥の声がした。山が近づいてきた。前にもうしろにも灯りは見えない。左手にたどる川面に、月の影が映っている。

那智の熱が、さがる気配はなかった。飛胡の背でまどろみながら、足の痛みをこらえるように息をつく。ときおり飛胡の名を呼ぶのは、百足の夢にうなされてのうわごとか。

「……もうすぐです。もう少しだけ、辛抱してください」

こう声をかけるのも、もう何度目だろう。どれくらいの間時間が過ぎたのか、ここがどこなのか、よくわからない。ただ、足だけを前に運び続ける。

「……飛胡」

「はい。ここにおりますよ」

「……見て。きれいねえ」

「那智さま？」

「あの夜といっしょ……なつかしい」

背中にあたる頬の感触から、那智が左をむいているのがわかる。

空には雲ひとつなく、星さえ翳かすませるようにして、月が浮かんでいた。

「……いつのことですか？」

思わず訊ねていた。

汗ばむ首筋を、無邪気な笑い声がなでた。

「そうね。飛胡は覚えてないかも」

「私も一緒に？」

「あたり前じゃない。……たしか、瀬戸の内海を抜けたあとの——」

夢との間でゆられながら、那智が語り出す。

それはまだ、彼らの顔におさなさが残っていたころ。日向の地をめざした、旅路での一夜。

都を抜け出したふたりは、その足で河内へとむかい、舟を出した。飛胡ひこが權かみをあやつり、那智が

星を読む。波のおだやかな瀬戸内を、小さな島々をたどり進む。

だが、ようやく海のむこうに豊後の山々が見えたとき、空を覆いつくす雲が南西からやってきた。嵐だ。あつという間に強い風が吹きすさび、荒れはじめた波間に潮まじりの雨が降ってくる。

飛胡は必死で、姫と舟にしがみついた。

そうして小舟は導かれるように流され、兄君のいる蚊口浦へと打ちあげられたのだ。

那智の声が途切れた。とうとう眠ってしまったのか。茂る木々の枝葉が、山道に影を落とす。山が身をゆするように騒めいた。無数に重なる音の奥に、つい山姥の気配を探してしまう。

濃い、夜の影を、駆けぬける。

「……………同じだったの」

まどろみながら、那智がつぶやく。ぽつり、ぽつりと、言葉が繰られていく。

「きれいだった。……………目が覚めたら夜で、風も、雲もなくて。まるで……………海と、月と、わたしたち
しかないみたいで……………」

「……………怖くはなかったんですか？」

「どうして？」

背中ごしに、小首をかしげるのがわかる。

「飛胡がいたもの。……………疲れて寝ちゃってたけど。貴方の顔を見てたら……………わたしもいつのまにか
眠っちゃった」

木陰を抜けて、また月の光が落ちてきた。

地上のすべてを照らすように、まるい月がふたりを眺めている。

「ねえ、飛胡……………知ってる？」

飛胡の背中に、かたいものが当たった。那智が肌身はなさず持ち歩いている、あの鏡だ。

「唐国には、必ず二羽で旅をする鳥がいるんですって。……………片目片翼で、一羽では飛べないけれど、
一緒ならどこまででも飛んでいけるの」

「……………」

「わたし、その話を父さまに教えてもらったとき、飛胡とわたしみたいだなんて思った。父さまには、いわなかったけど……」

きつと主人はいま、とろけるように笑っているのだろう。胸にまわる手は徐々に力をなくし、ほどなく安らかな寝息が聞こえてきた。

比翼の鳥の話は、飛胡も知っていた。

雌雄一対でなければ飛べないその鳥は、番つがいである。

飛胡は黙したまま、たどるべき川面の光に目をやると、比木へむけ走り続けた。

佳作

「流浪にうつろう沙羅双樹」

潮楼奈和



暗い海は何かの予兆のように静かだった。

海へと続く能舞台には月明かりだけが降り注いだ。

篝火ひとつない能舞台に、夜着にもかかわらず、仲親は摺足で踏み入れる。幼子の頃から十年は舞い続けたにも関わらず、そんな無作法をしたのは初めてだった。糸が張り詰めたような時間の中、仲親は扇を開いた。

海と神に捧げる神楽を仲親は無心に舞い続けた。

海の音に紛れ、仲親の耳にだけは笙の音色が聞こえた。満ちた海にはあでやかな大鳥居が立っている。この景色も見納めとなるだろう。

今宵が満月で良かった。仲親は生まれ育った海の景色を目に焼き付けた。

足を踏み鳴らす。それは舞なのか怒りなのか、仲親もわからなかった。

壇ノ浦の負け戦がこの島に届いたのはつい夕暮れのことだった。源氏の兵に押された平氏の落人たちの一部が、抛り所のように氏神である巖島に辿り着いた。

その落人のひとりが平行盛たいらのゆきもりだった。三十を超えたばかりの男盛りの武者だったが、壇ノ浦から辿り着いたときには「儂は戻る！」とひと暴れしていた。生きるより、一族の終わりに殉じたいのだと見て取れた。

厳しい顔で落人たちを迎えた葵内侍が、船を譲り、兵たちを逃がすことを即決した。女神の島である厳島では内侍が多くのことを仕切ってきた。この混乱の中で、悩むことなく平氏の救済を決めたことは、己の母ながら、伸親はその潔さに圧倒された。

だが感心している場合ではなかった。手負いの落人たちの代わりに、船を操る者が必要だった。そして、葵内侍はその役に息子である伸親を指名した。

伸親は納得いかない思いを押し込めるように、舞い続けた。

誰かがやらねばならないとはいえ、なぜ、武士でもない自分をわざわざ落ちていく者につけようとするのか。見つければ死があるのみの旅路だというのに。

これが親がする仕打ちだろうか。

伸親に父はいない。葵内侍は伸親を神職として育てた。刀と弓矢を取る代わりに、扇子と面を持ち、伸親は神楽や舞の踊り手として日々を過ごしていた。

そのことに不満はなかった。むしろ自分には武術は向いているとは思えなかったし、舞や神楽は生涯自分が必要とするものだと感じていた。そう信じていたものが、一夜にして消え去った。

夜が白み始めた。

霞の向こうには本土が見える。

藍から青へと色を変えていく海は、多くの矢や船の残骸を打ち上げた。

戦場から離れたこの島にまで滅びの匂いが流れ着いていた。

「……穢れだ」

伸親は眉をひそめた。

敵島の神は死を嫌う。流れてくる戦の匂いは穢れそのものだ。

神の舞手としての自分はここで終わるのだと、潮と血の匂いの中で、伸親は受け止めるしかなかった。

伸親は扇子を閉じ、舞台へと一礼した。

*

たわんたわんと、船が揺れながら、波と木がぶつかる音を立てていた。

船には行盛とその部下の武士たちが五人ほど乗っていた。

伸親は船尾に立ち、帆を高く掲げた。

凧の時間が過ぎ、帆が風を受ける。

船着き場から名残惜しむように、大鳥居の前を通り抜けると、能舞台に人影が見えた。

葵内侍だった。

取り乱すわけでもなく、ただ船の姿を目で追っていた。海風に小袖がたなびく。

仲親は舵を切る。

大鳥居は小さくなり、やがて視界から消えていった。

島を出て一刻も経つたらうか。

行盛がぼんやりと海を見ていた。

「どこに向かう気だ」

「南へ。日向あたりならばまだ源氏もいないでしょう」

仲親はそっけなかった。いくら平氏の氏神とはいえ、武士や貴族たちの権力争いに巻き込まれるのは理不尽でしかない。

彼らが争わなければ、仲親は島を出ることもなく、今も女神に仕え、舞っていた。仲親にとって日常を叩き壊したのは源氏も行盛も同じだった。

「私もあなた方が禁足地にまで逃げて来なければ私が島を出ることもありませんでしたがね」
つい言葉に棘が交じる。

行盛は一瞬呆けた顔をしたが、みるみるうちに赤く染まり激昂した。

「お主、よくもそんなことが言えるな。お主こそ！」

行盛は仲親を跳ね除け、飛びかかろうとするが、近くにいた侍が行盛を羽交い締めにした。

「行盛殿！」

行盛は冷静さを取り戻し、振り上げた拳を下ろす。

「……私が、なんだと言うんですか」

「いや……」

行盛は言葉を濁す。

どうもおかしい。

行盛の口ぶりでは、まるで仲親が島にはならないとでもいうようだった。

黙ってしまった行盛から、なおも続きを聞き出そうと、仲親は身を乗り出した。

が、その頬を矢がかすめる。

気づいたのは行盛が早かった。

手負いとは思えぬ素早さで仲親の頭を押さえて下げると仲親に筵をかぶせた。仲親は筵をわずかに持ち上げて見つからぬように海を伺うと、遠くに小さな船の影が見えた。

源氏の追手だろうか。

だが旗印がない。

「……海賊か」

行盛が忌々しげに舌打ちした。

相手は小さい船だが、長引けば同じような船が集まって来るだろう。戦に長けてはいないならず者も集まれば脅威になる。

行盛は仲親の前に立った。

「船足を速められるか」

「帆を操れば」

仲親はそう答えたが、帆を操るには船に立たねばならない。先程の矢がかすめる風を思い出し、仲親は身震いした。

「矢は儂が防ぐ。お主は船の操舵だけ気にすればいい」

行盛は仲親の返事を待たず、刀を構え、後ろ手で行けと合図した。

うんざりだった。

なぜ自分がこんな目に合わねばならないのか、何度考えても納得がいかなかった。だがどんな不満があろうとも、相手が聞いてくれるわけもない。船足を速めても、相手は操舵術に長けた海賊だ。

追いつかれないとも限らない。

仲親は舌打ちをして、帆柱へと走った。きつく帆を張り直し、舵を取りりに向かう。海賊の矢が風を掴んで固く膨らんだ帆に刺さった。

——頼む。吹いてくれ。

祈るように仲親は船を風に合わせた。

揺れる船の上で、行盛は降ってくる矢を薙ぎ払う。動くほどに戦の古傷から血が滲み、船板には赤い染みが広がっていった。

海賊船が近づいてくる。

——頼む。頼む！

仲親はそうひたすらに念じ、舵を握って機を見計らっていた。船はすぐそばまで近づいてきた。

行盛は納刀し、弓を構える。キリキリと弓を引くと、舳先に見えた人影に向かって一息に矢を放った。

叫び声と一緒に、水に人が落ちる音がした。

追ってくる船から聞こえる声は呐喊から怒号へと変わっていく。

風が吹いた。

仲親は大きく船を旋回させる。

船は揺れたが、同時に飛び移ろうとしていた海賊たちが足場を失い、海へと落ちた。船にしがみつこうとした海賊もいたが、行盛が矢を掴んで縋る手に突き刺すと、耐えられず手を離し、船から離れていった。

仲親はその光景からひたすら目を逸らし、船を走らせることに集中した。掴んだ風は海を滑らせた。

海賊船は走るのをやめ、海に落ちた海賊たちを海から拾い上げ始めた。

仲親たちの船はひたすら南へと速度を上げた。

海賊船の姿が霞んでいき、見えなくなると、仲親は腰が抜けたように座り込んだ。

*

日向の浜に辿り着いたのは、丸二日経った朝だった。

伸親も瀬戸内を出た外海にはそう詳しくはない。これ以上進むには少し躊躇していた。

「日向には当てでもあるのか」

行盛は陸に上がると甲冑を外した。重い甲冑を脱ぎ、少し解放されたのだろう。砂にまみれることも厭わず、大の字になって寝そべっている。

「揺れぬというのは有り難いのう」

本音をこぼす行盛に、伸親は思わず笑みをこぼす。が、咳払いをして真面目な顔になる。

「船を岩場の影に。人に見つかると厄介ですから」

あまり人目につくわけにはいかなかった。源氏の追手が手を回していないとも限らない。

僅かな積荷を下ろしていると、近くの村の人間なのか、引き締まった体躯の大きな男が近づいてきた。年の頃は四十くらいだろうか。農民のような姿をしていたが、どこか隙きがない。伸親たちは身構えた。

「お主らは何者ぞ」

男は伸親たちを見定めているようだった。

「海に流されて辿りついたのです」

今にも刀を抜きそうな行盛を抑え、伸親はとっさに嘘をついた。

「すぐに戻る術もありませんゆえ、少し身を寄せられるところをご存知ありませんか」

行盛が小声で伸親の耳を打つ。

「何を考えておる」

「あなた方がどこの者か知られたらどうなるかおわかりですか」

低く小さく、だが鋭い伸親の声に行盛は黙り込んだ。

「武士か」

行盛が刀に手をかけた。

男は意に介さず、少し思案する。

「農らの村に来るか。ここから山の方へ半日ほどかかるが」

伸親は行盛と顔を見合わせた。

どこの誰ともわからない武士たちを、いとも簡単に自分たちの土地へと招き入れるという。必ずしも味方とは限らない武士を招くことは、危険でもあるはずだった。

自分たちが助けを求めたとはいえ、男の誘いはあまりに軽率で、何か思惑があるのかとすら感じた。

男はそんな疑念に気づいたようで、豪快に笑い出した。

「なに、気に召さるな。我々も元はこの地に流れ着いただけの者だ。……懐かしゅうてな」
やはりおかしい。流れ着いただけなら、そんな山深く入って暮らすことなどあるだろうか。

「土地に呼ばれたのだ」

不思議な言い回しだった。男の声色には敬虔なものを語るような深みがあった。信用に足るわけではないが、なぜか男の言葉は腑に落ちる。伸親が答えあぐねているうちに、行盛が頭を下げた。

「かたじけないが、お主のご厚情、賜らん」

侍たちが行盛に倣うのを見て、慌てて伸親も頭を下げた。

*

伸親は気が気ではなかった。

男の背を追いながら、山に向かって数刻が経っていた。

そう、伸親はまだどこかで帰る心づもりが残っていた。終わったのは平氏の世で、この国ではな

い。一介の民が源氏から逃げ回る道理などないのだ。いくら島を支えた存在とはいえ、自分の暮らしを捨ててまで、この都落ちに付き合う義理はないはずだった。

無事に日向に送り届ける。それだけで良いのではないだろうか。そんな考えが仲親の中に湧き上がる。敗戦の将を運ぶのだ。戻れぬことも覚悟はしていた。だが、安住の地に辿り着いた後は、共にほとんど顔を合わせたこともない武士たちと生きていく必要があるだろうか。

最後に見た葵内侍は静かに仲親を見ていた。別れの言葉も何一つない。取り乱すこともない。あれは今生の別れではなかったからではないだろうか。

戻れるなら、戻りたかった。行盛たちが根を下ろす場所を見つけた後には、もう船も不要なはずだった。

男は仲親の思いなど気づきもせず、ずんずんと足を進めていた。横を見ると行盛も遅れることなく歩いていった。行盛の配下の侍たちもまた、迷いなどないようだった。

仲親にはそれがとても奇妙に思えた。武士という生き物は、そう簡単に生き方を変えられるものなのだろうか。

都で栄華を極めたという者たちが、沙羅双樹の花のようにいとも簡単に落ち、こうして流れてい

く。これからは過酷な暮らしとなるのは想像に難くない。それでも一度決めてしまえば、その困難は目に見えぬかのように向き合っていく。

「……あとどれくらいかかりますか」

伸親は男に声をかけた。時は半日をとうに過ぎていた。

「もう少しだ。少し休むか」

「助かる。この者は神職ゆえ、我らと違い鍛えてはおらぬ」

伸親が返事をする前に、行盛が男に答えた。自分たちのことではなく、伸親を気遣ったその言葉で、伸親はますます自分が同行する価値を見いだせなくなった。

男は伸親たちをすぐ近くにあつたお堂に案内した。人の気配はない古びたお堂の裏手には小川が流れて、せせらぎが聞こえた。

行盛の部下の武士たちは思い思いに腰を下ろして休んでいる。

行盛は小川に降りると瓢箪に水を汲み、伸親の足にかけた。

「何をする！」

伸親は足を引くが、見れば血豆ができている。

「慣れんのだろう。冷やせば少しはましになる」

手から逃げた仲親の足を行盛は掴んで、もう一度水をかけた。

仲親も今度はおとなしくなすがままになる。

「……船が気になるか」

「それは……。貴重な移動の術です。当然でしょう？」

自分がひとり帰ろうとしていることを見透かされたようで、仲親は誤魔化した。

「我らにはやがて必要はなくなるだろう」

「あの男の村で受け入れられるとも限らないでしょう。後で私は船に戻ります。いざ出るときに備えねば」

仲親は早口にまくし立てた。行盛は手ぬぐいで仲親の足を拭きながら黙って聞いていた。

「何か、おかしいことでもありますか」

行盛は諦めたように息を吐いた。

「お主は戻れぬ」

「何故ですか」

仲親は齒噛みした。自分はただ巻き込まれただけだ。今となつては平氏が厳島を氏神としていたことさえ腹立たしい。

「葵内侍に託されたゆえな。お主を連れて逃してほしいと」

耳を疑った。

伸親は行盛の顔を見つめた。行盛は伸親に草鞋を履かせると手ぬぐいを当てて手持ちの紐で縛った。

「少しは楽になるだろう」

それ以上何も触れようとせずに立ち上がった行盛の腕を、伸親が掴んだ。

「なぜ、私が戻れないんですか。私はただの神職、奉幣使だ。あなた方武士とは違う！」

行盛は迷っているようだったが、伸親の様子に、口を開いた。

「……お主は、僕の叔父だ」

行盛の言葉に、伸親は凍りついた。

「……待ってくれ。では……私の父は……」

「……入道殿だ」

行盛は声をひそめたが、はっきりとそう口にした。

風が木々を震わせた。

行盛は何を言っているのだろう。

伸親は言葉の意味を理解できなかった。いや、理解したくないだけだと、どこかで伸親自身、わ

かっていた。

自分が清盛の子だと、その意味を飲み込むまでにはいくらか時間がかかった。

そして飲み込んだ後には、これまでの疑問がすべて、明るく目の前に差し出された気がした。

なぜ、自分が船を出すことになったのか。

なぜ、鳥を出ねばならなかったのか。

自分すら知らなかった自分の血筋が誰からともなく伝わり、敵に討たれるかもしれない。葵内侍はそれを怖れたのだと、行盛が伝えるまでもなく、伸親は察した。

行盛たちのためではない。

葵内侍は、伸親、自分の息子のために船を出したのだ。

筋は通る。

だが到底受け入れられるものではなかった。

「……ご冗談を。ならばなぜ私は武士としてではなく、神職となるべく育てられたのですか」
笑い飛ばそうとする伸親の声は震えた。

行盛は年下の叔父である伸親を、まるで弟に接するように宥めた。

「葵内侍がそう望んだのだ」

「母上が……?」

「ああ。船を出し、儂らを逃がすから、お主を守って欲しいと。……たいした方だ」

能舞台の上で、見送った葵内侍は、伸親の船が大鳥居を通り過ぎた一瞬、かすかに手を上げかけた。

今生の別れではない。葵内侍自身がそう思いたくなかったのだ。

伸親の中で、現実がゆっくりと形作っていた。そして同時にひとつの疑問が湧き上がる。

「清盛殿と通じたことが事実なら、母上はどうなる!」

平氏が流れ着いたなら、やがて源氏も追ってくるだろう。厳島の内侍で清盛と通じた者はひとりではない。中には請われ妻となった者もいる。源氏には平氏の血縁を生かしておく理由などなかった。

「……戻ります」

立ち上がる伸親を行盛は肩を掴んで止めた。

「聞いていたか? お主が戻るわけには」

「母を見捨てよと? まだ私は何も聞いていない。母からは何も!」

言葉が次々にこぼれた。

仲親の声に驚き、山鳩が羽ばたき逃げ出していった。

仲親は自分が恨めしかった。

何も知らず、不満を抱え、のうのうと逃されたことにすら気づかず、まだ戻れるなどと甘い幼子のような浅はかさと愚かさに反吐が出そうだった。

「きつとご無事だ。神に仕える内侍を討つなど、源氏と言えどそうそうあるまい」

行盛はそう口にしたが、それは自分に言い聞かせているかのようだった。

「そろそろよいか。日が暮れる」

村の男はそう言って、小さな欠伸をした。

少しは耳に届いているだろうに、男は何も問おうとはしなかった。

「……すまぬ」

行盛は短く答えると、仲親を促す。

仲親は無言のまま、男の後を歩き始めた。

「……故郷を出るのは辛かろう。ましてそれが己が意思でないなら」

男の旁りが今の伸親には鬱陶しかった。

「知ったような口を利くんですなね」

「言つたろう。儂も流れ着いた者だ」と

そう言つて男は豪快に笑つて見せた。

妙な男だった。

流れ者が辿り着いたなら、なおのこと、土地を奪われる不安もあれば、追つ手に見つかる恐怖もあるだろう。にも関わらず、警戒というものがまるで見えない。

「どこから流れついたんですか」

「己が聞かれたくないことを、儂に聞くかね」

伸親の不躰な問いに、男はそう鼻で笑つた。

「もうすぐだ。神門が見える」

「ミカド？」

男が指した先に門が見え、木々が抜けた。その先の眼下には田畑が広がっている。

鬱蒼とした山の中に突然現れた平地に伸親たちは目を見張つた。

時はもう夕刻だった。朱に染まる村の姿は幻のようで、これまでの道のりを忘れさせた。

「この先に神社がある。そこで休めばいい」

男は慣れた足で坂を下り始めた。

*

辿り着いたのは、杜の中にある質素な神社だった。大きくはないが、よく手入れされ、風が澄んでいた。

伸親は重苦しい感情を洗い流すように、深く息を吸い込んだ。

男は人を呼ぶと言い残し、奥へと入っていった。

入れ替わりのように現れたのは白髪交じりの好々爺だった。

「流れ人とは、あなた方のことですか」

低い落ち着いた声だった。

「この神社の神主殿ですか」

「はい。お疲れでしょう。たいしたものはありませんが、まずは食事はいかがです」

伸親は食べる気にはなれなかったが、それでも容赦なく腹は鳴る。よい音に神主は微笑んで、伸親たちを奥の部屋へと案内した。

行盛は、通された部屋から庭先を見ていた。

松の奥には竹が生えており、風が吹く度にぶつかり合っては澄んだ音を響かせていた。

「……よい場所だな。静かでよい」

「行盛殿はここで畑でも耕すおつもりですか」

「それも悪くない」

半分嫌味のつもりで言った伸親だったが、行盛には通じていなかった。

「ここには海がない」

伸親はぼつりと呟いた。産まれてこのかた、海から離れたことがなかった。ここに根を下ろすと言われたら従うしかないが、伸親には海のない暮らしというものが想像できなかった。

神主が食事の膳を運んできた。

ほうじ茶の香りがする粥と山菜という質素な食事だったが、伸親も行盛もありがたくいただいた。温かい食事をしたのは、実に三日ぶりだった。

よほど飢えていたのか行盛の部下たちの中には、四度ほどおかわりをする者もおり、神主を苦笑させた。

食事が終わる頃に、案内をした男が戻ってきた。神主は杯を男に渡すと、酌をした。

風体や態度から、この土地の長なのだろう。男は伸親の予想通りの振る舞いで、豪快に杯の酒を

飲み干した。

「しばらく、ここでゆっくりするといひ。今後のことはおいおい決めてゆけばよい」

「感謝いたします」

「何、礼には及ばん。……そうだな、あまり借りばかり作るも居心地が悪いか」

男はにやりと笑った。

「神職と言うておったな。舞えるか？」

男は唐突に伸親を指した。

「神楽でしたら少々……」

戸惑いながら伸親は答えた。神楽はただ舞い踊るわけではない。その土地や神にまつわるものだ。自分の舞を披露するということは、巖島の者だと明かすようなものだった。

「明日、奉納してもらえるか。見てみたい」

「ですが、笛も太鼓もありませぬし」

「箏ひちりきならあるぞ」

頼みを躲そうとする伸親の思惑をよそに行盛が懐から小さな笛を出した。

——余計なことをする。

伸親は小さく舌打ちした。

「明朝、先程通ってきた南郷神門で、ひとつ踊ってくれ。神も喜ぶ」
男はそう言つて、酒を手酌すると顔色ひとつ変えずに飲み干した。

伸親は自分が舞える踊りの数々を思い浮かべ、その中のひとつに遠い昔、海を渡り伝わった舞があることを思い出した。その演目であれば、自分たちの出がわかるとも限らない。

ここまでもてなされたのだ。

男や神主を信用しないわけではないが、それでも用心はしておきたかった。

「……では僭越ながら。明朝にこの土地へ舞を奉納させていただきます」
別に断つたとしても、責め立てられるようなことはないだろう。

それでも尽くせる礼があるなら、尽くしたかった。自分が踊ることが少しでも行盛らの役に立つなら、自分の中で燻る卑屈さも少しは炎を抑えてくれるような気がした。

夜も更けていくと、神主は部屋に布団を用意した。

行盛らが眠る横で、伸親は小さな明かりを灯し、借りた筆と墨で紙に文様を描いた。

もう神のために踊ることはないかもしれない。その覚悟で出立の夜に海で舞ったことを思い出し、また舞うことになった偶然に伸親は不思議な縁を感じた。

描き終わると伸親は明かりを消した。障子が青い月明かりで浮かび上がる。

そと引き、外を見ると舞った夜より少し欠けた月が浮かんでいた。

*

朝の神門は夕暮れとはまた違う。神主と男が見守る中、伸親と行盛は南郷神門の前に立ち、眼下を見下ろした。

村を一望できていたはずの神門からの眺めは、霞に覆われて、畑も人の家もまるで見えない。

「これは……雲海か」

行盛は感嘆の声を上げた。

「なかなか良き景色であろう？」

男は嬉しそうに目を細めた。

伸親は言葉もなかった。

目の前の雲海に飲み込まれた村の姿は、懐かしい景色を思い出せた。

巖島の弥山の山から瀬戸の海を眺め、遠く伊予の国まで見渡す。霞の中に小さな島々が浮かぶその光景に良く似ていた。

流れ流れた先にも、故郷の面影を持つものがある。伸親は救われた気がした。

舞を奉納しろと言った男も、半分は礼より何より、この美しい景色を披露したかっただけなのだろう。

こみ上げるものを飲み込み、顔を隠すように文様を描いた紙をつけた。

ここは神門であり、瀬戸の海だ。

伸親は足をそっと一歩踏み込んだ。

行盛が合わせるように箏篳を吹き始める。

笛ひとつだけの音色に合わせ、伸親は舞い始めた。

「ほう」

男は感心したように声を上げたが、みるみるうちに顔が陰しくなっていく。

伸親は顔を覆った紙の隙間から、男が強い視線を向けていることに気がついたが、構わず舞い続

けた。

選んだのは百済の舞だった。

古き世に、百済から巖島へと流れてきた酒造りの民の舞。

雲海をやわらかな朝日が照らしている。

仲親は今は消えてしまった百済の国へと思いを馳せる。

流れて異国の地に根を下ろし、国が滅びても、人は滅びぬのだ。

そう。人が紡いできたものは心が継ぎ、滅びることはないのだろう。

舞い終わると、仲親は男に一札をし、面代わりの紙を外す。

男は厳しい顔をしていたが、その意味を読み取ることはできなかった。

「お気に召されませんでしたか」

重い沈黙の後、男は口を開いた。

「お主、この舞をどこで」

「百済の蘇利古スリコです。古き世に、我らの土地に辿り着いた百済の民が伝えたのだと言われている
す」

「残っていたのか。未だ」

男は目を細めた。

「……我が故郷の舞を久々に見た。もう見ることは叶わぬと思うていたが……」

男の声がかすかに震えているようだった。

「故郷、ですか？」

妙なことを言う。

伸親は首をかしげた。百済国くだらのくにはもう随分昔に滅んでしまっていた。

「良いものを見た。人の営みとは、国がどうあれ、続いていくのだな。お主の一族に感謝する」

「それは、どういう……」

伸親が問いかけるまもなく、男の体が白く輝き、霞のように消えた。

後には溶けたような朝日だけが差している。

行盛は思わず筆筭を落とした。

神主は落ちた筆筭を拾い、行盛に手渡した。

「……この土地は百済の里なのですよ。あの方がなぜ見えるのかと思うておりましたが。……縁ある方だったのですね」

「あれは一体、なんなのですか」

伸親の問いに神主は微笑んだ。

「百済の禎嘉王^{ていかおう}。かつてはこの地に流れ着き、今は我々が祀っております」

荒唐無稽な話だった。

亡国の王が時を越えて姿を現すなど、この世の理ではあり得ない。

だが目の当たりにしたあの光に包まれた男を見れば、事実と受け入れざるを得なかった。

神主は神社に戻る道すがら、権力争いの果てに流れてきた禎嘉王の物語を語った。

百済より流れ、巖島にも立ち寄った禎嘉王が新天地を求めて日向に辿り着く話は、まるで今の自分たちのようで、伸親は他人事のように思えなかった。

「ここに落ち着かれますか？禎嘉王が招いた方です。村の者も反対しますまい」

神主の言葉に、伸親は首を小さく横に振った。伸親が行盛を見ると、何も言わず、ただ小さく頷いた。

「我らは我らの土地を探します。ここはあなたがたの神の土地でしょう」

伸親はようやく、生まれ育った島を出て生きる意味を理解した。

人の世は儂い。

権力もうつろう。

時勢も変われば、民の暮らしも変わっていく。

だが、人はまた、変わらないものを伝えていけるのだ。そしてそれが、誰かの慰めにもなり、人が生きた証でもあるのだろう。

「行く先はもう決めておられるのですか」

「それはまだ」

「ではあなた方の行き先を占いましょうか。禎嘉王がそうだったように」

神主の申し出に伸親は驚き、そして笑った。

「そうだな。ここまで重なる定めなら、先人に倣いましょう。行盛殿も構いませんか」

「所詮、定まらぬ流浪。是非も無い。天に任せるもまた一興やもしれぬな」

笛の音のような鳶の鳴き声が出た。

伸親と行盛は空を見上げる。

円を描いて鳶は遠く峰の向こうに飛び去っていった。

どこに向かおうとも、生きてはいける。力強い熱が、伸親の腹の底から沸き上がっていた。

*

「何もこんなところまで先人に習わずともよかったのだがな」

神社の客間で旅支度をしながら、行盛は苦笑いをした。

神主が占った方角は伸親と行盛を分かつものだった。

伸親は更に扇山。行盛は南の海。かつて禎嘉王とその息子が別々の場所に根を下ろしたように、伸親と行盛もまた、別の地に流れていくのだ。

「あの船は行盛殿が使うといい。操れぬことはないのでしょうか？」

行盛は海戦の中、水軍を指揮していたのだ。船の知識が全くないわけではない。

「いいのか」

「私では海賊と遭遇してもなす術ありませんから」

それは伸親が厳島への帰還を諦めたということでもあった。

未練はあった。

それでも命を賭して自分を守ろうとした母や行盛の行動を無下にする気にはならなかった。

「お主だけでは心許ない。誰か、残りたいものはいるか」

行盛が部下たちに声をかけると、まだ若いひとりの武士が手を上げた。

「……某が」

「中岡か。では頼む」

「承知つかまつりました」

若い侍は畏まり、行盛に頭を下げた。

「そろそろ立とう。良い日差しだ」

行盛が勢いよく、障子を開ける。

「行盛殿！」

伸親は出ていこうとする行盛を呼び止めた。

だが言葉が続かない。たった数日、共に過ごしたただけだった。何も知らなかった自分を、守り、この地まで連れてきてくれた男だが、伸親は行盛のことを何も知らないことに気がついた。こんなときにかける言葉すらわからないのだ。

行盛は足を止める。

「……達者で。叔父上」

「行盛殿こそ、達者で」

とっさに同じ言葉を返す。言葉にならない言葉以上の何か。互いに同じことを思っている。そう伝えれば良いと仲親は願う。

行盛が手と心を尽くしたものが、今、自分の中に残っている。

仲親は行盛たちが去っていく姿を鳥居から見守った。行盛の姿が見えなくなると、仲親は何かが一とつ終わったことを実感した。

「我々もそろそろ行きましょうか」

中岡が仲親に声をかけた。

「中岡殿は本当に私と共に行くつもりですか。今ならまだ」

中岡は行盛が去った道に目を向けた。

「仲親殿。我らは花のようなものです。沙羅双樹の花のように、花開いては夜には落ちる。それでも樹木は根付いてまた次の花を咲かす。私はあなたの次の花がどのようなものか、見届けたくないので。神のための舞は、どこであっても舞えるでしょう」

中岡は懐から箆簀を取り出して見せた。

「これは……」

「行盛殿の箏箏です。託かりました」

「借りてもいいですか」

「どうぞ」

伸親は小さな箏箏を唇に当てた。

細く長く、息を吹き込むと澄み切った張り詰めた音がした。

指が跳ねると、懐かしい音階が響いた。

行盛に届くだろうか。

姿が見えなくなった行盛のために、伸親は笛を奏で続けた。

吹き終わると、伸親は中岡に箏箏を返す。

「……行きましょう」

伸親は行盛が行った道に背を向け、歩き出す。

中岡は笛を懐にしまうと、伸親の後についていった。

一次審査通過作品

- 「御田祭」夢酔藤山
「帰還」樋口健司
「第二の秘宝」原田憲一
「百済王伝説」宮内露風
「虹の架け橋」滝川幸悦
「百済の里ロマン」廣田新市
「梅と桜と暗号と」大野夏櫻
「海笑う」林野浩芳
「オサラバー」いっき
「一か月のふるさと」夢野かなえ
「秋を駆ける三郷」麻倉トコ
「姫さま、家を出る」松田紙弥
- 「五本松峠」古川久師
「星墜つる神門」内村光寿
「師走祭り」中邑房夫
「ドンタロ姫とコニキシ太郎」希望
「あの日の指紋 印さるるなり」草刈咲桜
「はるかなる百済の弥勒」香月雪乃
「草王宮」市川謠
「花盗人」鈴木快
「流浪にうつろう沙羅双樹」潮楼奈和
「丹青の川」馬場広大
「第百四回みさと文学賞受賞者」青井円

お知らせ

第5回「西の正倉院 みさと文学賞」開催決定!!

好評につき「西の正倉院 みさと文学賞」は第5回も開催が決定いたしました。賞の詳細は下記の URL をご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

<https://mrt.jp/misatobungaku/>



第3回「西の正倉院 みさと文学賞」受賞作品がラジオドラマ化

令和4年1月16日(日)、MRT ラジオにて、第3回「西の正倉院 みさと文学賞」優秀賞 (MRT 宮崎放送賞) 受賞作品「子らは炎に導かれ」のラジオドラマが放送されました。

「西の正倉院 みさと文学賞特別番組 ～子らは炎に導かれ～」

原作：寺西輝将 脚色：井出真理 音楽：横山起朗

YouTube でも視聴可能です。ぜひご視聴ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=zuwyQOWoz6I>



第4回「西の正倉院 みさと文学賞」作品集

2022年 4月 22日 初版発行

編 者 「西の正倉院 みさと文学賞」実行委員会
(宮崎県美郷町、MRT宮崎放送)

装 幀 孝学直

協 力 一般社団法人日本放送作家協会

後 援 宮崎日日新聞社

企 業 版
ふるさと納税
協 力 企 業
株式会社大興不動産、株式会社イワハラ、株式会社アッ
プス、株式会社丸誠電器、株式会社創建、株式会社ケー
ブルメディアワイワイ、株式会社南日本環境センター、
株式会社アプニール、株式会社昭栄、大正測量設計株
式会社 宮崎支店、合同会社オフィスホンマ、株式会
社長田建築企画設計事務所、三桜電設株式会社

販 売 部 五十嵐健司

編 集 人 鈴木収春

発 行 人 石山健三

発 行 所 クラーケンラボ
〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-14 A&Xビル4F
TEL 03-5259-5376
URL <https://krakenbooks.net>
E-MAIL info@krakenbooks.net

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

©Misato Bungakushou, 2022, Printed in Japan.

ISBN 978-4-910315-12-6

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。